

平成26年度

神戸市埋蔵文化財年報



2017

神戸市教育委員会

平成26年度  
神戸市埋蔵文化財年報

2017

神戸市教育委員会





fig.1 生田遺跡第8次調査 I区全景（東から）



fig.2 兵庫津遺跡第62次調査 調査地遠景（南西から）



## 序

神戸市域には古来多くの人々が住み、その営みの痕跡である遺跡が市内のいたるところに数多く存在します。遺跡の範囲内で開発事業が行われる前には発掘調査を行い、かつてそこに暮らした人々の営みに光をあてます。しかし、その遺跡は発掘調査後その姿を消していくものが少なずありません。発掘調査で知ることのできた人々の営みは、記録として未来永劫伝えていかなくてはなりません。またその成果を市民の皆様に還元し、活用するための事業も当教育委員会では力を入れています。

本書では、平成26年度に実施した32遺跡、39件の発掘調査成果を、概要として収録いたしました。本書が神戸の歴史を今一度見直し、埋蔵文化財へのご理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に、厚くお礼申し上げます。

平成29年3月

神戸市教育委員会



## 例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成26年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

### 調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工　樂　善　通　　大阪府立狭山池博物館館長

菱　田　哲　郎　　京都府立大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長　　雪村新之助

社会教育部長　　東野展也

文化財担当部長（文化財課長事務取扱）　　安達宏二

埋蔵文化財担当課長（埋蔵文化財係長事務取扱）　千種　浩

文化財専門役　　丸山　潔

文化財課担当係長　前田佳久　斎木　巖

埋蔵文化財センター担当係長　安田　滋

事務担当学芸員　山口英正　池田　毅　井尻　格　中村大介

調査担当学芸員　谷　正俊　富山直人　内藤俊哉　浅谷誠吾　川上厚志

　　井上麻子　山田侑生　齋藤文佳　荒田敬介　岡田健吾

埋蔵文化財センター担当学芸員　口野博史　黒田恭正　佐伯二郎　阿部　功

震災復興派遣職員（岩手県陸前高田市）　西岡誠司　阿部敬生

2. 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。

3. 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 平成26年度事業の要のうち、1～4については前田佳久が執筆し、5については安田滋が執筆した。III. 平成26年度の保存科学調査・作業の概要是中村大介が執筆した。付論、「小路大町遺跡第5次調査の古環境分析」はパリノ・サーヴェイ株式会社による。本書の編集は井尻が行った。

4. 調査現場の写真撮影、遺構図のトレースなどについては、各調査担当者が行った。

5. 卷頭カラー fig. 1 は丸山、fig. 2 は（株）アコード、表紙写真・裏表紙写真は杉本和樹氏（西大寺フォト）が撮影を行った。

6. 表紙写真は兵庫津遺跡第62次調査出土の土製品である。裏表紙写真は兵庫津遺跡第62次調査出土の陶器である。

# 目 次

## 序 例言

I. 平成26年度 事業の概要 .....	1
II. 平成26年度の発掘調査 .....	15
1. 森北町遺跡 第28次調査 .....	17
2. 岡本東遺跡 第2次調査 .....	21
3. 西岡本遺跡 第11次調査 .....	25
4. 岡本北遺跡 第10次調査 .....	27
5. 本山遺跡 第39次調査 .....	29
6. 西平野遺跡 第4次調査 .....	29
7. 郡家遺跡 第92次-a調査 .....	31
8. 御影郷古酒蔵群 第6次調査 .....	35
9. 篠原遺跡 第33次調査 .....	39
10. 五毛遺跡 第3次調査 .....	41
12. 日暮遺跡 第39次調査 .....	43
13. 日暮遺跡 第40-1次・40-2次調査 .....	45
14. 日暮遺跡 第41次調査 .....	49
15. 日暮遺跡 第42次調査 .....	53
16. 生田遺跡 第8次調査 .....	55
17. 旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道 .....	59
18. 楠・荒田町遺跡 第57次調査 .....	61
19. 祇園遺跡 第21次調査 .....	63
20. 兵庫津遺跡 第62次調査 .....	67
21. 兵庫津遺跡 第63次調査 .....	79
22. 兵庫津遺跡 第64次調査 .....	81
23. 大開遺跡 第15次調査 .....	83
24. 上沢遺跡 第60次調査 .....	87
25. 丸沢遺跡 第3次調査 .....	89
26. 五番町遺跡 第13次調査 .....	93
27. 神楽遺跡 第15次調査 .....	97
28. 大橋町東遺跡 第6次調査 .....	99
29. 松野遺跡 第45次調査 .....	101
30. 大田町遺跡 第18次調査 .....	103
31. 鷹取町遺跡 第2次調査 .....	105
32. 野田遺跡 第4次調査 .....	107
33. 南別府遺跡 第6次調査 .....	109
35. 新方遺跡 第53次調査 .....	111
36. 枝吉遺跡 第3次調査 .....	113
37. 出合遺跡 第47次調査 .....	115
38. 出合遺跡 第48次調査 .....	119
39. 出合遺跡 第49次調査 .....	121
III. 平成26年度の保存科学調査・作業の概要 .....	123
1. 旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道 .....	123
2. 小路大町遺跡第5次調査の古環境分析 .....	125

# 挿図目次

fig. 1 生田遺跡第8次調査 1区全景 [巻頭カラー]	fig.36 造構平面図・断面図	26
fig. 2 兵庫津遺跡第62次調査 調査地遠景 [巻頭カラー]	fig.37 SB01埋土堆積状況 (北東から) [写真]	26
fig. 3 金画展示「地下から出てきた神戸の宝もの」 ..... 8	fig.38 SB02検出状況 (南東から) [写真]	26
fig. 4 出張授業「埴輪づくり」[写真] ..... 8	fig.39 調査地位置図 1:2,500	27
fig. 5 金画展示「袋いの考古学ーおしゃれと権力ー」 ... 8	fig.40 造構平面図	28
fig. 6 五色塚古墳まつり [写真] ..... 8	fig.41 調査地位置図 1:2,500	29
fig. 7 おおとし山まつり [写真] ..... 8	fig.42 造構平面図	30
fig. 8 神戸学院大学出張展示・展示実習 [写真] ..... 8	fig.43 調査地位置図 1:2,500	31
fig. 9 体験考古学講座「炭火でガラス玉をつくろう」 ... 8	fig.44 調査区配置図	31
fig.10 企画展示「昭和のくらし・昔のくらし 9」	fig.45 1区 東壁土層断面図	32
昭和のあそび・昔のあそび [写真] ..... 8	fig.46 1区 第1造構面平面図	32
fig.11 平成26年度埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 ..... 11	fig.47 1区 第2造構面全景 (南東から) [写真]	33
fig.12 調査地点位置図 (1) ..... 12	fig.48 1区 第2造構面平面図	34
fig.13 調査地点位置図 (2) ..... 12	fig.49 1区 SD202検出状況 (南西から) [写真]	34
fig.14 調査地点位置図 (3) ..... 13	fig.50 1区 SX204 (左)・SD202 (右) 検出状況	34
fig.15 調査地点位置図 (4) ..... 13	fig.51 調査地位置図 1:2,500	35
fig.16 調査地点位置図 (5) ..... 14	fig.52 第1面調査区全景 (南から) [写真]	36
fig.17 調査地点位置図 (6) ..... 14	fig.53 E・F区 第1面全景 (西から) [写真]	36
fig.18 調査地位置図 1:2,500 ..... 15	fig.54 A・B・C・D区 第2面全景 (南から) [写真]	37
fig.19 造構平面図 ..... 16	fig.55 E・F区 第2面全景 (南から) [写真]	37
fig.20 調査地位置図 1:2,500 ..... 17	fig.56 SK03全景 (南から) [写真]	37
fig.21 北半部 北壁土層断面図 ..... 18	fig.57 碇石建物A全景 (北から) [写真]	37
fig.22 第1造構面平面図 ..... 18	fig.58 A区 第3面全景 (西から) [写真]	38
fig.23 第2造構面平面図 ..... 19	fig.59 B・C・D区 第3面全景 (南から) [写真]	38
fig.24 北半部 第2造構面東側全景 (西から) [写真] ... 19	fig.60 A区 突断割り状況 (東から) [写真]	38
fig.25 北半部 穴室建物内土坑SK212・SK213 (西から) [写真] ... 19	fig.61 B区 第3面石垣検出状況 (西南西から) [写真]	38
fig.26 第3造構面平面図 ..... 20	fig.62 調査地位置図 1:2,500	39
fig.27 調査地位置図 1:2,500 ..... 21	fig.63 造構平面図	40
fig.28 北壁・西壁土層断面図 ..... 22	fig.64 調査地位置図 1:2,500	41
fig.29 SK202検出状況 (東から) [写真] ..... 23	fig.65 造構平面図	42
fig.30 第1造構面平面図 ..... 23	fig.66 調査地位置図 1:2,500	43
fig.31 第2造構面平面図 ..... 23	fig.67 第1造構面西端部造構平面図	44
fig.32 1区 第2造構面全景 (東から) [写真] ..... 24	fig.68 A区 第2造構面遠景 (南から) [写真]	44
fig.33 3区 第2造構面全景 (北から) [写真] ..... 24	fig.69 第2造構面平面図	44
fig.34 調査地位置図 1:2,500 ..... 25	fig.70 調査地位置図 1:2,500	45
fig.35 調査区平面図 (堅穴建物推定復元図) ..... 25	fig.71 造構平面図・南壁土層断面図	46

fig.72	1区－1・2 ピット検出状況（南西から）〔写真〕	46
fig.73	1区－2～3間 SP02断割り断面（北から）〔写真〕	47
fig.74	1区－2～3間 SP03・SP04断割り断面（南西から）	47
fig.75	1区－4 検出した線路（東から）〔写真〕	47
fig.76	2区－2 黒灰色砂質シルト面全景（南から）	47
fig.77	2区－2 西半ピット断割り断面（南から）〔写真〕	48
fig.78	2区－4 SP09半裁断面（東から）〔写真〕	48
fig.79	2区－5 SP13断割り断面（北から）〔写真〕	48
fig.80	調査地位置図 1:2,500	49
fig.81	調査区東壁・南壁土層断面図	50
fig.82	1区 第1遺構面全景（北西から）〔写真〕	50
fig.83	1区 第1遺構面全景（西から）〔写真〕	50
fig.84	第1遺構面平面図	51
fig.85	第2遺構面平面図	51
fig.86	1区 第2遺構面全景（北西から）〔写真〕	52
fig.87	2区 第2遺構面全景（西から）〔写真〕	52
fig.88	出土遺物実測図	52
fig.89	調査地位置図 1:2,500	53
fig.90	調査区東半 第1遺構面全景（北から）〔写真〕	53
fig.91	調査区西半 第1遺構面全景（北から）〔写真〕	54
fig.92	調査地位置図 1:2,500	55
fig.93	遺構平面図	56
fig.94	I区 遺構面全景（東から）〔写真〕	56
fig.95	IV区 遺構面全景（北東から）〔写真〕	56
fig.96	III区 遺構面全景（東から）〔写真〕	57
fig.97	II区 遺構面全景（南西から）〔写真〕	57
fig.98	SD09全景（南から）〔写真〕	57
fig.99	SE01全景（南から）〔写真〕	58
fig.100	SE02曲物検出状況（南東から）〔写真〕	58
fig.101	調査地位置図 1:5,000	59
fig.102	煉瓦下水道構築状況〔写真〕	60
fig.103	旧居留地内煉瓦下水道出土状況（北から）	60
fig.104	調査地位置図 1:2,500	61
fig.105	遺構平面図・土層断面図	62
fig.106	1区 遺構面全景（東から）〔写真〕	62
fig.107	2区 遺構面全景（東から）〔写真〕	62
fig.108	3区 遺構面全景（西から）〔写真〕	62
fig.109	調査地位置図 1:2,500	63
fig.110	1区 SB101検出状況（南から）〔写真〕	64
fig.111	1区 第2遺構面全景（南から）〔写真〕	64
fig.112	1区 第2遺構面平面図	64
fig.113	2～4区 第2遺構面平面図	66
fig.114	2～4区 第3遺構面平面図	66
fig.115	2～4区 第2遺構面全景（北東から）〔写真〕	66
fig.116	2-1区 土器棺墓 ST301検出状況（南から）	66
fig.117	調査地位置図 1:5,000	67
fig.118	Y区 町屋建物 SB 3 Y 031〔写真〕	69
fig.119	Y区 町屋建物 SB 3 Y 041〔写真〕	69
fig.120	X区・Y区 町屋建物 街路等配置図	69
fig.121	X区 護岸石垣遺構〔写真〕	70
fig.122	Y区 第3遺構面全景（北から）〔写真〕	70
fig.123	Y区 大型石組遺構（北から）〔写真〕	72
fig.124	Z区 城郭部分平面図	72
fig.125	兵庫城全景（南東から）〔写真〕	73
fig.126	Z区 南外堀（城外側）石垣転用材〔写真〕	74
fig.127	Z区 主郭内五輪塔組井戸〔写真〕	78
fig.128	調査地位置図 1:2,500	78
fig.129	遺構平面図	79
fig.130	1区 遺構面全景（南から）〔写真〕	80
fig.131	2区 遺構面全景（北から）〔写真〕	80
fig.132	調査地位置図 1:2,500	81
fig.133	調査区東壁断面図	82
fig.134	遺構平面図・土器棺等出土状況図	82
fig.135	調査区全景（北西から）〔写真〕	82
fig.136	調査地位置図 1:2,500	83
fig.137	東壁土層断面図	83
fig.138	第1遺構面平面図	84
fig.139	第2遺構面平面図	84
fig.140	第3遺構面平面図	84
fig.141	第4遺構面平面図	84
fig.142	第5遺構面平面図	85
fig.143	S K 401平面図・断面図	85
fig.144	第3遺構面全景（北から）〔写真〕	86
fig.145	第4遺構面全景（北から）〔写真〕	86
fig.146	調査地位置図 1:2,500	87
fig.147	調査区南半全景（北西から）〔写真〕	88

fig.148	遺構平面図	88	fig.186	調査範囲図	110
fig.149	調査位置図 1:2,500	89	fig.187	調査区平面図	110
fig.150	北壁土層断面図	90	fig.188	調査位置図 1:2,500	111
fig.151	調査区全景（西から）〔写真〕	90	fig.189	第2遺構面平面図	112
fig.152	遺構平面図	91	fig.190	第4遺構面平面図	112
fig.153	SK04・SK05 平面図・断面図	91	fig.191	調査位置図 1:2,500	113
fig.154	SK04検出状況（南から）〔写真〕	92	fig.192	調査区配置図	114
fig.155	SK06断面（西から）〔写真〕	92	fig.193	I区 遺構面全景（西から）〔写真〕	114
fig.156	SD02平面図・断面図	92	fig.194	I区 南壁土層断面図	114
fig.157	SD02検出状況（東から）〔写真〕	92	fig.195	調査位置図 1:2,500	115
fig.158	調査位置図 1:2,500	93	fig.196	II区 東壁土層断面図	116
fig.159	第1遺構面平面図	94	fig.197	第1遺構面平面図	117
fig.160	第2遺構面平面図	94	fig.198	SB102検出状況（東から）〔写真〕	118
fig.161	第2遺構面下層ピット群平面図	95	fig.199	II区 第2遺構面全景（北から）〔写真〕	118
fig.162	I区南半 第1遺構面全景（北東から）〔写真〕	95	fig.200	III区 第2遺構面全景（北東から）〔写真〕	118
fig.163	I区北半 第2遺構面全景（北東から）〔写真〕	95	fig.201	調査位置図 1:2,500	119
fig.164	出土遺物実測図	96	fig.202	I区 北壁土層断面図	120
fig.165	調査位置図 1:2,500	97	fig.203	調査区配置図	120
fig.166	第1遺構面平面図	98	fig.204	I区 旧河道上層検出状況（西から）〔写真〕	120
fig.167	第2遺構面平面図	98	fig.205	調査位置図 1:2,500	121
fig.168	調査区西侧 S D101検出状況（西から）〔写真〕	98	fig.206	I区・2区 遺構平面図	122
fig.169	調査区西侧 第2遺構面全景（北東から）〔写真〕	98	fig.207	I区 西壁・北壁土層断面図	122
fig.170	調査位置図 1:2,500	99	fig.208	2区 東壁・西壁土層断面図	122
fig.171	第1遺構面全景（南から）〔写真〕	100	fig.209	I区 河川堆積層上面全景（南から）〔写真〕	122
fig.172	第2遺構面平面図	100	fig.210	2区 河川堆積層上面全景（南から）〔写真〕	122
fig.173	調査位置図 1:2,500	101	fig.211	下水渠検出状況〔写真〕	123
fig.174	遺構平面図	102	fig.212	出土状況記録作業〔写真〕	123
fig.175	調査位置図 1:2,500	103	fig.213	発泡ウレタン梱包状況〔写真〕	124
fig.176	遺構平面図	104	fig.214	吊り上げ作業〔写真〕	124
fig.177	調査位置図 1:2,500	105	fig.215	積み込み作業〔写真〕	124
fig.178	調査範囲図	106	fig.216	仮保管状況〔写真〕	124
fig.179	2区 SB01検出状況（北西から）〔写真〕	106			
fig.180	I区 第2遺構面（南東から）	106			
fig.181	調査位置図 1:2,500	107			
fig.182	遺構平面図	108			
fig.183	I区全景（北から）〔写真〕	108			
fig.184	出土遺物実測図	108			
fig.185	調査位置図 1:2,500	109			

## 付論挿図目次

図1 試料採取位置	125	図版1 珪藻化石・昆虫遺体・花粉化石・種実遺体	134
図2 花粉化石群集の層位分布	127	図版2 木材（1）	135
		図版3 木材（2）	136

## 表 目 次

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧	2	表9 画像データなどの貸出（3）	5
表2 発掘調査面積	2	表10 平成26年度企画展	6
表3 発掘調査面積別件数	2	表11 平成26年度歴史講演会	6
表4 考古資料の館外貸出	3	表12 平成26年度埋蔵文化財発掘調査一覧（1）	9
表5 資料調査成果の公表	3	表13 平成26年度埋蔵文化財発掘調査一覧（2）	10
表6 特別利用	3	表14 平成26年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧	10
表7 画像データなどの貸出（1）	3	表15 平成26年度自然科学分析一覧	124
表8 画像データなどの貸出（2）	4		

## 付論表目次

表1 珪藻分析結果	126	表4 樹種同定結果	130
表2 花粉分析結果	127	表5 器種別種類構成	130
表3 種実同定結果	129	表6 昆虫同定結果	132

# I. 平成26年度 事業の概要

## 1. 事業体制

神戸市教育委員会文化財課は、平成23年度から埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に関わる届出などの窓口業務、試掘調査や本調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復及びその後の管理と活用に関しては、神戸市埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で得られた写真や図面等は、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座等を埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や博物館等への貸出にも対応している。

また、平成26年度についても、東日本大震災の復興調査支援のため、岩手県陸前高田市に4月から2名を1年間派遣している。

## 2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成26年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は、630件（前年度711件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が575件（前年度659件）であった。また、開発行為事前審査129件（前年度143件）、試掘調査依頼は97件（前年度186件）であった。以上のように届出の件数は前年度に比べて1割程度の減少傾向が認められた。試掘調査については、近隣データーを積極的に活用したことや、建物の解体に伴う届出に関しては基礎解体時の立会を行うことで試掘調査を兼ねるようにした結果ほぼ半減している。窓口やファクス等による包蔵地の確認、問い合わせは年間で約6800件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデーターに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

## 3. 埋蔵文化財調査事業

平成26年度に実施した埋蔵文化財調査事業（調査事業41件・整理事業4件）は45件で、それに要した経費の総額は、160,906千円であった。

### i. 国庫補助事業

発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は、国庫補助事業として、規程と基準により公費を充当している。平成26年度の緊急発掘調査事業費は49,575千円であった。

### ii. 市内発掘調査

昨年度と同様に、発掘調査件数は、基礎構造の設計変更により発掘調査を回避すること

ができたものもあるが、昨年度より若干増加している。

発掘調査面積は32,081m<sup>2</sup>（延べ70,613m<sup>2</sup>）で、このうち民間関連事業によるものが31,853m<sup>2</sup>（延べ70,103m<sup>2</sup>）と約99%を占めている。25年度は近年の傾向である2～3割程度の公共事業があったが、26年度は民間の大型商業施設の建設に伴う調査（25,000m<sup>2</sup>）があったため、公共事業の占める割合が大きく減少することになったと考えられる。

面積別でみると、300m<sup>2</sup>以下の件数比率が約81%と昨年度よりも更に増加している。更に100m<sup>2</sup>以下は約66%を占めており、調査面積の小規模化も顕著である。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても基礎が深くなり、遺構などに抵触することが多くなつたことによるものと考えられる。今回特筆すべきは、市街地部において25,000m<sup>2</sup>の発掘調査があったことで、市街地における単年度の調査面積としては過去最大の調査となった。

表1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No	内 容			件数	
1 発見・発掘届				630件	
	i 民間の事業に伴う発掘届（保護法第93条）				
	ii 公共の事業に伴う発掘通知（保護法第94条）				
ii 発見届・通知（保護法第96・第97条）			1件		
2 開発行為事前審査等各種申請				129件	
3 試掘調査（依頼件数）				97件	
4 発掘調査（大規模確認調査も含む）				41件	
	i 公共事業に伴う発掘調査				
	ii 民間の事業に伴う発掘調査				
	iii 園場整備事業に伴う発掘調査				
5 工事立会				54件	
6 整理作業（復興調査整理作業を含む）				4件	

表2 発掘調査面積（単位:m<sup>2</sup>）

	公共関連事業	民間関連事業	合 計
調査面積	228	31,853	32,081
延調査面積	510	70,103	70,613

表3 発掘調査面積別件数

調査面積	件数	%	調査面積	件数	%
~100m <sup>2</sup>	27	66	1,001～2,000m <sup>2</sup>	2	5
101～300m <sup>2</sup>	6	15	2,001～5,000m <sup>2</sup>	0	0
301～500m <sup>2</sup>	4	10	5,000m <sup>2</sup> 以上	1	2
501～1,000m <sup>2</sup>	1	2	合計	41	100

### iii. 現地説明会

発掘調査の現場において遺跡を体感する機会として現地説明会を行った。

大型商業施設建設のため調査を実施した兵庫津遺跡第62次調査では、実態が不明確であった兵庫城の堀が確認されるなど、平成26年6月28日、10月25日、12月20日、平成27年3月28日の4回の現地説明会を開催し、合計で2000名を超える参加者があった。また、生田遺跡第8次調査では、平成27年1月31日に雨天にもかかわらず75名の熱心な見学者があった。

#### 4. 刊行物一覧

平成26年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『大開遺跡第14次発掘調査報告書』額価700円、『大橋町東遺跡第1次～第6次発掘調査報告書』額価700円、『平成25年度神戸市埋蔵文化財年報』額価900円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成27年度版）』額価450円 『神戸の遺跡シリーズII 垂水の遺跡（第2版）』額価200円。

#### 5. 埋蔵文化財の公開活用事業

##### i 考古資料の特別利用等

埋蔵文化財センターでは発掘調査の一環として出土遺物の復元・整理作業および木製品・金属製品等の保存処置ならびに、発掘調査報告書の作成をおこなっている。整理作業の終了した遺物および写真・図面等の記録類は埋蔵文化財センターにて収蔵され、公開活用事業や調査研究等の利用に供している。当年度における資料の特別利用は表4～9のとおりである。

表4 考古資料の館外貸出

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	兵庫県立考古博物館	平成26年度震神・源氏大震災20周年企画展「官兵衛を祀る五国之城」で展示するため	穠谷城跡出土埴瓦 1点 同写真2点	3
2	那路市埋蔵文化財センター	平成26年度企画展「黒田官兵衛 成る」で展示するため	穠谷城跡 出土資料6点 同写真・図2点、湯山遺跡 出土資料1点 同写真・図2点	23
3	那路市博物館	「日本発掘・発掘された日本列島2011」で展示するため	西求女塚古墳出土青銅鏡5点（5号鏡・6号鏡・7号鏡・8号鏡・11号鏡）、同出土資料5点	30
4	桂浜町郷土資料館	『ヒコの生涯と新聞史』で展示及び図録に掲載するため	旧田戸外国人居留地遺跡出土埴瓦3点 同写真資料1点	4

表5 資料調査成果の公表

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	『古代文化』第66巻第2号掲載の「後期倭鏡研究序説－旋式狀紋鏡系を中心に－」の挿図として使用のため	鬼神山古墳出土鏡の図面	
2	個人	大手前大学歴史研究所にて資料の三次元計測を行ったことを紹介するため	西求女塚古墳1号鏡片	

表6 特別利用

No.	申請者（団体名・個人名）	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	修士論文作成のため（検査・実測・撮影）	吉田南遺跡 手付鉢1点、吉田南遺跡 台付鉢1点	2
2	個人	修士論文作成のため（検査・撮影）	白水城跡古墳出土 車輪石4点 同2点	13
3	個人	明石市立市立博物館特別展示調査のため（検査・実測・撮影・拓本）	二ツ星形跡出土瓦2点、白輪寺遺跡出土瓦1点11点 居住小石遺跡出土瓦2点 白輪寺遺跡出土瓦59点	80
4	個人	懸索同位体分析の可能性の検討のため（検査・撮影）	本山遺跡第33次出土木材 桁り点 戎町遺跡第4次出土木材 1点 大岡遺跡第14次 小路大町遺跡第5次出土木材	13
5	個人	修士論文作成のため（検査・撮影）	吉田南遺跡 木製車輪1点	1
6	個人	懸索同位体分析のため（検査・撮影・資料採取）	本山遺跡第33次出土木材 桁り点 戎町遺跡第4次出土木材 5点 福田北山古墳出土木材 1点 東垂・日向遺跡第5次出土木材 1点	16
7	個人	動物遺存体における歯エヌメル質の炭素安定同位体分析のため（検査・実測・撮影・試料採取）	吉田南遺跡 上沢遺跡第35次 須崎遺跡第31次御歳道跡第45点 小路大町遺跡第4次出土 獣物遺存体	21

表7 画像データなどの貸出（1）

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	山陽電気鉄道㈱	「ESCORT」、「ホット&HANSHIN」、「NATTJSJ」に掲載するため	五色屋古墳 全景 画像データ1点	1
2	朝日新聞出版 書籍編集部	文化庁編「発掘された日本列島2011」に掲載するため	西求女塚古墳 画像データ2点	2
3	神戸泉州社	「歴史 REAL 古代天皇陵と古古墳の謎」に掲載するため	五色屋古墳 画像データ1点	1
4	読売新聞東京本社 読売KODOMO 新聞編集室	読売KODOMO 新聞5月8日号に掲載するため	西求女塚古墳出土鏡集合写真 画像データ1点	1
5	滋賀ふれあいまちづくり議会	「わがまち読本」に掲載するため	淀江北野遺跡 画像データ2点（出土木簡1点・「釋」墨書き1点） 住吉山古墳 画像データ2点（出土埴輪1点・全鏡1点） 西求女塚古墳 画像データ1点（崩れた石室1点） 伝説の古墳の佐渡園 画像データ1点	6

表8 画像データなどの貸出(2)

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
6	三重県立歴史文化財センター	DVD「三重の古墳」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点「史跡五色塚古墳・小堀古墳発掘調査・復元整備報告書」図版1-1、2-1	2
7	NHK解説委員室	NHK制作番組「くらし伝説」に使用するため	湯山遺跡「ゆの山古墳」画像データ	9
8	岡本梅林まちづくりの会	岡本梅林まちづくりの会発行「会報誌『会報』」に掲載するため	岡本梅林古墳群 石棺 画像データ2点 埋蔵文化財センター外観 画像データ1点	3
9	大阪府立近づき鳥類博物館	平成30年度夏季企画展「大阪平野はむかし、海だった時に生えた大仮の古代人」展の展示「キモおじいさんた子、リーフレット」ホームページ等の広報資料に掲載するため	五色塚古墳 画像データ2点「史跡五色塚古墳・小堀古墳発掘調査・復元整備報告書」図版2-1、6-2	2
10	㈱K波書店	岡本雅氏氏著「民衆の創造」まつわらぬ生き。隠された多様性」に掲載するため	五色塚古墳 墓守写真 画像データ1点	1
11	㈱雄山園	「季刊考古学」12号に掲載するため	兵庫津遺跡 画像データ4点「漁労具と動物遺存体写真・貝・貝殻・魚類」	4
12	㈱神戸っ子出版	三井アカントリバーカ ウエブマガジンに掲載するため	五色塚古墳 画像データ5点	5
13	㈱吉田弘文館	「近畿の名城を歩く」下、「兵庫城」に掲載するため	兵庫城の「現在の地図と元禄絵の合成図」 画像データ1点	1
14	泡瀬ゼミナール	ホームページ「教科書ノート(歴史)」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点(南上空からのCG画像)	1
15	たつの市教育委員会	宝作海駅駅舎特別展「兵庫城と兵庫城～堀田の家～」(仮称)開催に伴う展示及び展示用CGに掲載するため	羽柴秀吉・別所長治肖像 画像データ1点	1
16	㈱平凡社	「別冊太陽 日本国史」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点(円筒埴輪集合写真)	1
17	神戸市企画調整局	兵庫運河活性化の資料に掲載するため	兵庫津遺跡 航空写真 画像データ1点(南上空から)	1
18	㈱フレーメン	NHK Eテレ制作番組「テストの花道」に使用するため	三角縊・神一仏多羅縊 画像データ1点 勾玉集合写真 画像データ1点 铁製武器(集合写真) 画像データ1点	4
19	セインズペリー 日本藝術研究所	英国の高校教育向けオンライン英語教材に使用するため	住吉宮跡 東古墳馬形埴輪 画像データ1点	1
20	㈱イディー	山陽電車「ESCORT」11月号に掲載するため	兵庫津遺跡 画像データ3点(人骨(直角)2点・頭骨1点) 兵庫原人骨・伏見原安定期同体グラフ 画像データ1点	4
21	垂木商店街振興組合	ホームページ「歴史・文化・観光」の紹介に使用するため	おおとし山まつり 画像データ1点	1
22	㈱ム・インター・ショナル	幻冬舎刊「隠岐ゼロからの古墳入門」に掲載するため	五色塚古墳 航空写真・墳丘墓石写真 画像データ2点	2
23	㈱山陽アド	山陽電車ボスター「行楽ごよみ」11月沿線イベントに掲載するため	おおとし山まつり 画像データ1点	1
24	日本道跡学会	「古跡学の宇宙～戰後黎明期を築いた13人の記録～」に掲載するため	五色塚古墳 整備前航空写真・整備後航空写真 画像データ2点 復元埴輪列写真 画像データ1点	3
25	㈱古文書院	「社会科資料室里6」に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点(北上空から)	1
26	木樽学会	「木樽研究」第36号に掲載するため	深江北町 遺跡 出土木樽 画像データ4点	4
27	明石市	明石市立文化博物館企画展「発掘された明石の歴史展」開館および館内のパネル展示に掲載するため	神出古墳群地 画像データ42点	42
28	兵庫県立歴史博物館	特別企画展「災害と歴史遺産」でのパネル展示および展示用CGに掲載するため	西赤坂古墳 地面で崩壊した壺穴式石室 画像データ2点 別所人代宿泊跡・津波堆積物等 画像データ1点 空谷站跡飛行機墜落現場 画像データ7点	10
29	㈱フォトオリジナル	小学生向け教材「マイディーバル」に掲載するため	瓦玉瓦 画像データ1点 製陶窯(玉焼) 画像データ1点	2
30	㈱G.B.	「週刊日本の神社」48号に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点(北東上空から)	1
31	山陽電気鉄道㈱	山陽電車ハイキングカレンダーに掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点	1
32	和泉市教育委員会	「和泉市の歴史」第4巻に掲載するため	西赤坂古墳 航空データ2点(航空写真・出土鏡群) 2	2
33	㈱浜島書店	「兵庫県 地域の歴史を調べよう」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ3点(航空写真・復元CG画像・復元前写真)	6
34	㈱ジビューターレコム 関西メディアセンター四国事務所	J-COM他制作テレビ番組「歴史街道」に使用するため	住吉宮跡古墳群 画像データ1点(馬形埴輪写真) 神戸市立出土勾玉写真 画像データ1点	2
35	個人	「古代王城の形成と埴輪生産」(同成社刊行予定)に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点(北上空から) 五色塚古墳 墳頂写真 画像データ1点(北上空から)	4
36	垂水区まちづくり課	垂水駅周辺の案内看板に掲載するため	五色塚古墳 墳頂写真 画像データ1点	1
37	合同会社インセクツ	60カットおでかけコンティンツ内の五色塚古墳組合証記に使用するため	五色塚古墳 墳頂写真 画像データ1点(北上空から) 五色塚古墳 墳頂写真 画像データ1点(西南から) 五色塚古墳 復元埴輪列写真 画像データ1点(西南から)	3
38	朝日新聞出版書籍編集部	「日本発掘」に掲載するため	西赤坂古墳出土埴輪写真 画像データ1点	1
39	㈱小学校	「グラフ」3月号に掲載するため	五色塚古墳出土埴輪集合写真 画像データ1点	1
40	神戸市議会議所	会話「神戸造り工芸」2015年3月号に掲載するため テレビ東京「出張!なんでも鑑定团in神戸」の町研究部分で使用するため	大歳山遺跡 画像データ2点(航空写真・大歳山土器写真) 湯山遺跡 画像データ3点	3
41	㈱トクサス	東神淡路大堤20年特別展「地震・噴火・洪水・災害復興の3万年史」で展示に掲載するため	湯山遺跡 画像データ1点 風呂岩 画像データ1点	2
42	兵庫県立考古博物館	東神淡路大堤20年特別展「地震・噴火・洪水・災害復興の3万年史」で展示に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点	1
43	(公財)姫路市政策研究所	「フィヨーレ姫路学園第21期」に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点	1
44	明石市	明石市発行「あかし文化遺産」に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点	1
45	阪神淡路大震災20年事業 実施委員会	「阪神淡路大震災20年事業」シンポジウムの記録に掲載するため	震災関連写真 画像データ41点	41

表9 画像データなどの貸出（3）

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
46	㈱ワクト	社会科教材「夏の生活 3年『社会』（2015年度）」に掲載するため	五色塚古墳 画像データ1点	1
47	㈱ニューサイエンス	ニュースイエンス社刊「先生上巻」（考古学ハンドブック）に掲載するため	大岡道跡出土先生時代前期土器集合写真 画像データ1点	1
48	個人	「考古学ジャーナルNo.698」「日神戸外国人居留地遺跡発掘調査報告書」に掲載するため	旧神戸外国人居留地道路 画像データ3点、「報告書」出版1.9.33	3
49	有限会社 地人館	㈱山峰書店発行「新・日本の歴史 第1巻」に掲載するため	五色塚古墳 航空写真 画像データ1点（北上空から）	1

## ii 埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

西区糀台にある埋蔵文化財センターを中心に、埋蔵文化財の公開活用の事業を行っている。埋蔵文化財センターの平成26年度入館者数は34,718人であり、うち小学校団体の入館が97校6,122人で、全体の約1/5弱を占めている。4・5月は歴史を習い始めた六年生が、1・2月は3学期に「古い道具とそれを使っていたころの暮らし」を学習する三年生の団体が、後述する冬季企画展「昭和のくらし・昔のくらし」見学のために来館している。この2時期には市内ののみならず、近隣市町からの見学もあった。

### ①企画展の開催

埋蔵文化財センターでは平成3年開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、平成17年度からは年4回以上の企画展を開催している。平成26年度も表10のとおり4回の企画展を開催した。

毎年春季の企画展は、先述したとおり、歴史学習を始める多数の小学校六年生の団体が訪れるところから、わかりやすく、歴史に興味が持てるような展示を心掛けている。当年度は『地下から出てきた神戸の宝もの』と題し、国・兵庫県・神戸市のそれぞれ文化財指定を受けた考古資料を一堂に集め、神戸市の歴史を考える上で重要な文化遺産を紹介した。

夏季企画展は、後述する夏休みを中心に実施している「体验考古学講座」のメニューの内、人気のある「勾玉づくり」や「ガラス玉づくり」に合わせて、その講座内容をより深く理解できるように『斐の考古学—おしゃれと権力—』と題して、発掘された装飾品や化粧道具などを中心に「身を飾ること」に関する展示をおこなった。

秋季企画展については、当年度が阪神・淡路大震災の発生から20年にあたることから、『大地に刻まれた災害史』と題して、発掘調査で見つかった、水害・地震・津波・火山災害等の自然災害の痕跡を示す土層転写資料等を中心には、絵画資料や文献資料も展示して、今一度災害の脅威を認識するとともに、災害への備えを喚起する展示をおこなった。また、この企画展に関連して産業技術総合研究所寒川旭氏を招き『遺跡から探る神戸の地震－地震考古学への招待－』、近大姫路大学松下正和氏を招き『古代・神戸の災害史』と題する講演会を実施した。

冬季企画展は毎年『昭和のくらし・昔のくらし』と題して『昭和』に使われた電化製品や家具・道具・文具・玩具などを展示するとともに、当時のお茶の間と台所を再現して当時のくらしづくりが理解できる展示を行っている。当年度で9回目となり毎回好評を博している。当回は特に50年前を振り返り、「東京オリンピックの開催」「東海道新幹線の開業」「ポートタワーの開業」にスポットを当て、関連する品々や写真的展示を行った。また、期間中のイベントとして、コマ回し・割ばし鉄砲・けん玉などのなつかしい遊びを体験する「昭和のあそび・昔のあそび」と旧車運転同好会の御協力によりミゼットなどの昭和に活躍した自動車による「昭和の車 ミニパレード」を実施した。また、日本玩具博物館の尾崎織女氏を招き『昭和のおもちゃ文化史』についてご講演いただいた。

表10 平成26年度 企画展

展覧会名	開催期間	日数	入館者数
地下から出てきた神戸の宝もの	4/12(土)～6/1(日)	48	10,139
装いの考古学 ～おしゃれと権力～	7/19(土)～8/31(日)	38	2,833
大地に刻まれた災害史	10/18(土)～12/7(日)	43	4,287
昭和のくらし・昔のくらし9	1/24(土)～3/8(日)	38	7,390

## ②体验考古学講座

埋蔵文化財センターにて、夏休みの期間中を中心に古代の技術によって銅鐸づくり・ガラス玉づくり等、古代の物づくりを体験する「体验！考古学講座」を10回予定していたが、台風接近のため2回が中止となり8回実施した。のべ567名の参加があった。

## ③歴史講演会の開催

各企画展にあわせ、展示をより深く理解できるような内容や、また後記する西区地域学の見学地にちなんだ内容、あるいは平成26年度の最新発掘成果を報告する内容で、神戸市教育委員会文化財課学芸員ならびに外部講師による講演会を計6回実施した。また、秋季企画展では特別に外部講師を招いて特別講演会を実施した。

表11 平成26年度 歴史講演会

月 日	講 演 名		参加者数
5月17日	「指定文化財で語る神戸の歴史」	神戸市教育委員会学芸員 安田滋	60
7月26日	「装いの考古学」	神戸市教育委員会学芸員 阿部功	50
11月1日	「遺跡から探る神戸の地震－地震考古学への招待－」	産業技術総合研究所 寒川旭 氏	71
11月15日	「古代・神戸の災害史」	近大姫路大学 松下正和 氏	56
11月29日	「戦国時代の神戸」	神戸市教育委員会学芸員 黒田恭正	69
1月31日	「昭和のおもちゃ文化史」	日本玩具博物館 尾崎穂女 氏	50
3月7日	「市内遺跡発掘調査報告会」	神戸市教育委員会学芸員 口野博史 斎木敬	31

## ④出張考古学講座・出張授業・出張講義

埋蔵文化財センターで行う体验講座以外にも、市内小学校や公民館からの依頼に基づいて学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体验講座や学校での地域の遺跡についての授業や、講義などを行っている。当年度は19団体、1,545人の参加があった。

## ⑤学校等との連携事業

連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習として、学生の企画した展示に関する展示実習指導を行った。その実習成果として平成26年11月8日～12月6日、同大学図書館において「古代西区の人々と海」「知っているようで知らない埴輪」のテーマで展示を行った。

また毎年、博物館実習を受け入れており、当年度は8月5日から9日の5日間、関西国際大学・京都造形芸術工科大学・神戸学院大学・神戸女子大学から計9名の実習生を受け入れ、考古資料の取り扱いや、資料写真撮影、保存科学、展示企画などの実習を行った。

6月2日～6月6日および11月10日～14日の2回、兵庫県下の中学校二年生の職業体験プログラムである「トライヤーウィーク」に協力し、市内13校から計16名の生徒を受け入れ、出土土器の洗浄など埋蔵文化財センターでの仕事を体验してもらった。

また毎年、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携し、神戸市生涯学習支援センターコミスクラブにおいて9月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展である『神戸市小

学校社会科作品展』において、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品を30点選定し、『埋蔵文化財センター賞』を授与した。

### iii 地域連携事業

各地域におけるイベントや各区役所・西図書館等と連携して埋蔵文化財の公開活用事業を実施した。

#### ①地域事業への参加・協力

西区においては、「西神中央公園桜まつり」(4月12日)、「西神工業団地IPフェア」(8月22日)、「櫛谷川まつり」(9月6日)、「(櫛谷)まちの遠足会」(10月3日)、「押部谷明石川リバーウォーク2014」(11月23日)等の地域におけるイベントにおいて参加・協力し、埋蔵文化財センターや地域の遺跡をパネルなどで紹介し、現地での遺跡説明などを行った。また西図書館とは「2014西図書館自由研究相談室」において学芸員が「昔のおしゃれ相談室」と題して講演し、また夏休みの期間中両館を回るクイズスタンプラリーを実施した。北区では毎年11月2・3日に北区道場町の農村環境改善センターにて開催される「道場町文化祭」に参加協力している。当年度は『道場町の古墳時代』をテーマに尼崎学園古墳群の出土遺物を中心に展示し、道場町の古墳時代を紹介した。

#### ②「五色塚古墳まつり」の開催

平成26年度、垂水区に所在する史跡五色塚古墳の活用を促進する目的として、垂水区役所と連携して、はじめて『五色塚古墳まつり』を6月14日(土)に開催した。それに先立つ5月31日(土)には地元霞ヶ丘小学校の六年生162名に授業の一環で小形の円筒埴輪を作ってもらい、当日埴丘上にその埴輪を並べた。また同校六年生の中から希望者を募り、まつり当日午前中に各自制作した埴輪を持ち、古代衣装を着て五色塚古墳の周囲をパレードした。午後は一般の方もできる、「勾玉づくり」「鏡づくり」「土器・埴輪づくり」などの古代体験を実施した。午前・午後合せて430人の参加者があった。

#### ③「おとし山まつり」の開催

毎年、垂水区役所と連携して11月の文化財保護月間の期間中に、垂水区にある大歳山遺跡公園(舞子細道公園)に復元されている弥生時代の竪穴建物を公開し、それと合わせて「勾玉づくり」「土器づくり」「塩づくり」「赤米おにぎり試食」などの古代体験イベントを開催している。当年度は11月2日に実施し、365名の参加があった。

#### ④「西区地域学」の開催

西区役所と連携し、毎年西区を中心とした遺跡などを見学するイベントを開催している。当年度は11月30日に「戦国時代の神戸」と題し、如意寺・端谷城跡・石峯寺・三木城跡・枝吉城跡をマイクロバスで移動して見学した。参加者は34名だった。またその前日は前記の歴史講演会として学芸員による「戦国時代の神戸」と題する講演会を実施した。

### iv 史跡五色塚古墳の公開

神戸市垂水区にある史跡五色塚古墳は日本で初めて築造当時の姿に復元された巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場としてまた、明石海峡を望む絶好のビューポイントとして毎年全国から多くの見学者がある。平成26年度の入場者は35,025人であった。そのうち小学校団体や専門的な説明を希望する団体には学芸員が赴いて説明を行っている。当年度は142団体、10,172人に説明を行った。



fig. 3 企画展示「地下から出てきた神戸の宝もの」



fig. 4 出張授業「埴輪づくり」



fig. 5 企画展示「装いの考古学—おしゃれと権力—」



fig. 6 五色塚古墳まつり



fig. 7 おおとし山まつり



fig. 8 神戸学院大学出張展示・展示実習



fig. 9 体験考古学講座「炭火でガラス玉をつくろう」



fig.10 企画展示「昭和のくらし・昔のくらしき」昭和のあそび・昔のあそび

表12 平成26年度煙草文化財発掘調査一覧（1）

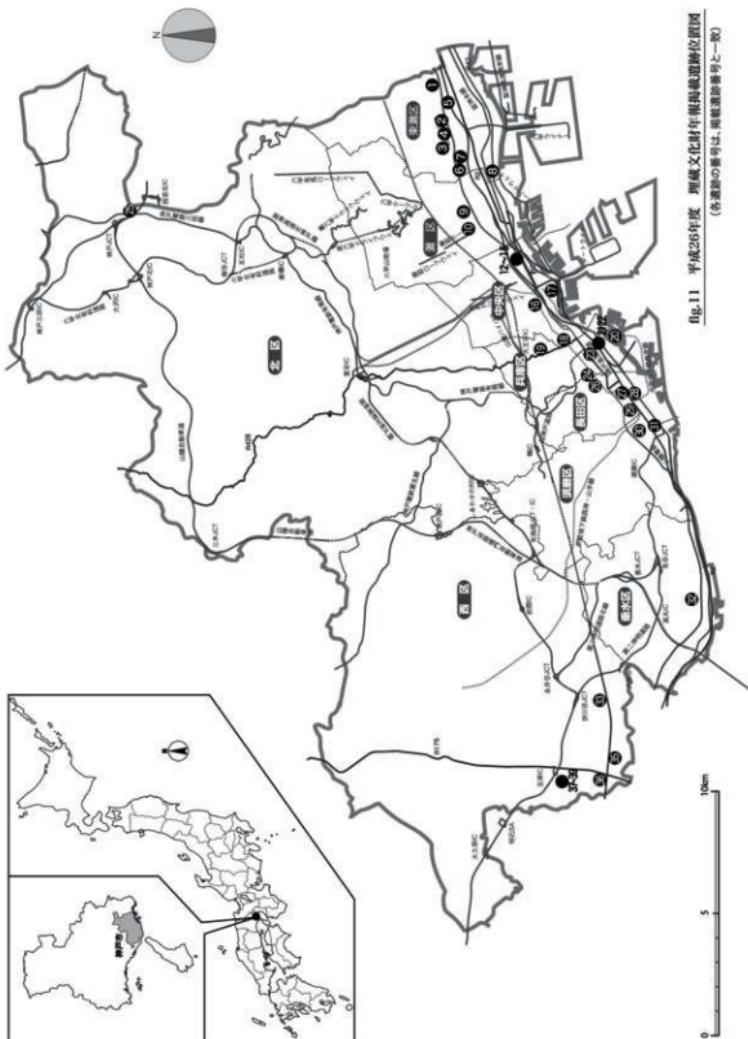
%	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延べ面積	調査期間	調査内容	調査原因
1	森北町遺跡 第3次調査	東灘区森北町4丁目6-20	神戸市教育委員会	川上厚志	17m <sup>2</sup> 17m <sup>2</sup>	26.10.20～ 26.10.27	平安時代以降の耕作地を検出した。平安時代の土師器・須恵器・瓦器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
2	岡本東遺跡 第2次調査	東灘区岡本7丁目3-14	神戸市教育委員会	井上麻子 鶴見文佳	290m <sup>2</sup> 417m <sup>2</sup>	26.7.1～ 26.8.12	縄文時代後期のビット・土坑・窓穴建物、古墳時代後期の自然道路、鍍合時代以降の耕作に関わるショット・溝を検出した。	保育園建設
3	西岡本遺跡 第1次調査	東灘区西岡本6丁目18-1	神戸市教育委員会	井上麻子	185m <sup>2</sup> 255m <sup>2</sup>	26.4.16～ 26.5.16	弥生時代・古墳時代のビット・溝などと耕作したほか、縄文時代の石器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
4	岡本北遺跡 第1次調査	東灘区岡本4丁目8-3	神戸市教育委員会	藤井太郎	23m <sup>2</sup> 23m <sup>2</sup>	26.7.28～ 26.8.12	弥生時代後期の窓穴建物を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
5	本山遺跡 第25次調査	東灘区本山町3丁目89-5、93-9	神戸市教育委員会	川上厚志	28m <sup>2</sup> 28m <sup>2</sup>	26.10.7～ 26.10.10	弥生時代のビット・溝を検出した。	共同住宅建設
6	西平野遺跡 第1次調査	東灘区御影3丁目321-12	神戸市教育委員会	藤井太郎	40m <sup>2</sup> 40m <sup>2</sup>	26.8.7～ 26.8.18	弥生時代の柱穴、室町時代の溝を検出した。近世の土塁からは鐵羽口・砾石が出土した。	市有地売却
7	郡家遺跡 第2次調査	東灘区御影7丁目308	神戸市教育委員会	石島二和	150m <sup>2</sup> 300m <sup>2</sup>	27.2.5～ 27.5.11	弥生・古墳時代の浜水や、弥生時代末～古墳時代前期の土塁などと耕作したほか、縄文時代の柱穴を検出した。次年度に継続検査。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
8	御影古酒蔵跡 第6次調査	東灘区御影御影町1丁目14、15番の一部	神戸市教育委員会	富山直人	520m <sup>2</sup> 1,560m <sup>2</sup>	27.1.7～ 27.2.27	墓石～明治・大正時代の酒壺を検出した。石垣・カマド・礎石建物・縄瓦瓦葺き構造物などを確認した。	共同住宅建設
9	御影古酒蔵跡 第6次調査	東灘区御影御影町1丁目14、15番の一部	神戸市教育委員会	富山直人	18m <sup>2</sup> 18m <sup>2</sup>	27.1.7～ 27.1.7	遺構・遺物なし。	確認調査 (国庫補助事業)
10	五毛塚跡 第3次調査	灘区国玉2丁目17-2	神戸市教育委員会	谷 正徳	76m <sup>2</sup> 76m <sup>2</sup>	26.10.7～ 26.10.20	中世～近世の耕作地を確認した。土師器・須恵器・瓦器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
11	雲井遺跡	中央区雲井通4丁目、中央区布引4丁目	神戸市教育委員会	山口英正 池田 翠	16m <sup>2</sup> 5m <sup>2</sup>	26.7.22～ 26.7.25	遺構・遺物なし。	確認調査 (国庫補助事業)
12	日吉遺跡 第30次調査	中央区日吉町2丁目29-1他	神戸市教育委員会	谷 正徳 山田順生 岡田敏行	1,475m <sup>2</sup> 1,725m <sup>2</sup>	26.6.16～ 26.8.29	古墳時代～平安時代の溝・土塁・柱列・ビットなどと、中世の耕作跡を検出した。	工場建設
13	日吉寺跡 第30-1次調査	中央区駒形町3丁目377	神戸市教育委員会	川上厚志	35m <sup>2</sup> 35m <sup>2</sup>	26.6.16～ 26.6.26	弥生時代・飛鳥時代・平安時代の遺物包含層を検出した。路面電車車線に開削する最路筋を確認した。	福祉施設建設
14	日吉遺跡 第30-2次調査	中央区駒形町3丁目377	神戸市教育委員会	川上厚志	45m <sup>2</sup> 45m <sup>2</sup>	26.6.20～ 26.6.30	弥生時代・飛鳥時代・平安時代の遺物包含層を検出した。飛鳥～平安時代のビットを検出した。	確認調査 (国庫補助事業)
15	日吉遺跡 第42次調査	中央区八条通2丁目367	神戸市教育委員会	川上厚志	438m <sup>2</sup> 876m <sup>2</sup>	26.11.20～ 27.1.22	戰国時代の溝のほか、土坑・ビットを検出した。	共同住宅建設
16	日吉遺跡 第42次調査	中央区八条通2丁目369・369	神戸市教育委員会	富山直人	21m <sup>2</sup> 84m <sup>2</sup>	26.11.17～ 26.12.1	古墳時代以降の複数の遺構面で時期不明のビット・溝・土塁を検出した。遺構密度は非常に高い。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
17	生田遺跡 第8次調査	中央区中山通3丁目7-3	神戸市教育委員会	藤井太郎	1,450m <sup>2</sup> 1,450m <sup>2</sup>	26.10.21～ 27.3.7	弥生時代後期の力耕と漁獲の可能性のある貴重な遺構。古墳時代後期の聖粒祭祀と溝・古代中期の孤立住居跡・井戸・大溝を検出した。現地説明会を実施した。	共同住宅建設
18	猪ノ瀬・龍之町遺跡 第57次調査	中央区猪ノ瀬6丁目3-32、5-33	神戸市教育委員会	中谷 正	20m <sup>2</sup> 20m <sup>2</sup>	26.5.15～ 26.5.28	弥生時代中期の方形溝底の可逆性のある溝・土塁を確認した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
19	祇園遺跡 第21次調査	兵庫区上祇園町29-51	神戸市教育委員会	川上厚志 岡田美香	485m <sup>2</sup> 1,240m <sup>2</sup>	26.7.15～ 26.9.17	生田時代後期の土器精耕・土坑などを検出した。平安時代後期の孤立住居跡などを出土した。平行して土器・須恵器・黒色土器・縄織機器が出土している。	共同住宅建設
20	兵庫津遺跡 第63次調査	兵庫区中之島町2丁目	神戸市教育委員会	森木・谷 笠原・鶴見 浅井・川上 中谷・山田 加賀・鶴見	25,000m <sup>2</sup>	26.2.20～ 27.3.31	兵庫城築城期の石垣・塀等を検出した。江戸時代を中心とする町屋とそれに伴う遺構・遺物を検出した。年4回の現地説明会を実施した。江戸時代からの継続事業。	商業施設建設
21	兵庫津遺跡 第63次調査	兵庫区門戸町4丁目12-13	神戸市教育委員会	谷 正徳	70m <sup>2</sup> 70m <sup>2</sup>	26.11.25～ 27.2.15	中世頃の洪水痕、近世の耕作に伴う溝を検出した。	社屋増築工事
22	兵庫津遺跡 第64次調査	兵庫区西柳原町9-4	神戸市教育委員会	谷 正徳	45m <sup>2</sup> 45m <sup>2</sup>	27.2.3～ 27.2.19	古墳時代初期の土器精耕・それに接する2条の溝を確認、方形溝底の可逆性があると考えられる。底盤の埋積度には弥生時代中期の土器を含まれる。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
23	大岡遺跡 第15次調査	兵庫区大岡通4丁目1-39	神戸市教育委員会	井上麻子	28m <sup>2</sup> 150m <sup>2</sup>	26.9.16～ 26.10.21	縄文時代後期の河岸、弥生時代前期の溝・ビット・土塁・中世～近世の耕作跡を検出した。	エレベーター導入
24	上丸跡 第65次調査	兵庫区五条町2丁目6-1	神戸市教育委員会	川上厚志	24m <sup>2</sup> 24m <sup>2</sup>	26.5.7～ 26.5.20	古墳時代～中世までの遺物を含む洪沢砂に覆われた耕作溝を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
25	丸尺遺跡 第3次調査	北区有野町2丁目字片山613-1、644-1	神戸市教育委員会	藤井太郎	360m <sup>2</sup> 360m <sup>2</sup>	26.9.2～ 26.10.3	縄文時代と考えられるビット・土坑・溝を検出したが、ビットは認められない。	共同住宅建設 (国庫補助事業)

表13 平成26年度埋蔵文化財発掘調査一覧（2）

No	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
26	五番町遺跡 第15次調査	長田駅六番町5丁目2-1	神戸市教育委員会	川上厚志 鶴嶋文佳	260 m <sup>2</sup> 520 m <sup>2</sup>	27. 4. 2 ~ 27. 4. 25	古墳時代後期の溝、奈良時代以降のビット、室町時代の耕作溝などを検出。奈良時代以降の集落の中心は調査地より北や東に移るが、また古墳時代豪族の様相の一端を明らかにできた。平成25年度度からの継続事業。	寄宿舎建設 (国庫補助事業)
27	神楽遺跡 第15次調査	長田駅中野町4丁目05-13	神戸市教育委員会	井上麻子	53 m <sup>2</sup> 106 m <sup>2</sup>	27. 1. 6 ~ 27. 1. 23	弥生時代と考えられる遺構面と、古墳時代後期の耕作地の可視性があるビット・溝を検出した。道標程度は香港。	事務所建設 (国庫補助事業)
28	大橋町東遺跡 第15次調査	長田区大橋町3丁目1	神戸市教育委員会	石島三和	160 m <sup>2</sup> 320 m <sup>2</sup>	26. 6. 17 ~ 26. 6. 27	古墳時代～弥生時代の遺物包含層を確認した。耕作溝を検出した。	新長田駅南地区再開発事業
29	松野遺跡 第15次調査	長田駅水谷町6丁目01-1	神戸市教育委員会	山田恵生	45 m <sup>2</sup> 45 m <sup>2</sup>	26. 10. 7 ~ 26.10.28	弥生時代前期の堅穴建物と考えられる溝を込み・溝・土坑を検出した。サエカイト翼石器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
30	大川町遺跡 第15次調査	須磨区大川町7丁目49-1	神戸市教育委員会	藤井太郎	24 m <sup>2</sup> 24 m <sup>2</sup>	26. 6. 16 ~ 26. 6. 30	奈良時代の方形彌用形をもつ掘立柱建物を検出した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
31	鳴曳町遺跡 第2次調査	須磨区鳴曳町2丁目2	神戸市教育委員会	池田一穂	33 m <sup>2</sup> 33 m <sup>2</sup>	27. 1. 13 ~ 27. 1. 16	古墳時代前期の堅穴建物と考えられる溝を込み・溝・土坑・土器を検出している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
32	野田遺跡 第4次調査	垂水区野田場42	神戸市教育委員会	井上麻子	32 m <sup>2</sup> 32 m <sup>2</sup>	26.12. 2 ~ 26.12.11	平安時代末頃のビット・溝などを検出した。平安時代～鎌倉時代の土器群・須恵器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
33	南明治遺跡 第6次調査	西区南明治3丁目18-9	神戸市教育委員会	黒田嘉正	50 m <sup>2</sup> 50 m <sup>2</sup>	26. 1. 11 ~ 26. 4. 21	弥生時代末～古墳時代初期と奈良～平安時代の遺物包含層を検出した。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
34	歩引遺跡 第2次調査	西区伊丹町歩引字大庄147-1	神戸市教育委員会	谷 正徳 鶴嶋文佳	240 m <sup>2</sup> 240 m <sup>2</sup>	27. 3. 19 ~ 27. 3. 31	平成27年度に継続。	福祉施設建設
35	新方遺跡 第53次調査	西区玉津町西内原字野手344-1, 345-1一部	神戸市教育委員会	富山直人	20 m <sup>2</sup> 28 m <sup>2</sup>	26. 9. 16 ~ 26.10.15	古墳時代中期後半の堅穴建物、古墳時代後期の溝、中世の耕作土を検出した。堅穴建物からは製塙土器や輪羽羽が出土した。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
36	枝吉遺跡 第3次調査	西区枝吉4丁目16-3, 136-5	神戸市教育委員会	石島三和	35 m <sup>2</sup> 35 m <sup>2</sup>	26.11.26 ~ 26.12. 9	近世耕土層に生土器・土師器が混じて出土した。遺構も希薄である。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
37	出合遺跡 第47次調査	西区平野町中津学門ノ坪2590	神戸市教育委員会	石島三和	48 m <sup>2</sup> 48 m <sup>2</sup>	26. 8. 20 ~ 26. 9. 16	弥生時代末～古墳時代初期及び古墳時代中期の堅穴建物、土坑、溝、ビットを検出した。弥生時代末～古墳時代初期の土器、古墳時代中期の土師器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
38	出合遺跡 第48次調査	西区平野町中津学門ノ坪2603	神戸市教育委員会	石島三和	45 m <sup>2</sup> 45 m <sup>2</sup>	26. 9. 29 ~ 26.10.15	平安時代～鎌倉時代の遺構面と考えられる面を検出。遺構なし。弥生時代前期及び弥生時代末～古墳時代初期の土器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
39	出合遺跡 第49次調査	西区平野町中津学門ノ坪2609	神戸市教育委員会	井上麻子	34 m <sup>2</sup> 30 m <sup>2</sup>	26.11. 5 ~ 26.11.14	古墳時代頃と考えられるビットを検出。古墳時代の須恵器・土器、古墳時代～平安時代と考えられる土師器が出土している。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
調査面積合計					32,081 m <sup>2</sup>			
延調査面積合計					70,613 m <sup>2</sup>			

表14 平成26年度埋蔵文化財出土遺物整理一覧

No	遺跡名	所在地	調査主体	調査担当者	調査面積 延調査面積	調査期間	調査内容	調査原因
A	小路町遺跡 第5次調査		神戸市教育委員会	黒田嘉正 中村大介	0 m <sup>2</sup> 0 m <sup>2</sup>	26. 6. 2 ~ 27. 3. 31	出土遺物整理 古墳地盤分析	市営住宅耐震改修工事
B	祇園遺跡 第48次調査		神戸市教育委員会	黒田嘉正 谷 正徳 鶴嶋文佳	0 m <sup>2</sup> 0 m <sup>2</sup>	26. 4. 1 ~ 27. 3. 31	出土遺物整理 報告書刊行	兵庫県北部東・中央区小中学校再編事業／周辺整備事業



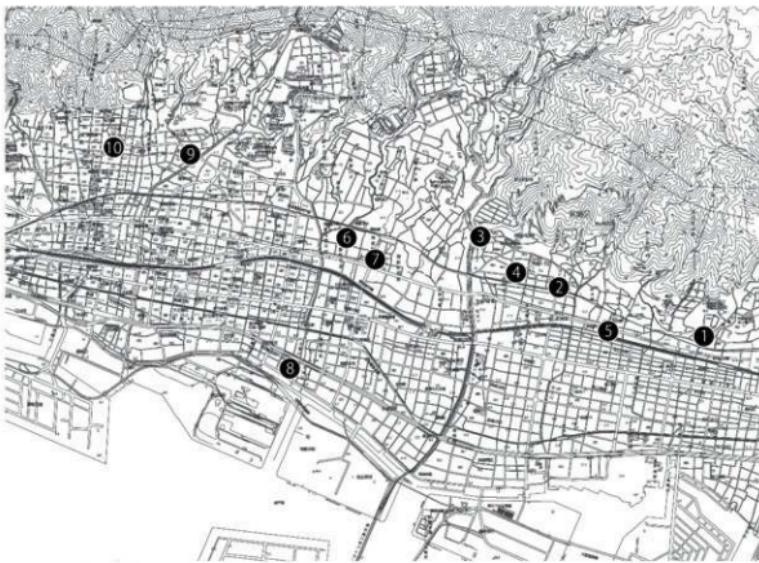


fig.12 調査地点位置図（1） 1:50,000

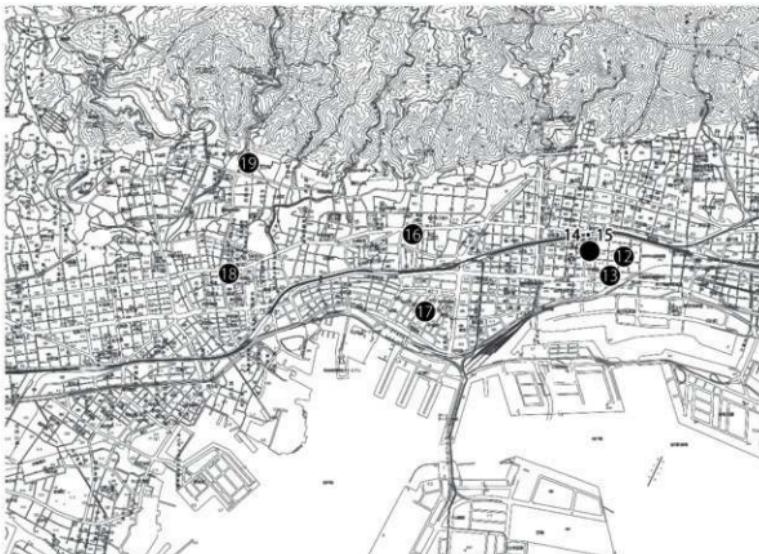


fig.13 調査地点位置図（2） 1:50,000

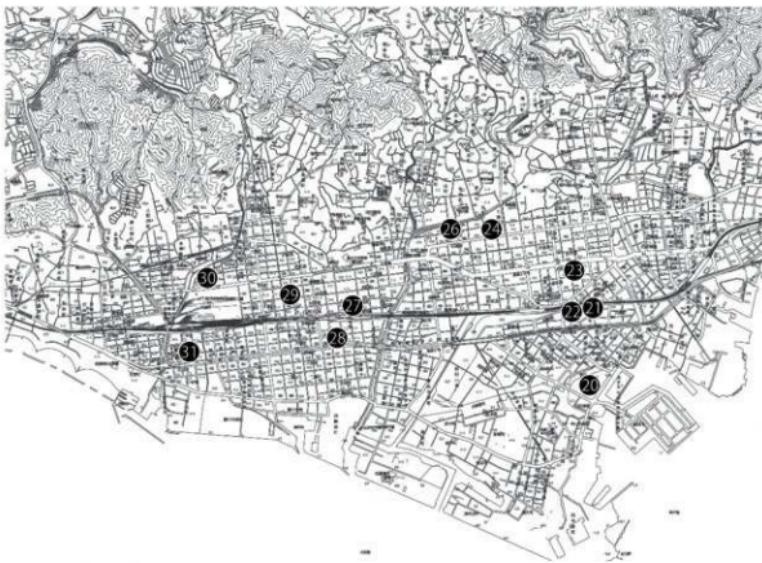


fig.14 調査地点位置図（3） 1:50,000



fig.15 調査地点位置図（4） 1:50,000

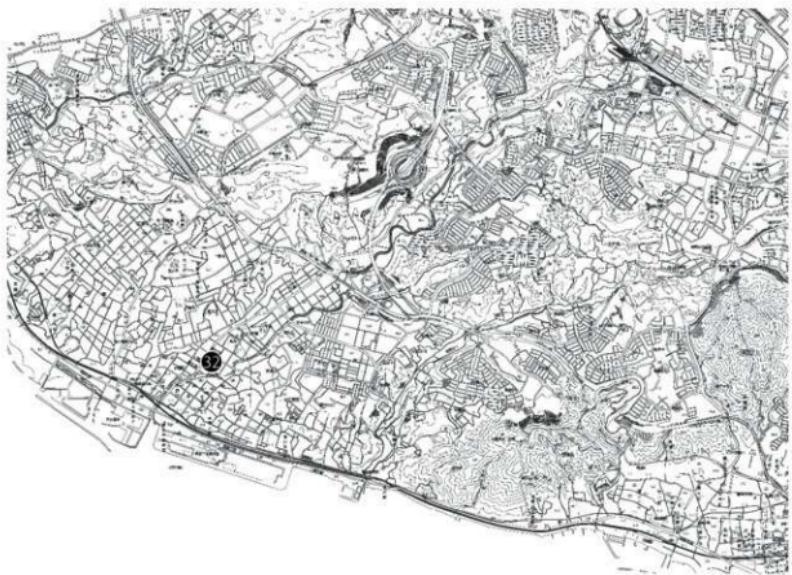


fig.16 調査地点位置図（5） 1:50,000

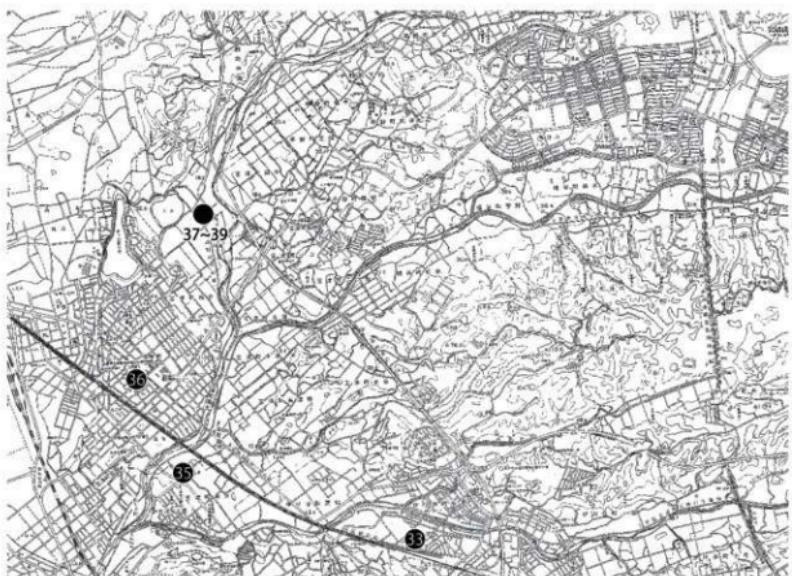


fig.17 調査地点位置図（6） 1:50,000

## II. 平成26年度の発掘調査

### 1. 森北町遺跡 第28次調査

#### 1. はじめに

森北町遺跡は、これまでに27次に及ぶ調査が行われ、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、平安時代、中世などの遺構・遺物が確認されている。特に弥生時代後期末を中心とする時期には前漢鏡片や国内の他地域からもたらされた土器なども出土しており、当地域における拠点的な集落であることが解明されつつある。

#### 2. 調査の概要

今回の発掘調査は個人住宅建設に伴い、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について調査を実施した。調査地の南辺に沿って東西方向に幅1m、長さ11.5mのトレーナーとその北側に4ヵ所の突出する調査範囲を設定した。この調査範囲には、工事による影響深度がそれぞれの場所で異なることから設計GL-182~274cmの深度で調査を完了しているため、場所によっては文化財が保存されている。

遺物包含層までの盛土はバックホーで掘削を行い、包含層と遺構掘削は人力掘削を行い、調査終了後は埋め戻しを行った。

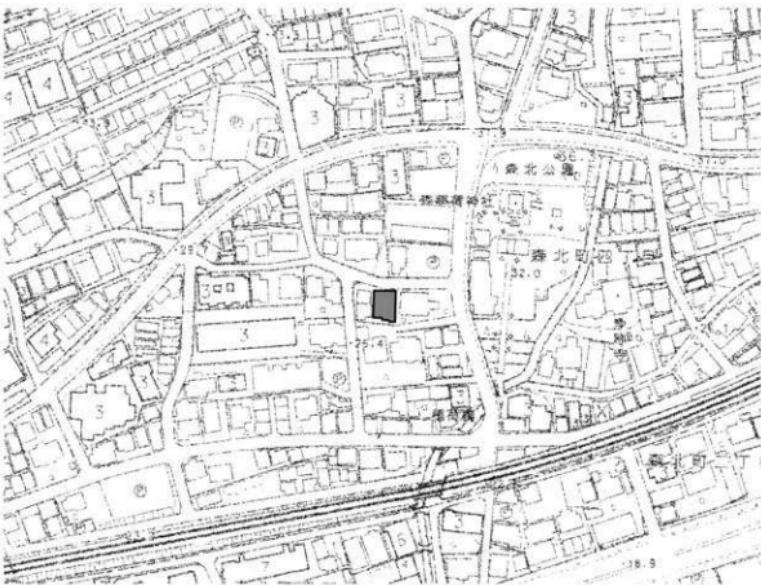


fig.18 調査位置図 1:2,500

## 基本層序

基本層序は、盛土、乳灰色粘砂土（旧耕作土）、その下に橙灰色粘砂土（旧床土）、遺物包含層である灰褐色粘砂土、その下層に遺構面となる褐灰色粘砂土になる。さらに下層には、暗褐色粘砂土（遺物包含層）、暗橙褐色粘砂土（遺物包含層）の堆積になる。今回の調査は、暗橙褐色粘砂土が工事影響深度の一番深い部分となっており、その下層の文化財については確認できていない。

## 検出遺構

調査区東半に関しては、そのほとんどが宅地化以降の搅乱により、旧来の土層が残されていない状態であった。西半に関しては同様に大きな搅乱で大半を失っている状態であった。ただし、トレーニングの突出部ではわずかに遺構面が遺存していた。

遺構面を形成する灰褐色粘砂土、その下層の褐灰色粘砂土、暗橙褐色粘砂土には、平安時代の土師器、須恵器、瓦器などの遺物が含まれているが遺構は確認できていない。

## SD01

トレーニング西半の2箇所の突出の北半で東西方向の溝を検出した。溝の最大幅は約40cm、検出面からの深さ約7cmを測る。灰白色粘砂土で埋没しており、耕作に関連する溝と考えられる。

## 3.まとめ

今回の調査区は、遺構面の大半が搅乱により旧来の土層が失われていたため、限られた範囲の中で得られる成果は限定的なものであった。

当該地の北には弥生時代後期から末にかけての集落跡の存在が、第21・22次調査で確認されているが、今回の調査地では弥生時代の遺物はごく少量出土するのみであった。

調査区西半で検出したSD01は、耕作に関連する溝と考えられる。その下層の土層には微細な平安時代の土師器、須恵器、瓦器が含まれることから、当該地は平安時代以降には耕作地として使用してきた場所と考えられる。

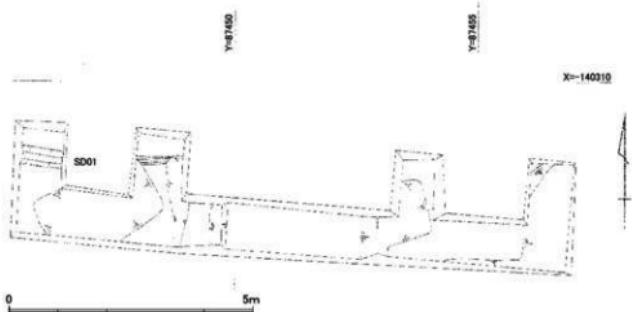


fig.19 遺構平面図

## 2. 岡本東遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

岡本東遺跡は、東灘区岡本7丁目付近の天上川右岸の扇状地上に立地する集落遺跡である。調査地北側に隣接する第1次調査地では、中世以降の耕作面、古墳時代の自然流路、弥生時代の堅穴建物、縄文時代後期の土坑などが確認されている。今回の調査地においても同時期の遺構や遺物が広がる可能性が想定された。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、保育所建設に伴うもので、基礎梁や基礎杭の工事によって、遺跡に影響を及ぼす範囲について実施した。

#### 基本層序

調査地の現地表面は、標高約32mである。元来の傾斜地を平坦に造成しているため、北側で10~20cm、南側で1.5mほどの盛土が堆積し、その下層は、近代以降のものと考えられる耕作土である。耕作土の下層には、褐灰色粘性砂質土が40~60cmほど堆積しており、石垣をともなう耕作地の造成土と考えられる（8層）。

調査区の南半部では耕作土直下に基盤層と考えられる黄褐灰色礫混細砂（36層）を検出し、第1遺構面とした。

また、北半部では耕作土の下層に、灰色や褐灰色の砂質土が堆積し中世以降の耕作土と考えられる。そして、この下層には須恵器や土師器、弥生土器などを含む暗灰褐色砂質土の遺物包含層を検出した。この上面が第1遺構面となり流路やピット、溝などの遺構を検出した。



fig.20 調査位置図 1:2,500

遺物包含層下層では、第2遺構面である黄褐色砂礫混細砂を検出した(36層)。この遺構面で弥生時代の遺構を検出している。ただし、北半部南東隅では、褐灰色砂質土の繩文土器を含む遺物包含層を検出し(35層)、この上面を第2遺構面とする。この35層は、やや疊んだところに薄く堆積したものと考えられるが、これらを除去した基盤層(36層)上面からは後期の細文土器が出土しており、部分的ではあるが、第3遺構面と捉えた。

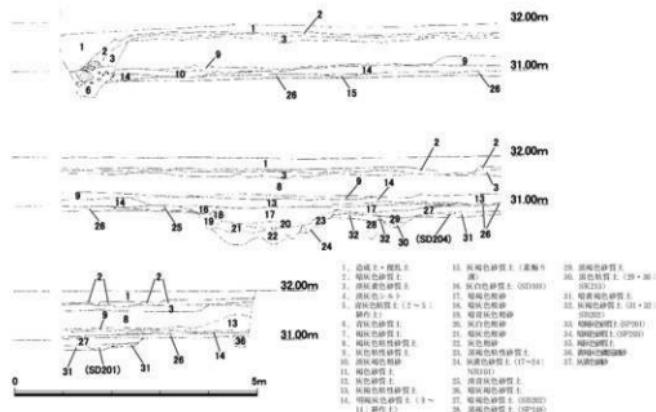


fig.21 北半部 北壁土層断面図

第1章 遺構面

検出した遺構は、ピット14基、土坑2基、溝4条、暗渠1条、自然流路

17

ピットは、径15~40cm、深さ20~30cmである。土師器や須恵器の小片が出土しているが、埋土の状況から耕作土に伴うものと考えられる。柵や建物などの構造物を想定できる規則性はない。

23

溝3条は耕作にともなう素掘り溝と考えられる。出土遺物から鎌倉時代以降と考えられる。SD101は自然流路の西肩に沿って検出しており、最終流路と考えられる。南半部で検出した暗渠は、拳大の礫を詰めたもので、土師器や須恵器、陶器が出土した。室町時代頃の所産と考えられ、上面の耕作地とともに機能していたと考えられる。

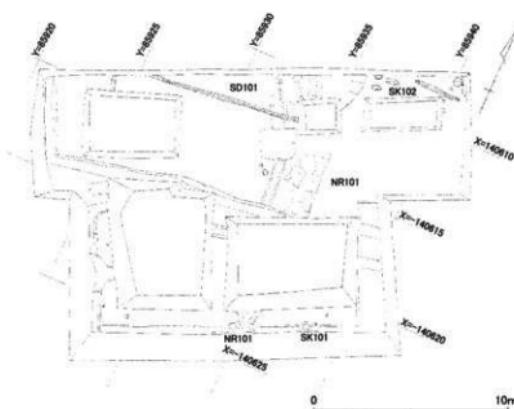


fig.22 第1遺標面平面圖

## NR101

調査区中央付近で南北に検出した自然流路である。幅約2.5~4.9m、深さ約80~90cmで、粗砂や細砂が互層に堆積している。埋土は大別して4層分類できるが、いずれの層位からも須恵器、土師器に混じって弥生時代中期と考えられる多くの弥生土器が出土している。上層及び下層から須恵器壺身が出土しており、古墳時代後期中葉頃の所産と見られる。

## 第2遺構面

北半部のみで確認した。  
検出した遺構は、ピット30基、土坑9基、溝2条、竪穴建物2棟である。

## ピット

ピットは、径10~20cm、深さ5~30cmを測る。数多く検出したが、柵や建物などを想定できるものはなかった。

## 土坑

土坑は9基検出した。SK202は東西2.6m、南北1.1mを測る隅円長方形の土坑である。深さ34cmで、埋土は暗褐色砂質土の次に黒褐色砂質土が堆積している。弥生土器やサヌカイトの剥片が出土しているが、いずれも小片である。SK203~SK206は楕円形を呈し、深さ10~40cmを測り、弥生土器の小片や石鐵などが少量出土している。

SK207は自然流路に削平されている。深さ24cmで、弥生土器の小片とサヌカイトの剥片が少量出土した。SK208~SK210は、不整形で浅いものであった。

## 竪穴建物

SB201は、SB202に先行する竪穴建物である。規模は、自然流路に削平され、一部が調査区外になるため不明である。深さは約10cmを測る。周壁溝と考えられるSD207は、幅約20cm、深さ8cmで、部分的な検出であるが全周していたと考えられる。中央土坑と考えられるSK212は、長辺86cm、短辺65cmの隅円方形を呈し、深さ16cmを測る。上層は灰黄褐色砂質土で、土坑の底を覆うように炭化物を多く含む黒色粘質土が堆積していた。

SB202は、SB201とほぼ同じ位置に建てら

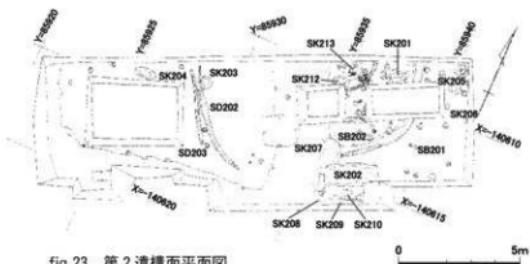


fig.23 第2遺構面平面図



fig.24 北半部 第2遺構面東側全景（西から）



fig.25 北半部 竪穴建物内土坑SK212・SK213（西から）

れた竪穴建物である。平面形は、中央土坑SK213を中心として、径7~8mの円形を推定できる。埋土は暗褐色砂質土で、3~10cmの堆積が見られた。掘方埋土は、しまりのある暗黄褐色砂質土で、深さ10~18cmである。この掘方埋土上面が床面と考えられるが、貼床などの

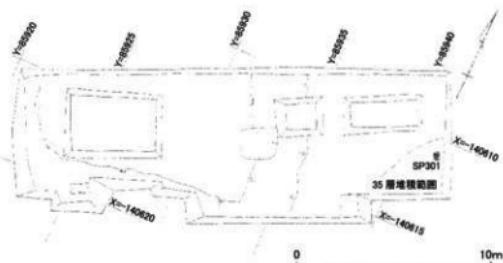


fig.26 第3遺構面平面図

様相は観察できなかった。SD201を周壁溝と考えるが、東側のみの検出であった。幅40~50cm、深さ10cmほどである。この他、東西方向のSD206を検出しており、幅28cm、深さ6cmほどであった。

中央土坑SK213は、長径90cm以上、短径80cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。埋土上層は黒褐色砂質土、下層は黒色粘質土で炭化物を多く含み、弥生土器の発掘部がまとまって出土した。周囲には、SD204がめぐっており、幅15~20cm、深さ10cmを測る。

SB201、SB202とともに主柱穴とみられるピットは明確ではない。しかし、SP231とSP237は黒褐色砂質土の埋土で深さ40~50cmを測り、SP246は暗褐色砂質土の埋土で深さ50cmを測る。これらが主柱穴となる可能性が考えられる。

出土遺物は、多くの石鏸、石核と共に弥生土器が出土している。小片が多いため明確な時期決定は難しいが、弥生時代中期の範疇にはいると考えられる。

### 第3遺構面

北半部南東隅で確認した。検出した遺構は、ピット1基である。

#### SP301

ピットは、径40cm、深さ22cmを測る。埋土である暗褐色砂質土の上層から、浅鉢の口縁部に沈線文を施す縄文土器が出土した。時期は、縄文時代後期宮窓式と考える。

また、調査区北半部南東隅では、褐色砂質土層から縄文土器の小片とともにサヌカイト製の打製石鏸も出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を確認した。第1遺構面では、鎌倉時代以降の耕作土に関わるピットや溝と、古墳時代後期の自然流路を検出した。北側に隣接する第1次調査では、5世紀頃の遺物を含む自然流路を検出している。遺物の年代は異なるが、堆積状況は類似しており、同一の自然流路である可能性が考えられる。

第2遺構面では、弥生時代中期のピットや土坑、竪穴建物を検出した。竪穴建物2棟はほぼ同じ位置で建て替えが行われているようである。第1次調査においても、弥生時代中期から後期初頭にかけての竪穴建物を2棟検出しており、中期から後期にかけての集落が存在していたと考えられる。

第3遺構面では、縄文時代後期のピットを検出した。出土した土器は縄文時代後期宮窓式の浅鉢と考えられる。

このように、今回の調査では、複数時期の遺構や遺物を確認することができた。特に、弥生時代中期から後期にかけての集落としての様相や、縄文時代の遺構分布状況などが少しずつ明らかになってきたことの意義は大きい。

### 3. 西岡本遺跡 第11次調査

#### 1. はじめに

西岡本遺跡は住吉川左岸の扇状地での高位段丘上に立地し、これまでの調査で、旧石器時代から近代にかけての遺構や遺物が確認されている。

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器が数点出土している。縄文時代は早期の竪穴建物も検出され、弥生時代後期には竪穴建物が複数検出されている。

古墳時代後期の古墳が13基検出され、そのうち10基は横穴式石室の一部が残存していた。円筒埴輪や朝顔形埴輪のほか家形埴輪や盾形埴輪、金環、須恵器、釘などが出土している。

平安時代では、掘立柱建物6棟や柵列4列が検出されている。また、落ち込み状遺構からは土師器皿や黒色土器などが多く出土した。

#### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、地盤改良等の工事で遺跡に影響がある範囲について実施した。

調査は、1～3区の3か所に分けて順次おこなった。3区では、深いところで2mほど掘削をともなうため、安全面を考慮し、地表面までの掘削は搅乱の希薄な箇所で部分的なものにとどめた。造成土はバックホーで掘削し、遺構面検出、遺構掘削は人力で行った。基本層序

調査対象地の現地表面は、標高約80.9mである。現地表から約0.3～1.8mは造成土および搅乱土であった。

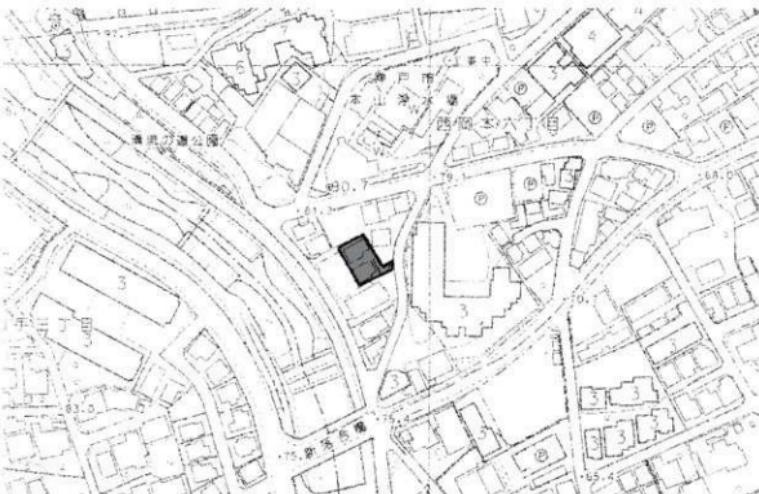


fig.27 調査位置図 1:2,500

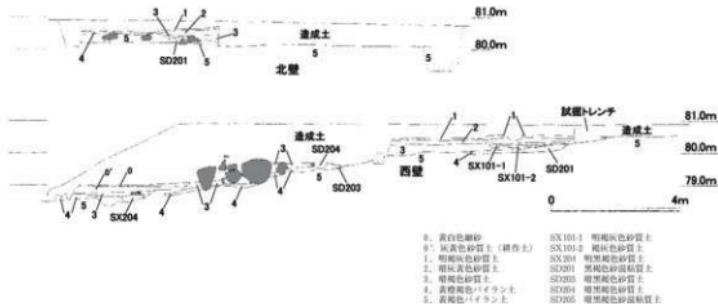


fig.28 北壁・西壁土層断面図

3区南端では、盛土下層で耕作土を検出した（0'層）。耕作土上層には洪水砂の可能性が考えられる黄白色細砂が堆積している（0層）。遺物の出土がないため、耕作土層および細砂の時期は判らない。

1・3区では、少量の遺物や炭化物を含む砂質土層を検出している（1～3層）。1層は明褐色砂質土で10cm程、2層は暗灰黄色砂質土で20cmほどの堆積である。いずれも堅くしまっており、砂礫を多く含む。土師器、須恵器、黒色土器、石器が出土し、平安時代以降の堆積土層であると考えられる。3層は暗褐色砂質土で、20～30cmほど堆積する。粘性があり、1・2層と比較するとやや遺物の出土は多い。弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。小片のため、時期決定は難しいが、古墳時代以降の堆積土と考えられる。

3層の下層は黄褐色の地山層である（4・5層）。大きな石や風化した花崗岩礫を含んでいる。4層は5層ほどのしまりがなかったため、区別したが、5層と同様の地山層と考えられる。

遺構面は2面確認した。第1遺構面が3層上面、第2遺構面が地山面である。

#### 第1遺構面

第1遺構面は、暗褐色砂質土層上面で検出した。1区および3区の北半部で確認している。検出した遺構は、ピット7基、溝2条、性格不明遺構2基である。

#### SP101～SP107

検出したピットのうち、SP101～SP105・SP107は、径約20cm、深さ約10cm程である。SP106は径50cm、深さ15cmを測る。SP102・SP105・SP107は東西方向に約1m間隔で並んでおり、壙などの構造物である可能性も考えられる。その他、建物などの構造物を想定できる規則性はない。

#### SD101・SD102

検出した溝はいずれも幅約20cm、深さ約5～10cmである。

#### SX101・SX102

SX101は南北5m、東西3.5m以上、深さ15cm程の規模である。SX102は南北2.3m、東西1m以上、深さ25cmである。東側および南側は攪乱されている。

第1遺構面検出の遺構からは、平安時代頃の土師器、須恵器、黒色土器の小片が出土している。

## 第2遺構面

第2遺構面は、地山面直上で検出した。検出した遺構は、ピット2基、土坑3基、溝5条、性格不明遺構4基である。

### ピット

径約10cm、深さ10~20cmである。2基とも単独で検出しており、建物や壙などの構造物を想定することはできない。

### SK201・SK202

SK201は長辺1.25m、短辺約90cm、深さ20cm程の土坑である。暗褐灰色砂質土の埋土からは弥生土器と土師器の小片が多く出土した。SK202は、径1m程、深さ25cmの不整円形の土坑である。暗灰黄色砂質土の埋土から弥生時代後期前半の長頸壺がほぼ完形で出土した。SK203は、長辺1.5m以上、短辺1m程、深さ10cmの隅丸長方形の土坑である。暗褐灰色砂質土の埋土から弥生土器片が出土している。切り合い関係から、SK202より時期は古いと考えられる。



fig.29 SK202検出状況 (東から)

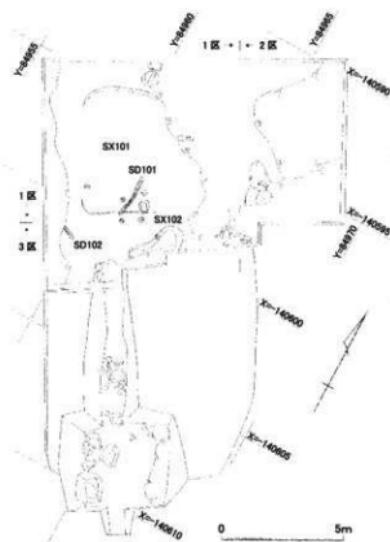


fig.30 第1遺構面平面図

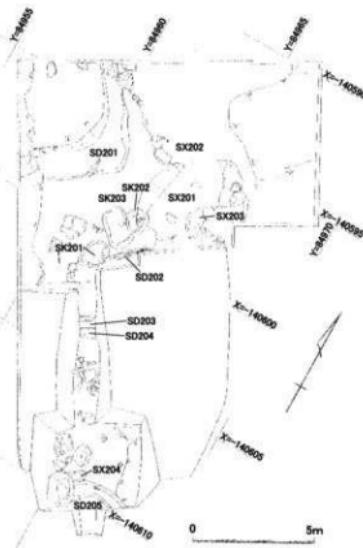


fig.31 第2遺構面平面図

## SD201～SD205

SD201は、調査区北西隅で検出した屈曲する溝である。幅1.1～1.3cm、深さ10～20cmを測る。黒褐色砂混粘質土の埋土からは土師器の小片が出土している。SD202～SD204は検出範囲が僅かで、検出面からの深さは5cmほどである。SD205は、調査区南端で検出した緩く曲がる溝である。幅60cm、深さ20cmを測る。暗黒褐色砂混粘質土の埋土からは弥生土器と石器の小片が出土している。

### 性格不明遺構

SX201は調査区中央付近で検出した。東側は近現代の搅乱で、また南側もSX102と搅乱によって削平されている。SX201下層からSK202、SK203を検出しており、新旧関係を見ることができる。出土遺物は土師器と須恵器の小片である。

第2遺構面検出の遺構からは、土師器、須恵器、弥生土器が出土している。出土遺物から、SK202とSK203は弥生時代、SK201は古墳時代の遺構と考えられる。その他のピット、溝、性格不明遺構は出土遺物が少なく年代決定が難しいが、第2遺構面を覆う3層出土遺物とも考え合わせ、古墳時代以前のものと考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では、平安時代頃の第1遺構面、古墳時代以前の第2遺構面を確認し、ピットや土坑、溝などを検出した。特に地山面直上の第2遺構面では、古墳時代や弥生時代の溝や土坑などを複数確認した。

SK202出土の弥生時代後期の長頸壺は、ほぼ完形である点で特筆できる。この時期の遺構や遺物は、西岡本遺跡の複数調査地点で確認されており、遺跡地全体に広がっているとみられる。

SD201、SD205の屈曲する溝は、南東に位置する古墳群（第1次調査）との関連性を考えると、これらの溝も周溝の一部である可能性が想定できる。しかし、遺物の出土が非常に少なく、埋葬施設などの存在も確認できないため、推定の域を出ない。

この他、縄文時代の石鎌が3点出土した。遺構に伴うものではなく、1～3層掘削時に土師器や須恵器などとともに出土したものである。第1次調査では縄文時代早期の住居跡が検出されていることから、今回の調査地にも同時期の生活域が広がっていた可能性が考えられる。

今回の第11次調査で検出した遺構や出土遺物については、今後の周辺地における調査の進展とともに、更なる検討を加えていきたい。



fig.32 1区 第2遺構面全景（東から）



fig.33 3区 第2遺構面全景（北から）

## 4. 岡本北遺跡 第10次調査

### 1. はじめに

岡本北遺跡は住吉川左岸の扇状地上に立地する弥生時代～中世の集落跡として知られており、東灘区西岡本4丁目、岡本9丁目付近に位置する。これまでに9次の発掘調査が実施され、弥生時代後期、弥生時代末～古墳時代初頭、鎌倉時代の各時代の遺構・遺物が確認されている。

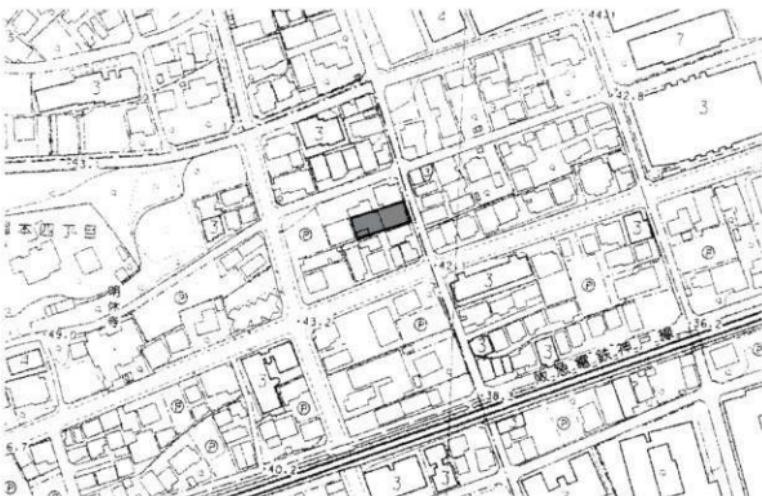


fig.34 調査位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

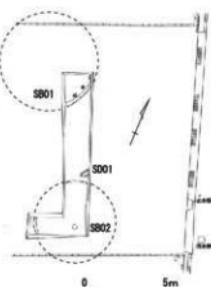
今回の調査は共同住宅建設に伴い、擁壁工事部分について遺跡への影響を確認する調査を実施した。

#### 基本層序

調査区の現地表面は標高およそ44.3mを測る。層序は、盛土や搅乱土が堆積し、その下層に複数の旧耕土層が存在する。地表下60cmで灰褐色のやや粘性を帶びた砂質土の遺物包含層が堆積する。その下層は褐色礫混じり砂質土の遺構面となる。  
検出遺構

調査対象範囲内で、竪穴建物2棟、溝1条を検出した。 fig.35 調査区平面図(竪穴建物推定復元図)  
SB01

調査区北端で検出したSB01は、復元径約6mの平面円形の竪穴建物と考えられる。検出面からの深さ20cm、埋土は黒褐色又は灰褐色の粘質土である。周壁に沿って3基の柱穴を検出した。径20～25cmで、深さ10～20cmである。埋土は灰色、あるいは暗灰色の粘質土



である。柱穴からの出土遺物は、東壁際の1基から弥生時代後期の土器片が出土した。

## SB02

調査区南端で検出したSB02は、復元径約5mの平面円形の堅穴建物と考えられる。埋土は、茶褐色を呈する砂質土となる。床面で柱穴などの造構は検出できなかった。小片の弥生土器がまとまって出土しており、弥生時代後期頃と推測される。

### 溝

幅30cm、深さは15~20cmの溝を1条検出した。調査区内での検出長はわずかに60cmであり、耕作に伴う溝の可能性もある。中世の須恵器片が1点出土した。

### 3.まとめ

今回の調査では、部分的ではあるが堅穴建物2棟を検出した。いずれも径5~6mの円形と推測される。時期の判明する出土遺物は少ないが、おおむね弥生時代後期~末頃に属するものと考えられ、遺跡内の既往調査で確認された堅穴建物と同時期のものと考えられる。当該地の北西約150mの地点の第2次調査では堅穴建物数棟が確認され、土坑や溝などを検出、多様な遺物が出土していて、集落の様相の一端がうかがい知れる造構が確認されている。しかし、その他の調査では小規模な面積のものが多く、遺跡の詳細を明確にするまでには至っていない。住吉川左岸中流域での遺跡の展開については、今後の周辺での調査例の積み重ねが必要と考えられる。

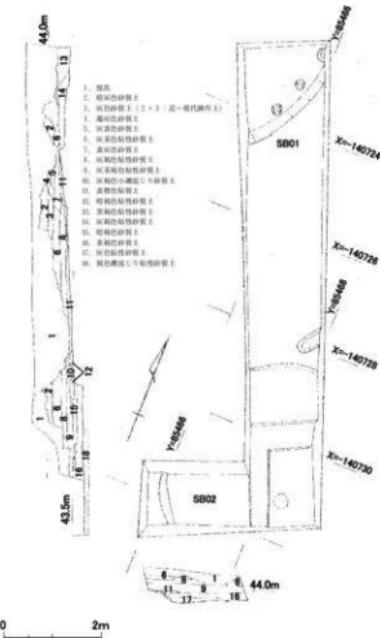


fig.36 造構平面図・断面図



fig.37 SB01埋土堆積状況（北東から）



fig.38 SB02検出状況（南東から）

## 5. 本山遺跡 第39次調査

### 1. はじめに

本山遺跡は、縄文時代から古墳時代、平安時代および中世の集落遺跡として知られている。これまでに38次におよぶ調査が行われている。遺跡の範囲は、南北約560m、東西約700mの範囲に広がりが確認されている。遺跡の立地する標高は7~20mで六甲山南麓から流れ出る中小河川によって形成された沖積地に立地している。

これまでの調査では、第12次調査において弥生時代中期の銅鐸が発見されるなど、弥生時代の当地域の拠点的集落を形成する遺跡であることが判明しつつある。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事に先立ち遺跡に影響を及ぼす範囲について調査を実施した。遺物包含層までの上層の土はバックホーにより掘削を行い、包含層と遺構は人力によって掘削を行った。

当該地点の北東隣接地で行われた調査では、弥生時代中期の竪穴建物や掘立柱建物が発見されており、弥生時代の集落遺構が広がっていると予想された。調査対象地の東辺に南北方向に幅1m、長さ10mの1区設定し、1区南端部から東西方向に幅1m、長さ18mの2区を設定した。

#### 基本層序

現地表面から70~80cmは盛土及び搅乱土である。2区西側では盛土の下に阪神大水害によると考えられる洪水砂が堆積している。その下層は、旧耕作土と考えられる灰色粘砂土、その下に旧床土と考えられる暗橙灰色粘砂土が堆積している。1区の北端部では、その下層に遺構面となる黒灰色粘砂土がある。1区北端部は遺構面が残存していたが、耕作地により削平を受け、ほとんどが旧土層をとどめていない。



fig.39 調査地位置図 1:2,500

## 検出遺構

L字形のトレンチ東半部でピット2基と南北方向の溝1条を検出した。

### SP01・SP02

1区の北端部でピット2基を検出した。SP01は径40~45cm以上の楕円形で、深さ30cmを測る。底部中央には東西方向に長い楕円形のさらに落ち込む窪みを検出した。SP02は径50cmの円形で、深さ20cmを測る。底部中央には円形のさらに落ち込む窪みを検出した。SP01・SP02共に埋土が黒褐色粘砂土と暗黒褐色粘砂土の2層で埋まっていることから、同時期の遺構であると考えられる。出土遺物は微細なものしか出土していないため時期の決定は難しいが、近隣の調査成果から弥生時代の遺構と考えられる。

### SD01

2区東端で、幅約75cm、深さ約20cmの南北方向の溝を検出した。埋土である暗黒灰色粘砂土からは多くの弥生土器が含まれていた。この溝の西側は、拳大の礫を多く含む土層となっており、遺構は確認できなかった。

### 3.まとめ

今回の調査区は、狭小な範囲であったことと、全体に近世以降の耕作地の造成により削平を受けていたため遺構面の残りは良くなかったが、1区の北端部と2区の東端部で遺構を確認することができた。

1区北端で検出した2基のピットは、平成5年度の調査で検出された弥生時代の集落に関連する遺構と考えられるが、建物を構成する柱穴として確認できていない。

2区東端で検出したSD01についても、遺構全体を窺い知ることができていないためその用途については不明と言わざるを得ない。

調査の結果、当該地の南端部は近世以降の耕作により削平を受けていることが判明したが、確認された遺構から弥生時代の集落が当地にも広がっていることが確認できた。

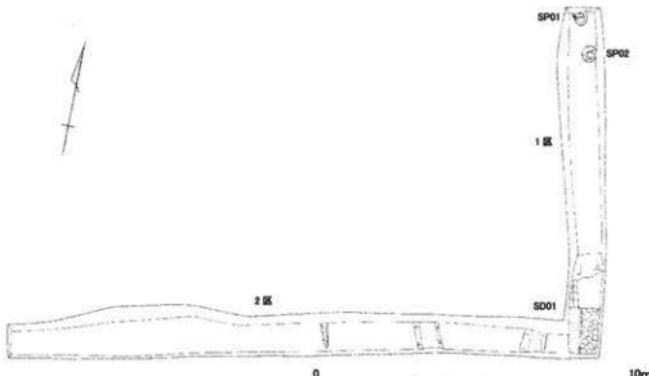


fig.40 遺構平面図

## 6. 西平野遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

西平野遺跡は、六甲山南麓で石屋川の支流である新田川などにより形成された扇状地上に立地する遺跡である。弥生時代～中世の大規模な集落である郡家遺跡の北西に隣接する。共同住宅建設に伴う第1次調査では古墳時代初頭の堅穴建物、鎌倉時代の掘立柱建物のほか、室町時代の大溝とそれに付随する石垣が確認され、当地周辺に比定される平野城に関連する遺構と推測されている。今回の調査地の北側では区画整理事業に伴う調査において、弥生時代後期の土器溜まりを内包する住居址状の落ち込みや古墳状の壇状遺構、中世の柱穴など、遺跡の内容を考える上で重要な遺構が確認されている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は市有地売却に伴い、従前建物の基礎などの除却によって埋蔵文化財に影響を及ぼすため、撤去前に実施した。バックホーで表土・盛土層の除去を行い、以下の層は人力掘削により遺構・遺物の検出に努めた。

#### 検出遺構

盛土の下深さ約20cmで遺構面となる明黄褐色土の地山面となる。調査区の西半は、近世末～近代の井戸と洪水のため地山面が大きく削平を受けている。調査区の中央から東半においては、ピット8基、土坑3基、溝1条を検出した。

#### SP01～SP08

調査区中央で8基のピットを確認した。調査範囲が限られているため建物に伴うピットであるかは不明である。

SP01・SP08は、径約50cm、深さ約20cmで、いずれも埋土の上層に拳大以上の礫を含む。SP01からは瓦片と砥石、SP08からは炮烙片が出土し、時期は近世になる。

SP02～SP07は、径約20cm、残りの良いもので深さは30cm、浅いものは10cmである。



fig.41 調査地位置図 1:2,500

SP02から高環脚部が出土、その他のピットからも細片の土器片が出土している。出土遺物から、弥生時代後期の遺構と考えられる。

#### SK01～SK03

SK01は長軸方向の長さ約1.3m、西側は長径1m、短径70cmの円形を呈し、深さ35cm、東側は長辺60cm、短辺50cmの長方形を呈し、深さ15cmと西側が一段深くなる。暗灰色粘質土を埋土とし、西側楕円形の部分の埋土上層に礫を多く含む。礫に混じり、砾石が1点出土した。

SK02は長辺1.3m、短辺1m、深さ30cmの土坑で、縁羽口片、染付片が出土した。

SK03は長径1m、短径約70cmの平面楕円形を呈する土坑で、深さ約50cmである。

土坑はいずれも近世のものと考えられ、柱穴とともにいずれも最終埋土と考えられる部分に礫が多く混じる。

#### SD01

調査区の東端で溝を1条検出した。北側から東側へ弧を描くようだが、建物基礎により搅乱を受け北側の状況は明らかでない。調査区東端では幅約1.6m以上、深さ約60cm、東に延びる部分の北側の壁は垂直に近い形状である。最下層は幅約40cm、深さ20cmで鋭く掘り込まれ、掘り込みは中央から東側のみで、この部分に暗褐色粘質土が堆積する。遺物は埋土中層の礫層から須恵器・陶器・瓦質土器片が出土し、室町時代末頃の遺構と推測される。

### 3.まとめ

弥生時代後期と考えられる柱穴を6基検出した。北側の区画整理事業に伴う調査でも同時期の遺構が確認されており、付近での遺構の拡がりが想定される。室町時代頃と考えられる溝は今回の調査地の東50mに位置する第1次調査地で検出された遺構とともに付近に存在したとされる「平野城」に関連する遺構の可能性がある。近世の土坑からは縁羽口、砾石などが出土し、村鍛冶に伴う可能性がある。河岸段丘上に立地し、早くからの宅地開発などにより削平が進み、遺構、遺物が失われている部分も多いが、今回の調査成果や周辺の地形観察などから平野城などの復元が必要であろうし、弥生時代、古墳時代、また近世の各時代の当地の旧景観を復元することが必要と考える。

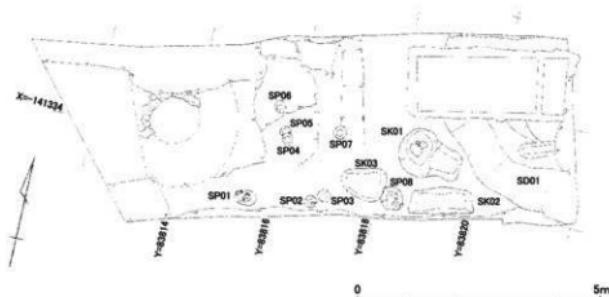
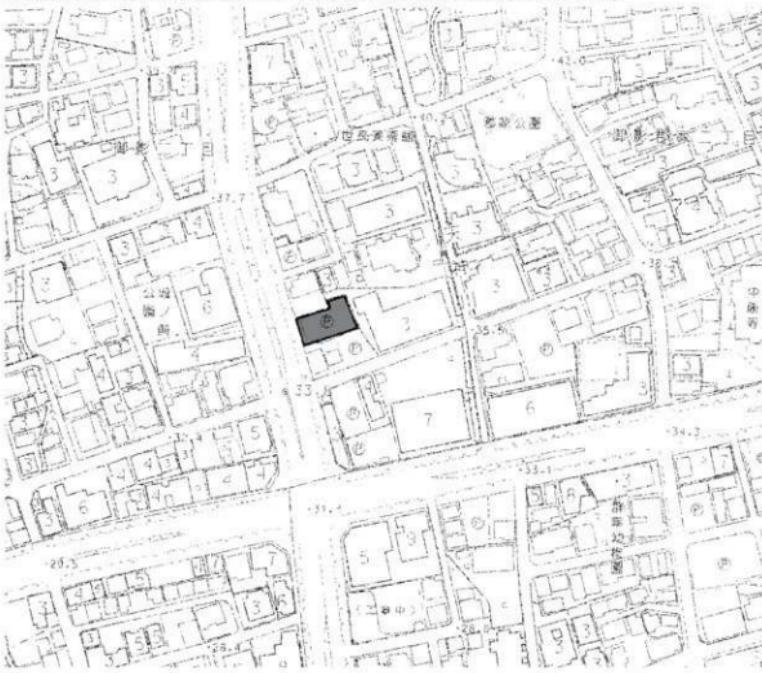


fig.42 遺構平面図

## 7. 郡家遺跡 第92次-a 調査

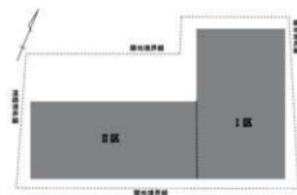
### 1. はじめに

郡家遺跡は、弥生時代中期から古墳時代後期までを中心とした集落に関連する遺構が多数確認されている。また、奈良時代、中世の遺構も一部の調査地で確認されている。また、「韓式系土器」の出土例も多く、渡来人の居住地である可能性もある遺跡である。1978年に発掘調査が行われて以来、これまで91次にわたる調査が行われている。



### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、工事により遺跡に影響する部分について実施した。調査区の区割りは、東半をⅠ区、西半をⅡ区と呼称する。調査次数は、今年度実施した調査区を第92次-a 調査、次年度に調査予定の調査区は第92次-b 調査と呼称する。



## 基本層序

駐車場舗装・盛土層があり、その下層には、近世・近代の旧耕作土層が堆積する。この層の直下に、古墳時代後期の遺物を含む洪水に由来すると思われる砂層が堆積する。この遺物包含層直下の明黄褐色系の砂層が第1遺構面である。ただし調査区南半については搅乱が著しく、第1遺構面は部分的にしか残存していない。この面の下層には、古墳時代の遺物と弥生土器含む褐色系の遺物包含層が堆積している。この遺物包含層の直下が第2遺構面となる。

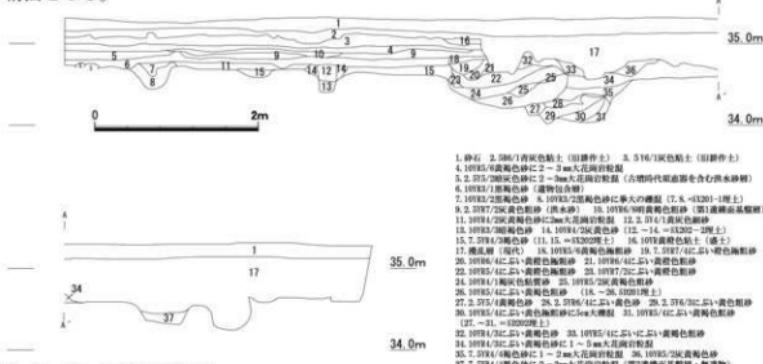


fig.45 1区 東壁土層断面図

## 第1遺構面

### ピット

径10~20cm程、深さ10cm未満のピットを12基確認した。いずれも直上に堆積する洪水砂と全く同質の埋土を持つ。一部のピットからは古墳時代後期の須恵器片が出土した。ピットの配置には規則性はなく、建物の柱穴にはならない。

### 第2遺構面

ピット24基、土坑3基、流路3条、住居址の可能性のある遺構を3か所確認した。

### ピット

ほとんどが径15~30cm程、深さ10~30cm未満のものである。ピットは並びがなく、建物を構成するものではない。

### SK201~SK202

SK201とSK202は、径50~60cm、深さ30cm前後の不整楕円形の土坑であ

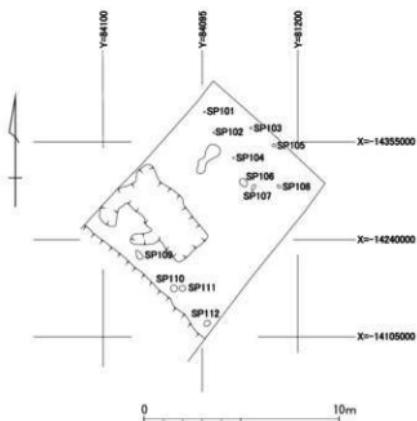


fig.46 1区 第1遺構面平面図

る。出土遺物は僅かで、時期については不明である。

#### SX202

調査区北東端において周壁溝様に弧状にめぐる溝もち、溝の内側は一段下がり平坦で、ピットが並ぶ、円形ないし方形の竪穴建物の可能性がある遺構である。ただし、大半が調査区外に続くため全体規模は不明である。

#### SX204

調査区南端で検出した不整方形の凹み状遺構である。攪乱が著しく、遺構の大半が調査区外に続き、正確な形状が不明である。

#### SD201・SD202

検出状況から第2遺構面より新しい時期の遺構である。ただし、出土遺物が僅かなため時期の特定は難しい。

#### SD203

第2遺構面を削って形成されている。埋土は極粗砂～拳大の礫で、急な水流が筋状に走った痕跡と考えられる。これらの溝はいずれも自然流路と考えられる。

### 3. まとめ

今回、建物などに直接結びつく遺構は検出されていないが、弥生土器や、弥生時代末～古墳時代前期の土器が出土しているなど、周辺地に当該期の遺構が存在していることが判った。また、洪沢砂中にも古墳時代中期の土器が含まれているため、調査地上方に当該期の集落が展開することが予想される。

現時点でのわかった調査結果は、周辺の調査状況と合わせて考察すると、大きく4時期に分けることができる。今年度は調査区を分割して調査を実施したため、詳細については次年度の調査が終了してから報告を行いたい。



fig.47 1区 第2遺構面全景（南東から）

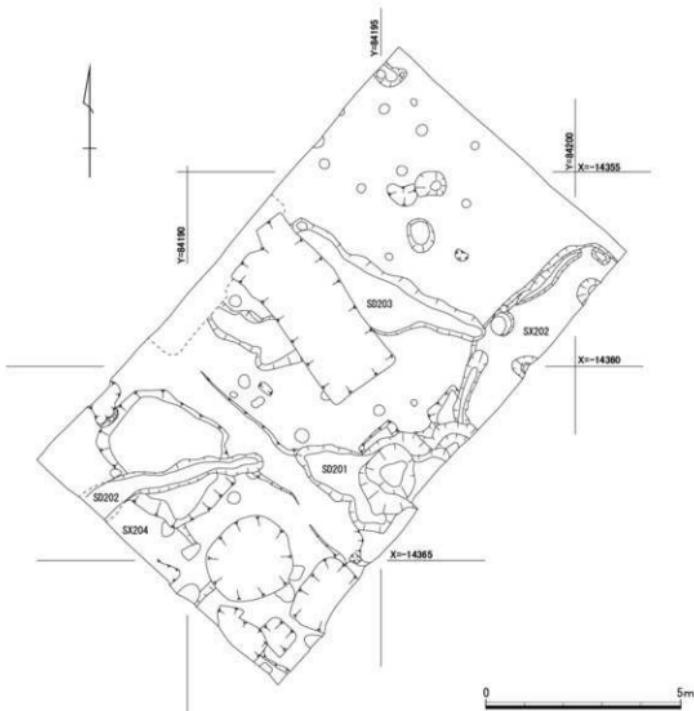


fig.48 1区 第2遺構面平面図



fig.49 1区 SD202検出状況（南西から）

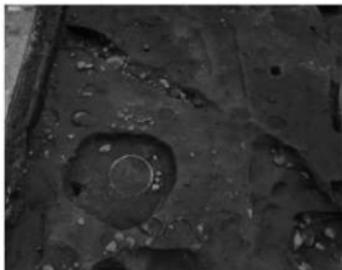


fig.50 1区 SX204(左)・SD202(右)検出状況（東から）

## 8. 御影郷古酒蔵群 第6次調査

### 1. はじめに

江戸時代以来、灘五郷と呼ばれる酒造地のうち神戸市に所在するものは、東から魚崎郷・御影郷・西郷である。今回の調査地は、そのうちの御影郷の区域に該当する。神戸市では平成10年度からこれらの酒蔵群を近世から近代の生産遺跡として、神戸市埋蔵文化財分布図に記載している。

ここ御影郷に限らず神戸市内の三郷の調査で、江戸時代後半から明治・大正時代の酒蔵の内部構造や釜場の変遷等が明らかになってきている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、御影郷古酒蔵群の範囲内にあり、今回で6次の調査となる。調査については、酒蔵に関連すると考えられる遺構面を3面にわたって行った。第2面検出段階で、数か所において石垣や石列が確認され、この石垣や石列によって区画された、いくつかの敷地が存在することが予想されたため、区画ごとに分割して調査を行った。調査区については石列・石垣を境として、南西から順にA～F区とし、トレンチ調査の部分についてはG区として、G1～G7の調査区を設定した。

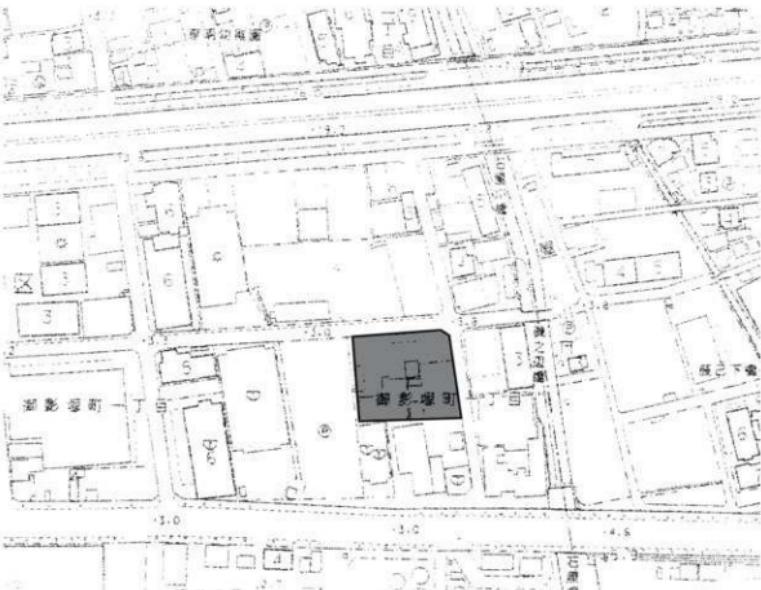


fig.51 調査位置図 1:2,500



fig.52 第1面調査区全景（南から）

## 第1面

調査区域全体が平坦に造成され、B・C区に煉瓦が敷き詰められる時期である。この時期には、調査区南壁に沿って確認された石垣も築かることになる。

### 煉瓦敷き

煉瓦を敷き詰めた床面で建物に伴う明確な柱痕跡を確認できておらず、煉瓦敷きの範囲で壁の痕跡も確認できなかった。そのため、明確に建物内部の構造物として特定するには至らなかつた。

この煉瓦敷きに使用されていた煉瓦は、厚さ60mm前後のものであり、明治40年代以降に生産された煉瓦と考えられる。

また、セメントモルタルがかなり使用されており、モルタルの普及し始めた時期の構造物と考えられる。

以上のことから、第1面は明治40年代以降、おそらく大正期の遺構面と考えられる。

この遺構面は、火災焼土層に覆われており、昭和20年6月の神戸大空襲によって壊滅的な被害を受けたものと思われる。

## 第2面

E区前面に石垣が築かれる時期である。F区で確認した石垣による区画を、南に拡張することが目的であったと考えられる。この区画を拡張したのち、E区には、下に大きな根石を敷き、その上に一辺60~80cmを測る大きな礎石を据える建物が築かれている。

この礎石の間隔は、3.6m間隔であり、約2間間隔であることから、通常の建物というよりは、蔵関連の建物である可能性が高い。

また、B・C区にも同様な礎石が確認できたが、今回は建物の範囲を確認するには至っていない。



fig.53 E・F区第1面全景（西から）

**SK01**

B区で確認したSK01は、径40cmの掘方に、胴部最大径25cmを測る甕が埋納されており、胞衣甕である可能性が考えられる。

**SK03**

B区で確認したSK03は、長さ1.1m、幅50cmを測る。底に板を敷き、木で周囲を囲んでいた痕跡が確認できた。その周りに石で組まれた窓が築かれていた。内部からは寛永通宝が2点出土している。

**礎石建物A**

この建物は、第1面で洗い場と推定される同位置の下面で確認できたもので、東西長3.1mを測るが、南北方向は調査区外に伸びるため、不明である。

この遺構面では煉瓦の検出はあるが、SK03では、寛永通宝が出土している。この錢貨は明治時代にも流通していたとされることから、明治40年代以前の時期である可能性がある。

**第3面**

F区に石垣が築かれた時期である。緩やかに南西方向に下がる地形であり、その地形を克服するために石段A、石段Bや石垣が築かれている。

B区内で確認された石段A、石段B並びに石垣で囲まれた範囲が何らかの土地の区画を示していると考えられるが、建物等の痕跡は確認できていない。



fig.54 A・B・C・D区 第2面全景（南から）



fig.55 E・F区 第2面全景（南から）



fig.56 SK03全景（南から）



fig.57 磯石建物A全景（北から）

## 竈

A区では、径約1m、残存する深さ50cmを測る竈を確認した。竈は単基での確認であり、酒蔵に関係するかは明確にはしきれない。この竈の中からは、頭部がT字の釘が出土しており、周囲からの出土遺物を考慮すると、構築期は幕末から明治時代にかけての時期と考えられる。

## 石垣

B地区で検出した石垣の裏込め埋土内からは、肥前系磁器が出土した。この石垣の構築期は江戸時代にさかのほる可能性が考えられる。

全域において、出土遺物に乏しいが、この面からは煉瓦が出土せず、肥前系陶磁器の出土が散見できることから、幕末から明治時代にかけての時期と考えられる。

## 3.まとめ

今回の調査において、石屋川の川土手から緩やかに南西へと傾斜する立地において、その地形の克服と土地利用の変遷を追うことができた。

本来、酒の出荷を考えると、川の河口付近の海側が酒蔵の立地に最適と考えられるが、今回の調査では、北から、南の河口へと徐々に開発が及んだことが理解できた。

また、第3面で確認した竈は、径1mを測るものであり、1基単独であることを考慮すれば、酒蔵との関連づけることには躊躇を覚えるが、酒蔵で従事する人々の生活の場に関連した竈である可能性は残るものと考えられる。



fig.58 A区 第3面全景（西から）



fig.59 B・C・D区 第3面全景（南から）

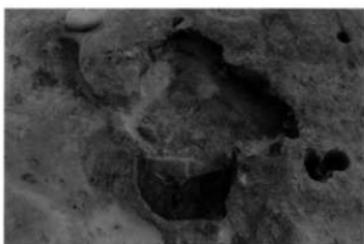


fig.60 A区 竈断割り状況（東から）



fig.61 B区 第3面石垣検出状況（西南西から）

## 9. 篠原遺跡 第33次調査

### 1. はじめに

篠原遺跡は、1929年に考古学者小林行雄氏によって縄文土器が出土する遺跡として紹介された。また、遮光器土偶や大洞式土器など、東北地方の縄文文化とかかわりの深い遺物が出土したことで知られている。

これまでに32次に及ぶ調査が行われ、縄文時代から古墳時代、中世にわたる集落遺跡であることが判ってきている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、遺跡に影響を及ぼす範囲について調査を実施した。遺物包含層までの盛土・旧耕作土はバックホーにより掘削を行い、遺物包含層と遺構の精査については人力によって務めた。

#### 基本層序

上層から、盛土、2層の旧耕作土、弥生時代後期の土器を多く含む遺物包含層が2層、弥生時代後期の土器を含み1m以上もある人頭～拳大の礫が多量に混じった土石流堆積層、そして弥生時代後期の遺構面となるバイラン土壤層の順で堆積している。この遺構面は、現況地盤より約1～1.7m程の深度で確認した。面は南へ大きく下がる地形を呈し、調査区北端と南端で0.7～1m近い比高差がある。

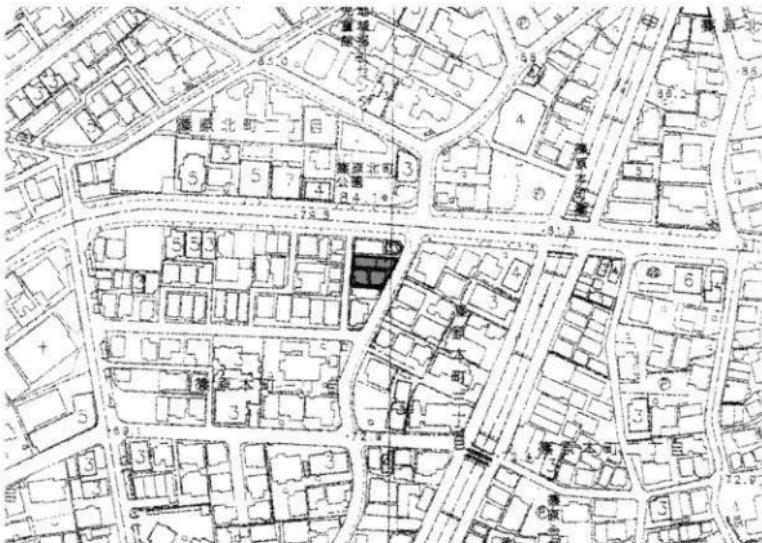


fig.62 調査位置図 1:2,500

## 土石流

土石流による影響が少ない箇所は調査区の北東角付近にあることから、調査区を北西方向から南東方向に斜めに流れたと思われる。土石流堆積層は多くの花崗岩とともに、有機質を多く含む黒色系粘質砂によって形成されている。そして、ごくわずかに弥生時代中期の土器と併に磨滅の少ない弥生時代後期の土器片が多く混じっていた。土石流が発生したのは当該時期と考えられる。

## ピット

43基程度のピットを検出した。それぞれのピットの大きさ、深さ、形状は画一性がなく位置関係も規則性に乏しく、建物の柱穴と認定できるものはなかった。

## SK01～SK03及び SX01～SX22

22か所以上の不定形の土坑状の穴を検出している。形状、規模、配置に互いに関連性はなく規則性もない。なお、SK15とSK19からは、弥生土器とともにサヌカイト剥片が数点出土している。

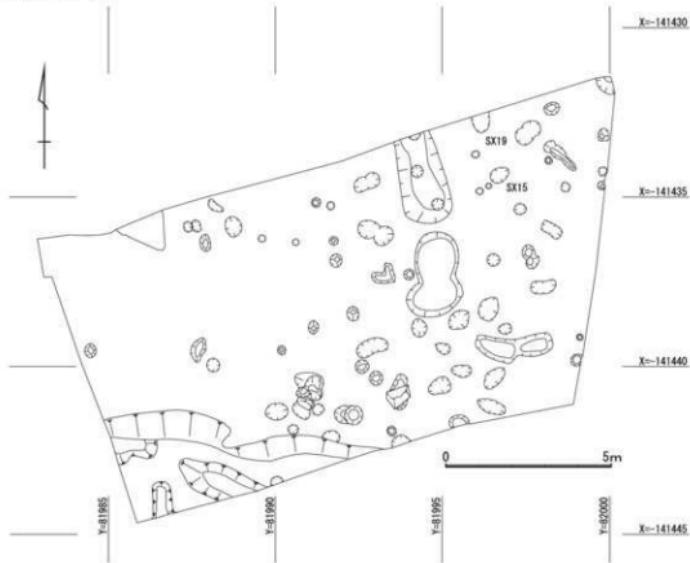


fig.63 遺構平面図

## 3.まとめ

今回の調査では、弥生時代の遺構と土石流よって形成された痕跡を確認している。土石流の堆積層に含まれる弥生土器の状態が良好なのは、北西方向の集落域をとおり南東方向に向かって堆積していったものと推測される。このような土石流の痕跡は、六甲山南麓に立地している篠原遺跡ほか当該期の遺跡では散見されている。今回の調査では、調査地上方の集落域の遺物が流入し、堆積している状況が窺えた。

## 10. 五毛遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

五毛遺跡が位置する六甲山系南麓は、複数の小河川によって形成された扇状地が発展し、調査地付近はその様な一つの扇状地の頂部に立地する。そして、付近の地形は概ね北西から南東方向に急傾斜で下がっており、かなり急勾配の地形で標高82～83m前後を測る。

平成4年度の第1次調査で、室町時代の石垣・溝などが確認され、陶磁器、土師器とともに特定の階層や施設で使用されていた屋根瓦が出土し、有力者の屋敷地、または寺院の存在を窺わせる資料を提示し、中世の集落遺跡として周知されている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、工事により埋蔵文化財に影響を与える部分について実施した。盛土・旧耕作土はバックホーにより掘削を行い、それ以下の層と遺構検出は人力による掘削を行った。調査区を南北に2分割して調査を実施し、調査後は埋戻しを行っている。

#### 基本層序

調査区東側の1／3は削られて窪んでおり、旧地形は残っていない。層序は、上層から盛土、近世・近代の耕作土、近世の盛土である褐色系砂質土、中世の耕作土である黒褐色砂質土混じり灰褐色砂質土、黒褐色砂質土、黒褐色粘質土の堆積の順である。



fig.64 調査位置図 1:2,500

### 遺物・遺構

調査区北半部において中世の耕作地とそれに伴う浅い段落ち部分を検出した。この部分からは土師器の小破片が少量出土した。耕作土からは中世の土師器・須恵器・瓦器が出士している。

### 断ち割りトレンチ

調査区北半部で確認された黒褐色砂質土には中世の土器を少量含むため、調査区の北壁と西壁際に1.2~1.4m幅のトレンチを2本設定し、黒褐色粘質土層上面まで掘削して遺構の検出を試みたが、遺構等は確認できなかった。

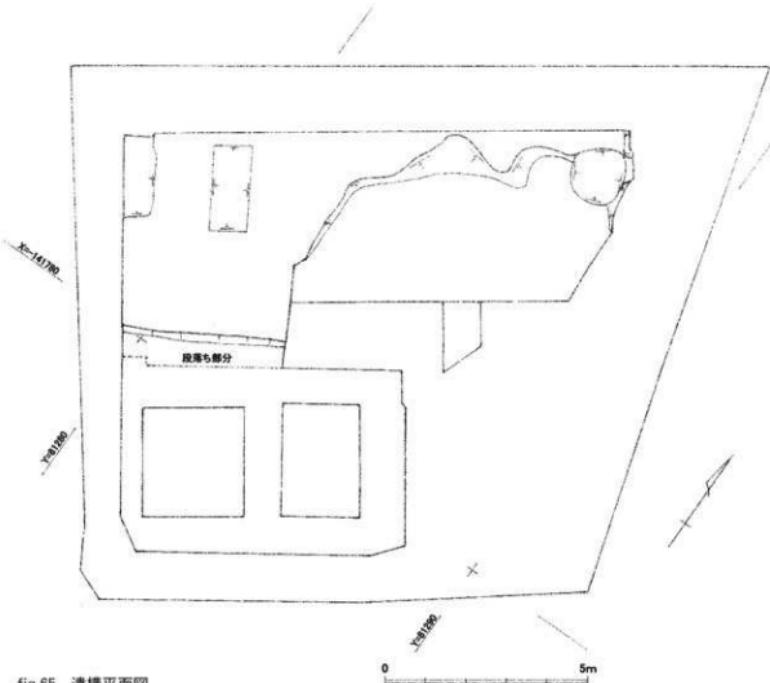


fig.65 遺構平面図

### 3.まとめ

今回の調査では、中世～近世の耕作地とそれに伴う段落ちの部分を確認した。土層の堆積状況を観察すると、急傾斜地において農耕作を営むため何度も盛土作業が行われ、少しづつ耕作地の面積を増加させていった過程が明らかになった。これらの耕作土に少量ではあるが、中世の土器が混入しており、当該期の集落が近隣に存在する可能性を示唆する。

## 12. 日暮遺跡 第39次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は、中央区日暮通・吾妻通・八雲通・東雲通・筒井町一帯に広がる弥生時代末から中世にかけての集落遺跡である。昭和61年に市営住宅建設に伴う発掘調査によって発見され、これまでに38次の調査が行われている。

第39次調査地は、六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地末端に位置し、標高12m前後を測る。周辺の地形は、おむね北西から南東方向に傾斜している。

当調査の成果は、平成27年度に「日暮遺跡第39次調査埋蔵文化財発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参考されたい。

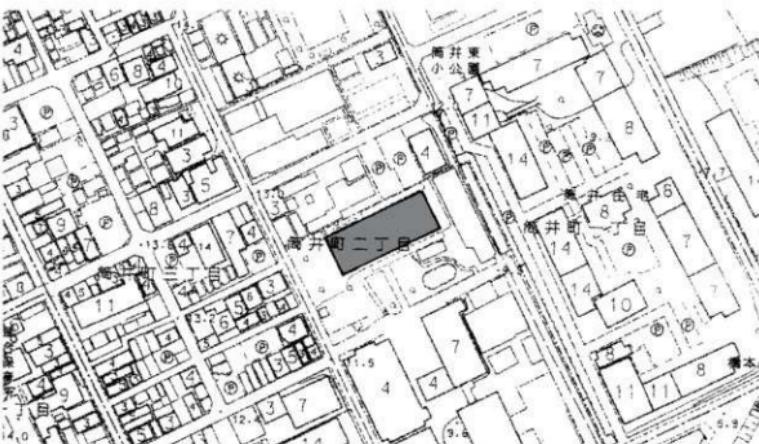


fig.66 調査位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

今回は、工場建築工事によって遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を行った。調査区は西側2/3をA区とし、残り東側をB区と設定して調査を実施した。

#### 基本層序

基本的な層序は、盛土、近世の耕作土である褐灰黄色細砂、中世の耕作土である灰褐色細砂、第1遺構面を形成する暗褐色砂質シルト、古墳時代～中世遺物包含層である黒色混礫シルト、第2遺構面である褐黄色混礫シルトの順に堆積している。

#### 第1遺構面

調査区の西端部に僅かに残った遺構面では、南北と東西方向に延びる数条の浅い溝を確認した。これらは耕作に伴う溝の一部と考えられる。また浅いビットを3基検出した。

#### 第2遺構面

中世耕作土の下層である黒色混礫シルトには古墳時代～中世初め頃の土器・土錐が含ま

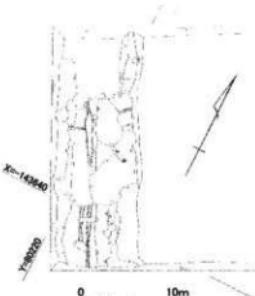


fig.67 第1遺構面西端部遺構平面図



fig.68 A区 第2遺構面遠景（南から）

れる。土質および堆積状況から、この層は湿地状地形の環境下で堆積したものと判断される。この黒色混礫シルトの下層である褐黄色混礫シルト上面が第2遺構面となる。

SD201

幅1~1.6m、深さ30~50cmの溝である。検出長約34mを測るが、大半が從前建物の基礎で失われている。溝内からは古墳時代後期~飛鳥時代頃の土器・土錐が出土している。

SK204

長軸方向1m、短軸方向70cm、深さ50cmの楕円形の土坑である。遺構内からは古墳時代初め頃の土器が橙白色の粘土塊とともに出土している。

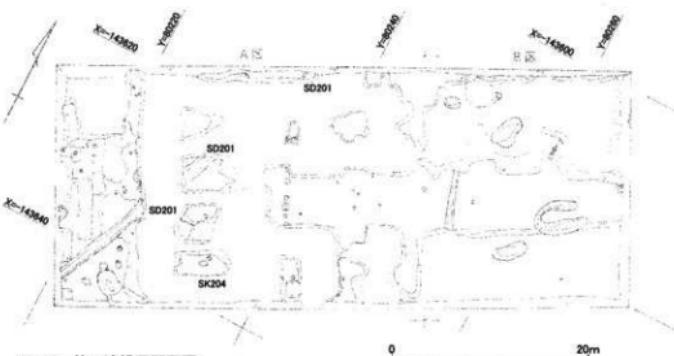


fig.69 第2遺構面平面図

### 3. まとめ

今回の調査では從前の建物基礎による搅乱によって、遺構面の残っている部分は限定されていた。結果的に2時期の遺構面を確認し、第1遺構面で中世の耕作関連の溝、第2遺構面で古墳時代~平安時代頃の溝・土坑・柱列・ピット等を検出した。

周辺の調査状況を参照しながら、今回検出された遺構の分布状況をみると、調査区の西から東に向かって遺構の密度が低くなり、湿地状の堆積土である黒色混礫シルトが厚く堆積している。このことから、当該地周辺が日暮遺跡の縁辺部の可能性も考えられる。

## 13. 日暮遺跡 第40-1次・第40-2次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は、昭和61年に市営住宅建設に伴う調査によって発見された遺跡である。遺跡は、標高10~20mの六甲山南麓の小河川によって形成された扇状地末端に立地する。当該地西側の第11次調査では奈良時代の掘立柱建物が多数見つかっている。また南側の第21次調査で、弥生時代末~古墳時代初頭の土坑や、飛鳥時代の溝や土坑、ビットが発見されている。



fig.70 調査位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の発掘調査は、介護施設建設に伴い工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲を対象に行なった。調査対象地の東西方向に4カ所の独立基礎と、それそれをつなぐ地中梁部分が調査範囲となる。調査区の区割りは、独立基礎部分を西側から1区-1~4、北半部西端のテストビットを2区-1、東半の広い範囲を2区-2、2区-1と2区-2をつなぐ北側トレンチを2区-3、南側を2区-4、2区-2から南に突出するトレンチを2区-5と呼称する。

#### 基本層序

40~50cmの盛土（搅乱）の下は旧耕作土、その下に20~30cmの茶灰色粗砂混り砂質土が堆積する。その下層には遺物包含層である濁褐灰色砂質土が10cm程堆積する。その下層が遺構面を形成する黒灰色砂質シルトである。なお、最下層の黄灰色砂質土は無遺物層となる。

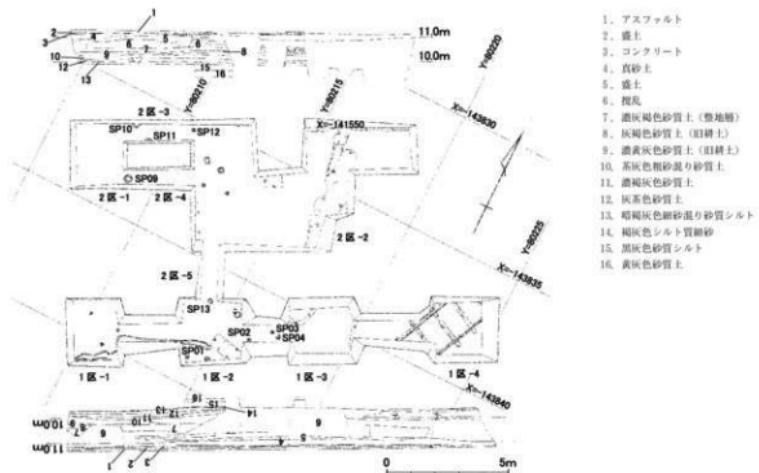


fig.71 造構平面図・南壁土層断面図

### 検出遺構

検出した遺構は、小流路 2 条とピット 19 基である。小流路については人工的なものではないと考えられるが、東西方向に流れることから、河川から溢れ出した土石流によって洪水砂を運ぶような一過性の流路と考えられる。

#### 1区-1

ピット 3 基と小流路を検出した。黒灰色砂質シルト上面で検出したピットは径 16~18cm で非常に浅く、上層から掘り込んだピットの底部分だけが検出できた可能性がある。

#### 1区-2

ピット 7 基を検出した。SP01 は深さ 10cm、SP02~SP04 は深さ 20cm 以上を測る。SP01~SP03 の埋土は、他のピット同様、濁褐灰色砂質土に影響されたものであるが、SP04 の埋土に関しては茶灰色粗砂混り砂質土の影響を受けたものであり、上層から切り込んだ遺構とも考えられる。



fig.72 1区-1・2 ピット検出状況（南西から）

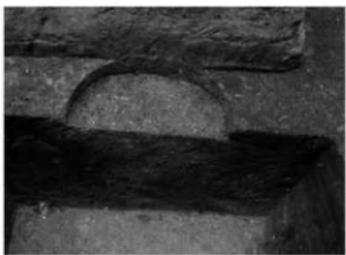


fig.73 1区-2~3間 SP02断割り断面 (北から)



fig.74 1区-2~3間 SP03・SP04断割り断面 (南西から)

### 1区-3・4

遺構面においては、動物の足跡や、植生痕などを検出した。

1区-4では線路を検出した。検出した線路は長さ2.3mで、枕木が5本敷設されたものである。レールの形状は、レール町歩の平坦面の幅が13.3cmと広く、その平坦面に幅4.5cm、

深さ3cmの溝が設けられた溝付き護輪レールである。軌間1,435mmであることから路面電車のものと考えられ、「神戸電気鉄道株式会社」が営業した春日野一兵庫駅前線に関連するものと思われる。

### 2区-2

径16~18cm、深さ10~15cm程度の深いピット4基を黒灰色砂質シルト面で検出したが、上層からの掘り込みとも考えられる。遺物は出土しなかった。

### 2区-3

土層の状態が最も良好に保存されていた調査区である。ピット3基を検出した。SP10とSP11は茶灰色粗砂混り砂質土層上面から掘り込むピットである。SP10は径40cm、深さ30cmを測るが出土遺物はなかった。SP11は径38cm、深さ34cmを測る。須恵器と土師器の細片が出土した。

SP12は径18cm、深さ22cmを測る。黒灰色砂質シルト上面で検出したが、出土遺物はなかった。

### 2区-4

2区-3同様に土層の状態が良好に保存されていた。茶灰色粗砂混り砂質土層上面から掘り込むSP09を検出した。径32cm、深さ14cmを測る。出土遺物はなかった。



fig.75 1区-4 検出した線路 (東から)



fig.76 2区-2 黒灰色砂質シルト面全景 (南から)



fig.77 2区-2西半 ピット断面（南から）



fig.78 2区-4 SP09半断面（東から）

## 2区-5

SP13を黒灰色砂質シルト面で検出したが、ピットの埋土は上層の濁褐灰色砂質土と同様のものであることから、濁褐灰色砂質土上面から切り込んだ可能性がある。出土遺物はなかった。

## 3.まとめ

調査区の東半分が攪乱であり、狭小な範囲であったため検出できた遺構もわずかであった。出土遺物も微細なものが少量出土するのみであった。そのため、今回検出した遺構は周辺での発掘調査の成果を考慮して検討する必要がある。

当該地の西側では、平安時代の掘立柱建物群が検出されており、第11次調査で弥生時代～平安時代の遺物包含層と報告されている層が、今回の調査の遺物包含層に相当するものと考えられる。そのうち濁褐灰色砂質土が南側で行われた第21次調査での飛鳥時代の灰黄色砂質粘土に相当するものと考えられる。それぞれの調査で検出した遺構と今回検出した遺構とは、調査面積の制約等もあるために図面上整合しても建物跡などを復元することはできなかった。

以上の検討から、今回の調査で確認された土層は、茶灰色粗砂混り砂質土が平安時代、濁褐灰色砂質土が飛鳥時代、黒灰色砂質シルトが弥生時代であることが確認できたことは大きな成果といえる。よって、今回検出された遺構はおおむね平安時代と飛鳥時代のものが中心であったといえる。



fig.79 2区-5 SP13断面（北から）

## 14. 日暮遺跡 第41次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は弥生時代から近世にいたるまでの集落遺跡で、弥生時代後期～古墳時代前期・飛鳥時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代を中心とする集落がこれまでに確認されている。遺跡は、標高10～20mの六甲山南麓地から流れ出る河川によって形成された扇状地の末端部に立地し、東西約600m、南北約500mの範囲に広がる。



fig.80 調査位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴う工事によって遺跡が損壊される恐れのある範囲を対象に発掘調査を実施した。残土置き場の関係から、南北に分けて行っている。

#### 基本層序

現地表面は、南北に傾斜した地形となっている。層序は、現地表面から約80cmの盛土および搅乱土があり、その下に旧耕作土が約20～60cm堆積する。そして、その下層の黒色粘質細砂上面が第1遺構面になる。その下層である黒褐色混じり褐色粗砂上面の第2遺構面で検出した遺構からは、中世の土器が出土している。その下層には、土石流や流路などによる土層が堆積しているが、これらの層から遺物は出土していない。

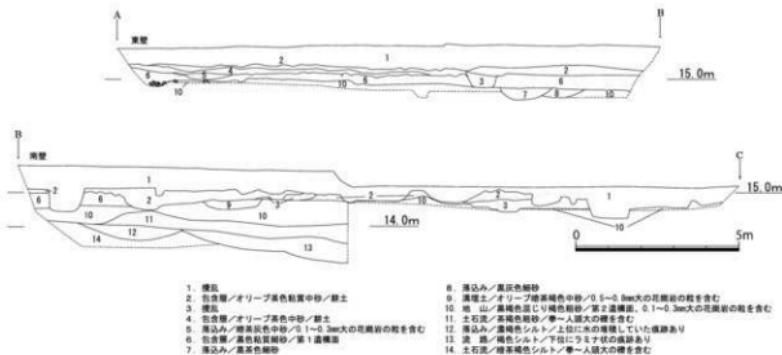


fig.81 調査区東壁・南壁土壌断面図



fig.82 1区 第1遺構面全景（北西から）



fig.83 1区 第1遺構面全景（西から）

### 第1遺構面

黒色粘質細砂上面で検出した遺構は、土坑1基、ピット3基である。

#### SK101

土坑は、径1.1m、深さ70cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

#### SP101～SP103

ピットは、いずれも径30cm、深さ20cmである。遺物の出土はなく、時期は不明である。

### 第2遺構面

黒褐色混じり褐色粗砂上面で検出した遺構面である。土石流によって運ばれてきた拳大～人頭大の礫が一部露呈している。

検出した遺構は、土坑9基、ピット23基、溝3条である。

#### SK201～SK209

土坑は、いずれも径約40～160cm、深さ約20～40cmである。遺物は出土していない。

#### SP201～SP223

ピットは、いずれも径約15～40cm、深さ約10～30cmである。ピットに柱痕は認められなかった。遺物は出土していない。



fig.84 第1造構面平面図

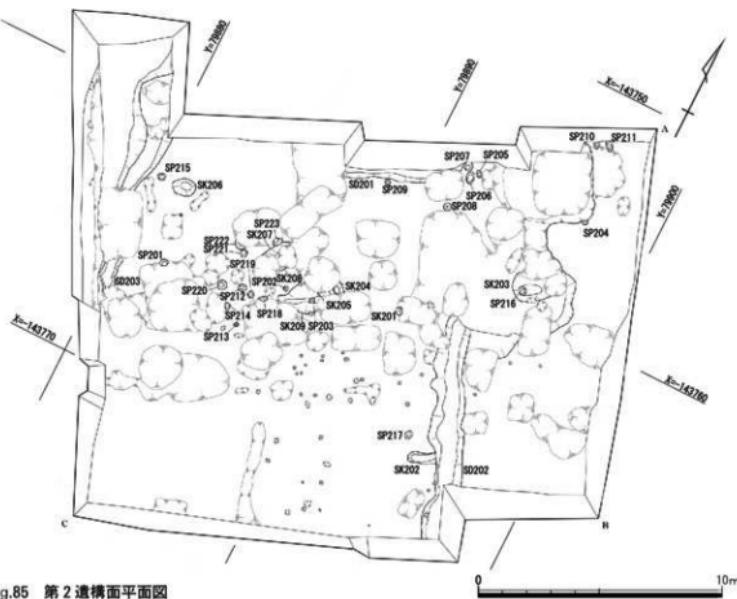


fig.85 第2造構面平面図



fig.86 1区 第2遺構面全景 (北西から)



fig.87 2区 第2遺構面全景 (西から)

#### SD201～SD203

溝3条を検出した。そのうちSD201は幅50cm以上、深さ20cmで、検出長5m以上を測る。16世紀と考えられる備前焼鉢や土師器皿、堀などが出土している。

#### 3.まとめ

第1遺構面は近現代の搅乱により、大半が削平されている状況で、わずかな遺構を検出するのみにとどまった。

第2遺構面では、土坑やピットを検出したが、掘立柱建物としてまとまる成果は得られなかった。そして、SD201の埋没時期から判断すると、戦国時代の遺構面にあたると考えられる。当該地に西隣する第33・34次調査地では、土坑やピットが散逸した状況で検出されている。それらの時期は、12世紀を中心とする時期だが、14～15世紀も一部を含むという。時期的には、今回の調査区で検出した第2遺構面とは開きがあることを踏まえると、第33・34次調査区の集落域が東へ進出したか、移動した可能性が考えられる。

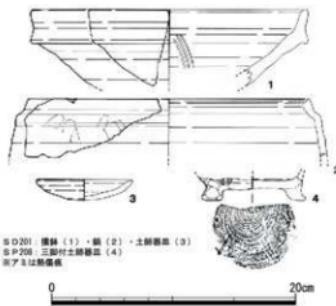


fig.88 出土遺物実測図

## 15. 日暮遺跡 第42次調査

### 1. はじめに

日暮遺跡は西郷川右岸の扇状地に位置し、縄文時代から江戸時代に至る各時代の土器が確認されており、古くから生活の場として利用してきた地域である。

弥生時代の遺構も確認されているが、集落としてまとまりを見せるのは古墳時代初頭である。古墳時代前期の堅穴建物は41次に及ぶ調査の中で、確実なものだけでも14棟以上が確認されている。出土遺物には、銅鏡のほか、山陰・東部瀬戸内などの他地域からの搬入土器なども認められる。

また、飛鳥時代～平安時代にいたるまでの集落も日暮遺跡における代表的な時代であり、30棟以上の掘立柱建物が確認されている。さらにこれらの建物に伴って、寛平大寶・延喜通寶・承和昌寶・石帶(丸輪)などが出土しており官衙的な側面を見せる。その一方で、漁具が多く出土するなどの特徴もあわせもっている。



fig.89 調査地位置図 1:2,500



fig.90 調査区東半 第1遺構面全景（北から）



fig.91 調査区西半 第1遺構面全景（北から）

## 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、柱状改良により遺跡に影響を及ぼす範囲をトレンチ状に設定し調査を実施した。

### 第1遺構面

旧床土直下で確認した遺構面である。ピット等が確認できたが、規則性もなく建物としてまとめられるような状況でなかった。

### 第2遺構面

溝2条と土坑を確認した。遺物がほとんどなく時期は不明である。

### 第3遺構面

検出した遺構は浅い落ち込みを確認したのみである。近隣の調査成果から平安時代の遺構面である可能性が考えられる。

### 第4遺構面

古墳時代前期の遺構面であるが、遺構・遺物等は確認できなかった。

## 3. まとめ

日暮遺跡では、40次以上に及ぶ調査を経て、遺跡の概要がかなり明らかとなってきた。特に古墳時代の集落並びに飛鳥時代～平安時代にかけての集落の範囲を限定できるようになった。今回の調査地の立地からみて、平安時代の集落が調査地まで広がる可能性は低いものと考えられる。

古墳時代前期の集落については、東側の第27・30次調査で確認されていることから、広がりが確認できるかは重要な焦点のひとつであった。しかしながら、今回の調査では古墳時代の遺構・遺物は確認できおらず、集落の縁辺部から外れる可能性が示唆された。このことから、古墳時代の集落が営まれた地形とは別の微高地上に今回の調査地点は立地する可能性が考えられる。

今回の調査は、今後この新たな微高地での集落の展開を考察するうえで、貴重なデータを得たといえる。

## 16. 生田遺跡 第8次調査

### 1. はじめに

生田遺跡は、六甲山南麓の丘陵裾部から流れ出る小河川により形成された狭小な扇状地扇央付近に立地する。第1次調査において古墳時代中期～後期の竪穴建物、倉庫群が検出され、古墳時代の集落跡として注目された。平成17年度の第4次調査では、縄文時代後期の住居址状の落ち込みや土坑が検出され、同時期の多量の土器が出土したほか、ヒスイ製小玉や土偶など市内では稀有な遺物の出土があった。また、弥生時代中期の竪穴建物、方形周溝墓や、古墳時代後期の掘立柱建物、竪穴建物、柵列、土坑などが検出されている。その他、奈良時代の井戸や平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・土坑、中世末の大溝などが確認されている。

今回は第8次調査にあたり、調査成果は平成27年度に「生田遺跡第8次発掘調査報告書」を刊行しているので、詳細については同報告書を参照されたい。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴い実施した。調査地は遺跡の範囲の北西端に近く、第4次調査地点の北側に位置する。調査区は、西半をI区、東半をII区、北側入口部をIII区、その東側をIV区とする。

#### 基本層序

層序は、盛土下に明治時代の整地土・耕作土があり、その下に近世耕作土が堆積する。その下層は中世耕作土で、南側では2層となる。中世耕作土の下に古墳時代～古代の遺物を含む灰褐色粘質土や暗灰褐色粘質土が堆積する。その下面が黄灰色砂質土の地山面である。

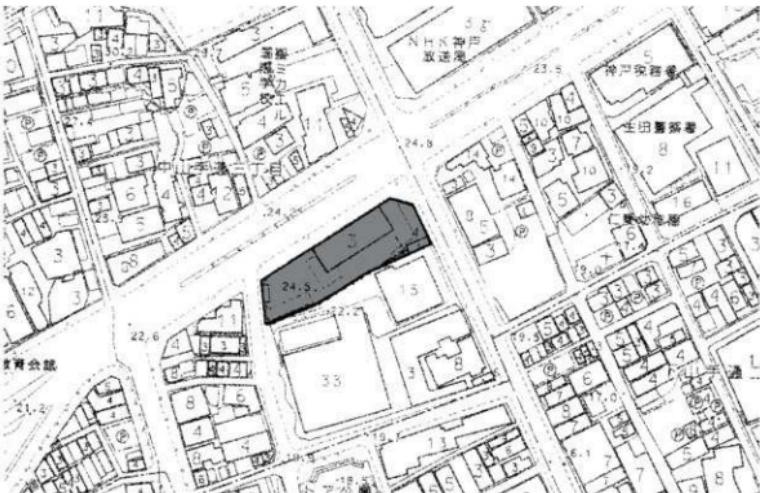


fig.92 調査地位置図 1:2,500

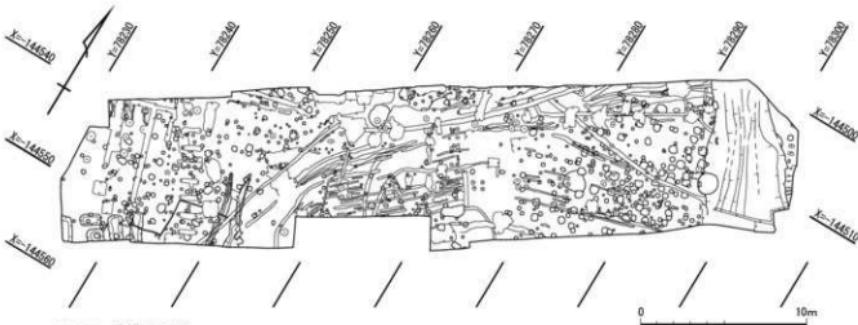


fig.93 遺構平面図



fig.94 I区 遺構面全景（東から）



fig.95 IV区 遺構面全景（北東から）

### 検出遺構

調査区南西部で竪穴建物と考えられる落ち込みを2棟確認したほか、全域で掘立柱建物12棟、土坑8基、溝9条、井戸3基と多数の耕作に伴う溝などを検出した。

#### SB01

一辺約6mの平面方形を呈する竪穴建物である。深さ15~20cmで、床面で数基の柱穴が確認できたが、主要な柱穴になるかは判然としない。また周壁溝は検出されなかった。この建物からは古墳時代後期の土器が出土している。

#### SB02

東西の検出長約5mで、大半が調査区の南側に拡がる竪穴建物である。西辺南側で周壁溝の可能性のある細い溝を検出している。古墳時代後期の須恵器などが出土している。

#### 柱穴（掘立柱建物）

調査区全域で約700基の柱穴を検出した。出土遺物は少なく時期決定が困難であるが、古墳時代や飛鳥時代の柱穴も存在するが、ほとんどは奈良時代～平安時代に属するものと考えられる。

柱穴の規模や遺構埋土の状況から、2間×2間や4間×3間規模の、10棟の建物を復元した。

灰色系粘質土の埋土の柱穴は少なく、径20~30cmを測り、出土遺物などから中世以降の時代の可能性が高い。暗灰色・黒褐色系粘質土の埋土の柱穴は、一辺70cmほどの平面方形



fig.96 III区 遺構面全景（東から）

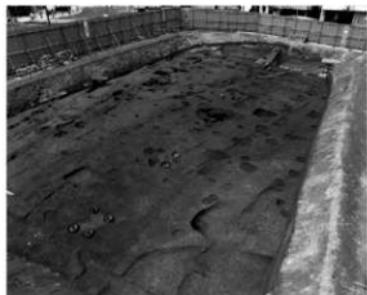


fig.97 II区 遺構面全景（南西から）

の掘形のものが多い。出土遺物は少ないが、奈良時代～平安時代の時期と考えられる。

#### 土坑

SK06は長径約1m、短径70cm、深さ約30cmの平面梢円形の土坑である。埋土上層から縄文時代後期の深鉢と考えられる土器が出土している。

SK07は長径2.5m、短径2.3m、深さ30cmの土坑である。埋土には炭が多く混じる。奈良時代後半の須恵器・土師器が出土している。

SK08はSD09の西肩で検出した一辺3mほどの隅円方形の平面形を呈する土坑である。深さは約1.3mで底面に小礫が括がり、植物遺体が薄く堆積する。埋土は砂とシルトが互層堆積し、滯水を繰り返したと考えられる。奈良時代後半～平安時代の須恵器・土師器が出土している。

#### 溝

SD02は調査区西半で検出した溝で、検出長は南北約8.4m、幅約80cm、深さ約30cmである。埋土は灰褐色粘質土で一部洪水に伴う砂と互層となる。古墳時代後期の須恵器の壺身や土師器片が出土した。

SD03はSD02の西側に並行する形で検出した溝である。検出長約8.5m、幅60cm、深さ約40cmである。断面の形状はV字形で銳角に掘り込まれる。出土遺物は少ないが弥生土器の小片とサヌカイト製石鐵が出土している。

SD04～SD08は調査区南西部で検出した土坑状の溝群である。南北方向のSD04～SD07は並行しており、東西方向の溝SD08がSD05の北側に直交して掘られている。全体を検出したSD08は幅1.3m、長さ2.5m、深さは80cmで断面の形状は箱形である。SD04・05・08から弥生土器片やサヌカイト製石鐵が出土している。今回検出した5条の溝の南東側では、第4次調査において方形周溝墓が確認されている。今回検出の溝もSD04・06・08の配置などから周溝墓の溝である可能性が考えられる。

SD09は調査区東端で検出した南北方向の大溝で、



fig.98 SD09全景（南から）

検出長約15.5m、最大幅約9.5m、最深部は深さ約2.7mである。断面の形状はV字状で、西側にテラス状の段がある。

最下層の砂層から室町時代後半～近世初頭の瓦片や陶器片が出土した。また、灰黄色粗砂でほぼ埋没した段階で石組溝が構築されている。ここからは古墳時代から近世までの多くの遺物が出土した。

#### 井戸

SE01は掘形が南北約2.8m、東西約2.4mの楕円形で、深さは約1.8mである。井戸側は縦板組隅柱横棟留構造で、その上部に石組み構造をもっていたと思われる。井戸底の中央を掘りくぼめ、曲物一段を据えていた。遺物は、瓦器塊、土師器鍋片のほか柄杓の小型の曲物が出土している。平安時代末から鎌倉時代初頭頃に廃棄されたものと考えられる。

SE02は掘形が一辺約1.3mの隅円方形を呈する。井戸の深さは90cmで、底は湧水層である粗砂層に達している。検出面から20cmほど下部で、内法一辺約62cmの縦板組隅柱横棟留構造の井戸側上面を検出した。底部に曲物を据える。上層埋土より平安時代後期の瓦器塊が出土した。

SE03は掘形が一辺約1mの隅円方形を呈する。埋土中に人頭大の石を含み、底面で径約40cmの曲物を検出した。

#### 3.まとめ

今回の調査は、第4次調査地の北側に隣接し、先の調査において検出された各時代の遺構がさらに標高の上位地点に拡がることが確認できた。

縄文時代の遺構は、土坑1基と土器片の集中箇所1か所を検出した。第4次調査と同じく後期のものと考えられる。その他、中世耕作土に混じり石鏃や石刀1点が出土している。弥生時代の遺構は、南西部で検出した方形周溝墓の可能性があるSD04～SD08の5条の溝状遺構である。遺物の出土に乏しいが中期に属するものと推測される。

古墳時代の遺構は、方形の竪穴建物2棟と溝状遺構1基である。ともに古墳時代後期の土器が出土している。集落域は第4次調査地より北にさほど拡がらない様相である。

古代～中世の遺構は、井戸3基と掘立柱建物の大半がこの時期に属するものと考えられ、居住域がより高位の北側に拡がるものと推測される。集落域の形成時期を考える上で重要な成果があった。また中世末の大溝の検出は花熊城跡との関連の中で注目されるものである。

中世以降、耕作地として長く同様の土地形状であったことが耕作に伴う溝の形状から明らかになった。



fig.99 SE01全景（南から）



fig.100 SE02曲物検出状況（南東から）

## 17. 旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道

### 1. はじめに

神戸外国人居留地は、大坂奉行の柴田剛中によって開港の3ヶ月前に造成工事に着手し、慶応3（1868）年の開港式典から半年を過ぎた同年6月末に完成した。神戸外国人居留地の範囲は、東が生田川、西は鯉川、北は西国街道、南は海岸までと定められた。イギリス人土木技師 J.W.ハート（John William Hart）が作成した明治3年と明治5年の計画図が現存している。

### 2. 調査の概要

共同溝埋設に伴う工事実施中に、煉瓦造下水道管が不時発見された。発見された煉瓦造下水道の位置が、J.W.ハート作成の居留地地図1872年版（神戸市立博物館蔵）に描かれた、細い赤いラインで計画された下水道流路の位置に該当することが判明した。当図は、計画図のため実際に見つかったものとは異なる部分もあるが、居留地建設当初の下水道と判断し、保護措置として記録調査を実施して、一部の切り取り保存を行うこととした。

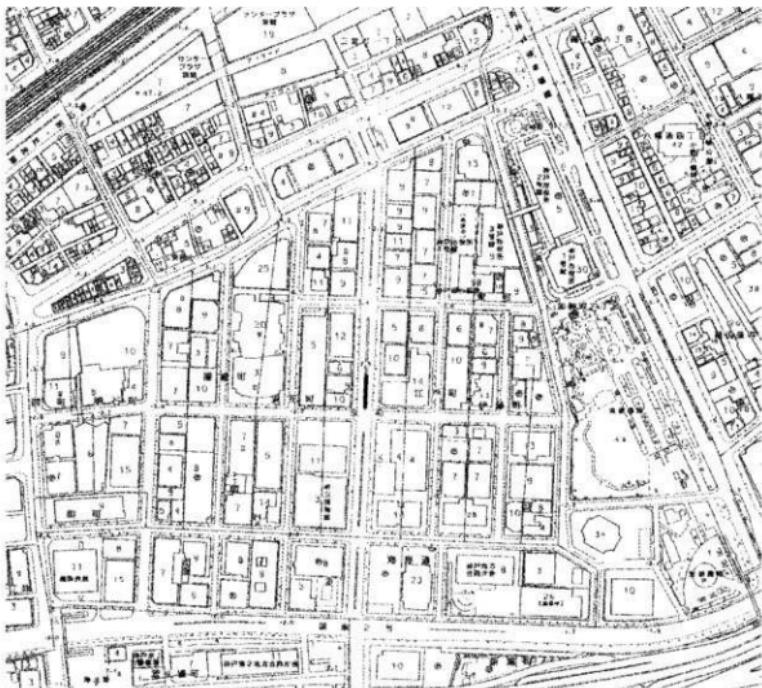


fig.101 調査地位図 1:5,000

## 煉瓦造下水道管の構造

現道路面から1m下の煉瓦造下水道管の直上までは、現代の盛土と搅乱が見られた。全長17mを検出した煉瓦造下水道管は、断面の形状から卵形管とされるものである。内径は、長径約60cm、短径46cmを測る。

断面観察からの施工方法は、最初に敷設予定場所に断面逆台形の溝を開削し、その後管の中心となる場所に沈下を防ぐ目的でおおむね1~2m間隔で杭を打設している。次に、自然勾配で北から南へ流れる傾斜をつけるための整地土が施される。そして煉瓦を下半分積み上げながら濁灰色砂質土を充填し、下半部を組みあげる。上半部はアーチ状になるため、漆喰を崩壊防止のために煉瓦全体に接着させて構築したようである。最頂部では、本来は鍵石的な煉瓦が必要となるが、微妙な隙間には漆喰を詰めて調整したようである。上半部が組みあがると、灰白色砂質土に漆喰を混ぜ込んで埋め土自体を固くすることにより下水管の崩壊を防いだものと考えられる。

### 3.まとめ

都市基盤整備として外国人居留地に敷設された下水渠は、明治5年に竣工し近代下水渠としては横浜と並び国内最初期のものである。今回発見された煉瓦造下水道管は卵形管であり、神戸市立中央図書館蔵の『DETAILS OF RODO AND DRAINAGE WORKS FOR THE FOREIGN SETTLEMENT OF HIOGO.1868』には居留地内の煉瓦造下水道と街路の詳細を知る資料がある。南北路である明石町筋、浪花町筋には内径36in (1in=25.4mmとして約914mm) の円形管が2条と、播磨町筋、京町筋、江戸町筋、伊藤町筋には長径24in (約610mm)、短径18in (約457mm) の卵形管が4条、1,072.6m敷設されたことが知られている。

明治14年頃に建設され、居留地時代に建てられた商館として唯一現存する旧居留地十五番館（重要文化財）の東面道路に一部が現存しており、そのうち延長約90mの間は雨水幹線として現在も供用されている煉瓦造下水道管は、都市の発展とともにその多くが改変されてしまったと考えられるが、今後も発見される可能性がある。



fig.102 煉瓦下水道構築状況



fig.103 旧居留地内煉瓦下水道出土状況（北から）

## 18. 楠・荒田町遺跡 第57次調査

### 1. はじめに

楠・荒田町遺跡は、地下鉄山手線建設工事に伴い初めて確認された遺跡で、これまで50次を数える調査を行ってきた。その結果、弥生時代前期から中期の遺構・遺物や平安時代末から鎌倉時代の屋敷跡と考えられる遺構が数多く確認されている。当該地は、大倉山から続く丘陵端の台地で、なだらかな緩斜面地に位置する。

### 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について実施した。盛土・耕作土はバックホーで掘削し、それ以下の層は人力により掘削・精査を行った。

#### 基本層序

現地表面から75cm程は盛土が堆積し、その下に複数の近世の瓦や土師器片を含む耕作土が存在する。そして、遺構面となるバイラン土層となる。

#### 検出遺構

検出された遺構は、落ち込み状遺構2基、ビット6基、土坑1基である。

#### SX101・SX102

落ち込み状遺構は東西で1カ所ずつ確認されている。西側のSX101は、深さ30cm弱を測る。北東方向に緩やかに落ち込み、調査区の中央あたりで北側に屈曲する。

東側で検出したSX102は、深さ50cmを測る。暗褐色シルトからは底部穿孔された弥生時代中期の土器が出土している。

方形周溝墓SX101とSX102の間隔は、約20cmから2m程度を測り、2か所の落ち込みに囲まれた部分は一辺6m以上の方形を呈すると考えられる。周辺の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓が数多く検出されており、当遺構は同様のものである可能性がある。

方形周溝墓とすればSX101とSX102の間は地山を掘り残して形成した陸橋部分と考えられるが、墓坑様の土坑などは検出されなかった。



fig.104 調査位置図 1:2,500

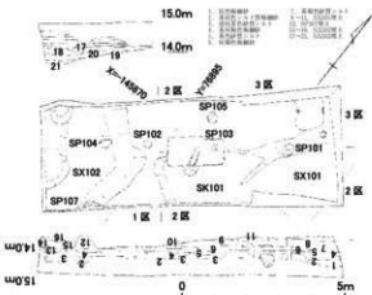


fig.105 遺構平面図・土層断面図



fig.106 1区 遺構面全景 (東から)

#### SP101～SP107

SP101・SP102は灰色系の埋土から鎌倉時代頃の土師器・須恵器片が出土している。SP104・SP107は、径40cm程、深さ40cm程を測り、黒灰色シルトの埋土である。落ち込みの上面で検出されているため、弥生時代中期以降のものである。これらのピットは建物に伴うものと考えられるが、調査地が狭小であったため、詳細は不明である。

#### 土坑

土坑は、調査区中央で検出されており、長さ80cm、幅40cmを測る。遺構の大半は搅乱されていた。SX101埋土の上面で検出されたため、弥生時代中期以降のものと考えられる。

#### 3.まとめ

今回の調査は限られた範囲ではあったが、弥生時代中期及び中世の遺構・遺物を確認した。SX101・SX102は、弥生時代中期の方形周溝墓の一部である可能性が考えられる。

また、近隣の調査では中世の大規模な区画溝が検出されていて、屋敷地が当調査地周辺に広がっていた可能性がある。今回調査で検出されたピットもそれに関連するものと推測される。



fig.107 2区 遺構面全景 (東から)



fig.108 3区 遺構面全景 (西から)

## 19. 祇園遺跡 第21次調査

### 1. はじめに

祇園遺跡は、兵庫区上祇園町・下祇園町・五宮町・上三条町・下三条町に広がる集落跡である。六甲山系から流れ出る天王谷川によって形成された扇状地の扇頂部に位置している。

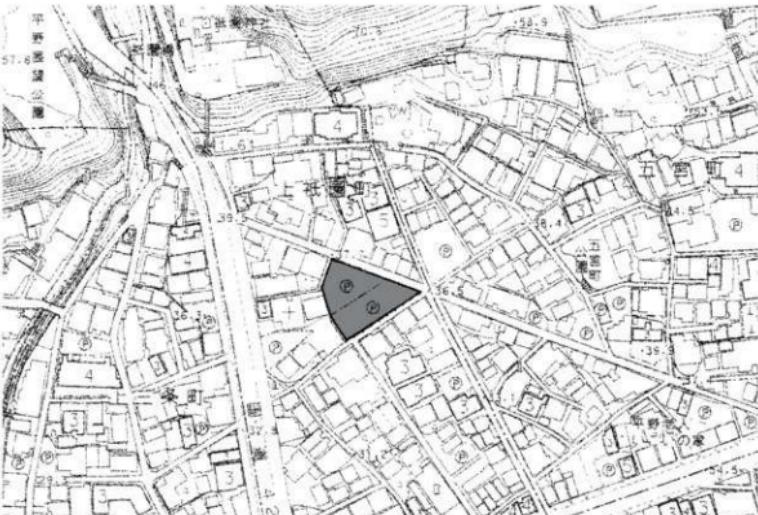
遺跡の周辺は「平野」とよばれる地域で、平安時代後期に平清盛が別業を築いた地が「ひらの」であり、遺跡の近くには「雪御所」の地名が残ることから、この付近に別業が存在したものと考えられている。また、別業は治承4（1180）年の福原行幸の際には、安徳天皇の御所として提供されており、福原宮の中枢部もこの辺りに展開していたものと想定される。

祇園遺跡のこれまでの発掘調査では、12世紀後半の掘立柱建物や井戸、園池造構を検出している。遺物は京都系土器器皿や山城系瓦などが多く出土しており、平家や福原京との関連をうかがわせる。また、出土例の極めて少ない中国吉州窯産の玳瑁天目小碗が出土しており注目される。その他、弥生時代中期～古墳時代初頭の堅穴建物や溝などを検出している。

### 2. 調査の概要

今回の調査は共同住宅建設に伴うもので、基礎工事により埋蔵文化財に影響がある部分を対象とした。調査の進捗により、1区～4区にわけて調査を進めた。

なお、当調査の成果は、平成27年度に「祇園遺跡第21次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参考されたい。



## 基本層序

調査地の現地表面の標高は約37mである。層序は、約1.4～1.9mの盛土下に約50cmの旧耕作土や床土層が堆積する。その下層で遺物包含層である暗灰褐色砂質土・淡灰黃褐色粘性砂質土が約10～20cm堆積し、下層の褐灰色砂質土・淡青灰色粘性土上面が第1遺構面となる。さらに約10～20cm下には暗褐色粗砂混じり砂質土・灰褐色粘性砂質土が堆積し、その上面が第2遺構面となる。1区ではその下層が黄褐色粗砂混じり砂質土の地山となり、第3遺構面となる。2～4区では褐灰色粘性砂質土が堆積し、この上面が第3遺構面となる。

## 2. 調査の概要

### 1区

#### 第1遺構面

耕作溝群を調査区の北東部と南半において検出した。

出土遺物は少なく詳細な時期は決定しがたいが、平安時代後期頃までと思われる。

#### SB101

調査区北西部で検出した礎石建物である。2間×1間分を検出したが、調査区外に続くため規模は不明である。柱間隔は、南北が約1.8～2.4m、東西が約2.8mである。礎石は長軸20～30cm前後の花崗岩で、礎石の一部は上面を平坦に加工し柱座を造り出している。また、一部には火を受けた痕跡があり、焼失建物の礎石を転用した可能性も考えられる。出土遺物が少なく詳細な時期を決定しがたいが、平安時代中期～後期頃と考えられる。

#### 第2遺構面

#### SB201

調査区南半で検出した掘立柱建物の規模は、2間×2間を測り、一部が調査区外に続いている。柱間隔はいずれも約2.1mである。柱穴は径40～50cm程で、深さ15～30cm程を測る。出土遺物から平安時代後期と考えられる。

#### ピット

調査区北部で検出したSP404では、ほぼ完形の須恵器壺が2個体重ねられた状態で出土した。地鎮のために埋納されたものと考えられる。

#### SD301～SD304

調査区北半で直交し合う4本の溝を検出した。幅1～1.6m前後で、深さ15cm程である。埋土からは平安時代後期の土師器皿や須恵器壺の破片が多数出土している。

#### 第3遺構面

#### SK401

調査区南西端で東西約1.2m、南北1m以上、深さ約40cm



fig.110 1区 SB101検出状況 (南から)



fig.111 1区 第2遺構面全景 (南から)

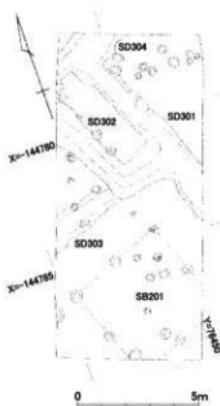


fig.112 1区 第2遺構面平面図

の比較的大型の土坑を検出した。土坑からは人頭大の礫と伴に弥生時代後期の土器がまとまって出土している。遺構の全容は不明であるが、掘り込みの状況などから墓坑の可能性が考えられる。

## 2～4区

### 第1 遺構面

全体に遺構の密度は高くなく、2区で石列や数条の溝、3区で石組みを検出した。

### 第2 遺構面

#### SB202

2区北東部で3間×1間の掘立柱建物を検出したが、調査区外へ続いている可能性がある。柱間隔は東西が約1.9m、南北が約2.2mである。柱穴は径40～50cm前後、深さ30～60cm前後である。平安時代後期の須恵器壺や土師器皿が出土している。

#### SB203

SB203はSB202のすぐ北東側で検出した1間×1間の掘立柱建物であるが、調査区外へ続いている可能性もある。柱間隔はいずれも約2.1mである。柱穴は径25cm前後、深さ20cm前後である。

### ピット群

調査区北東部において多数のピット群を検出した。特に3区では遺構密度が高く、何らかの建物が存在したと考えられるが、復元にはいたっていない。各ピットからの遺物はあまり多くないが、平安時代後期の土器が出土している。

#### SX201

3区西部では東西約8m、南北約4m以上、深さ15cm前後の不定形な落ち込みを検出した。埋土からは平安時代中期の土師器皿、黒色土器壺、須恵器壺・甕と20～30cm前後の多量の礫が出土している。部分的にまとまって出土している土器もあることから、埋没の過程で比較的短期間に投棄されたものと考えられる。

### 第3 遺構面

#### ST301

2区南西端で検出した土器棺墓は、直徑約80cm、深さ約35cmの掘形をもち、器高・胴径とともに約40cmの大型の広口壺が横たえられた状態で埋められていた。壺は口縁部を打ち欠いており、その破片で胴部の穿孔を閉塞していた。時期は弥生時代後期である。

#### SX301

2区南西部で落ち込みを検出した。当遺構は調査区外へ続いたため全体の形状規模は不明であるが、深さ50cm、一辺5m以上を測る。弥生時代後期の高環や壺など数個体分の土器片がまとめて出土した。

### 3.まとめ

弥生時代の遺構は、後期の土器棺墓や土坑、落ち込みなどを検出した。周辺の調査では、弥生時代中期～古墳時代初頭の集落跡が発見されており、今回の調査区も集落の居住域などの中心部からは外れるものの、その一部に含まれると考えられる。

平安時代の遺構は調査区北東部に展開している。掘立柱建物は合計3棟検出した。平安時代後期の遺構は、平家に関連するものである可能性が高く、周辺の調査ではそれをうか

がわせる遺物が出土している。しかし、今回の調査地ではそのような遺物はほとんど出土していないことから、今回の調査地は中枢部には当たらないと考えられる。

平安時代の遺構は、弥生時代の遺構とは逆に調査区南西部では検出されず、北東部で多く検出されている。南西部は土地が低く土石流の流入がみられることから、弥生時代に遺構が形成されて以降は土地利用がされなかったと考えられる。一方、北東部は土地が高く安定していたことから、平安時代に開発が進み、多くの遺構が残されたとみられる。



fig.113 2~4区 第2遺構面平面図

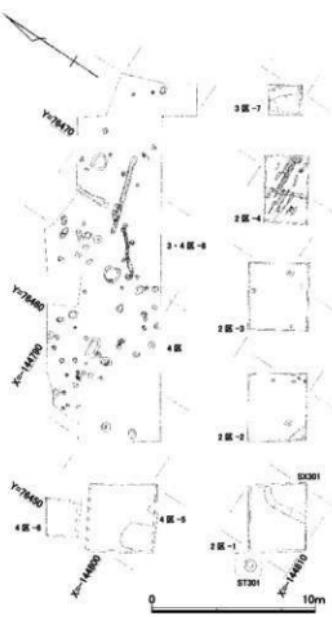


fig.114 2~4区 第3遺構面平面図



fig.115 2~4区 第2遺構面全景（北東から）

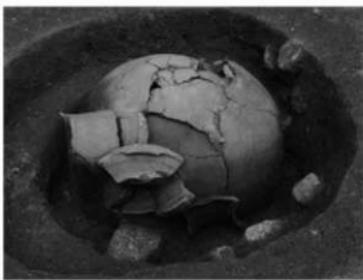


fig.116 2-1区 土器棺墓S T301検出状況（南から）

## 20. 兵庫津遺跡 第62次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する古代から近世にかけての複合遺跡である。古くは「大輪田泊」と呼ばれ文献上にもたびたび登場する。とくに、平安時代後期に平清盛により経ヶ島が築造され、日宋貿易の拠点とされたことは著名である。中世になり兵庫（島）と呼ばれるようになってからも、寺社勢力の庇護のもとに瀬戸内海運の主要港として栄え、室町時代前期には明との通商の窓口として整備される。戦乱の世になると、兵員や軍需物資の輸送などの兵站的な面からも戦国大名達によって着目されるようになり、有力な豪商に保護されていったが、天正8（1580）年に兵庫の町は織田信長方の軍勢による花熊城攻めの際に焼かれる。この後、織田・豊臣の政権下で、兵庫城が築かれて町全体の城郭化が進められていく。都賀堤やかつての町域北西にあたる寺町はこの名残とされている。

近世の兵庫津は、当時の経済の中心地で大消費地でもあった大阪の外港としてだけではなく、西国との人の往来や、物資の流通量の増加に伴って物資の集積地として、さらには西国街道の宿場町として発展を続け、慶応3（1867）年に兵庫（神戸）開港をむかえる。明治時代になると初代兵庫県庁が兵庫陣屋跡に置かれるが、新川運河の開削によって北西の3分の1ほどが削平され姿を消す。

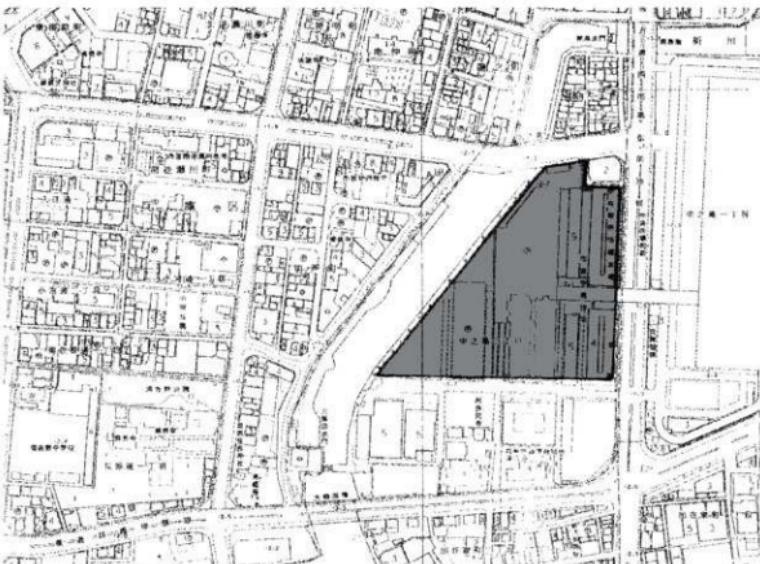


fig.117 調査地位置図 1:5,000

## 2. 調査の概要

今回の調査は、旧中央市場本場跡地で平成25年2月より開始した。一部は平成24年度に実施した第57次調査によって、兵庫城の石垣や堀をはじめ近世の町屋群などが確認されている。

調査は調査対象地を3分割しX～Z区とした。X区は旧閑屋町を中心とする町屋部分、Y区は旧新町を中心とする町屋部分、Z区は兵庫城の城郭部分にあたる。

### 基本層序

地表面（標高1.8m前後）からの層序は、近現代の整地による盛土が60～100cm程あり、直下に薄い旧表土および戦災の整地層が残存し、江戸時代後期の遺構面となる。Y区の大半とX区の東部では、焼土や砂の整地層を伴う3～6面の遺構面が確認され、その下が明褐色砂の砂礫層となる。なお明褐色砂の検出面は標高-0.4～-0.8mである。

X区中央部とZ区の大半においては、江戸時代後期の遺構面の直下もしくは薄い整地層を挟んで1～2面の遺構面が認められ砂礫層の遺構面となる。砂礫層の高さは標高0.5～0.2mでそれより下層には遺構や遺物は確認されない。

### X 区

X区は、調査地の南側にあたる南北50m、東西190mの調査区であるが、東部、中央部、西部において遺構面の様相がやや異なる。東部中央、東辺部では以前に建っていた市場関係の建物基礎部分を免れており、室町時代後期～江戸時代後期までの堆積層が比較的良好な状態で遺存していた。東部のそれ以外の部分では江戸時代初期～室町時代後期の遺構面が確認された。

中央部については、旧地形がやや高くなっていたようで、地表からの削平が最終遺構面より下の砂礫層まで達しており、井戸や土坑等深い遺構のみが確認された。

また西部については、第1遺構面の砂礫層の下に数層の砂層の堆積が認められ1面ないし2面の遺構面が存在する。14～16世紀の護岸施設をはじめ土坑や溝、落ち込みなどが確認された。

### 町屋遺構

町屋は、基本的に街路に取り付くように短冊形に細長く屋地（敷地）割りをして建物等を配する。この屋地（敷地）割りは、時期によって一部で分割や統合が認められるもの、各時期を通じてほとんど同じ位置、方向を保ちながら踏襲されている。

大きく江戸時代中期～後期、江戸時代中期、江戸時代初期、織豊期の4時期の町屋遺構が確認された。他にも、小範囲の建替えなどに伴う生活面が多く存在すると考えられる。主な遺構としては、町屋建物および町屋関連遺構である井戸、石組遺構、埋甃遺構などが検出された。

### 町屋建物

東西方向の街路および南北方向の街路に接して20棟前後が確認された。さらに敷地脇に路地（通路）を設け敷地の奥に建てられた町屋建物も数棟確認された。

とくに第3遺構面の町屋建物は、焼土や炭化材が堆積し火災による焼失の跡を明瞭に留める。規模は、間口が5.5～7m、奥行が7～10mを測る。また建物の構造は、片側に土間があり、もう一方に床をもつ部屋を配している。土間部分には砂利や礫を敷いた流しやカマドが造られる。部屋は束石（礎石）の配列から2ないし3分割されていたと考えられる。また江戸時代前期以前の建物については、床敷きの部分に粘土で囲ったイロリを設ける。

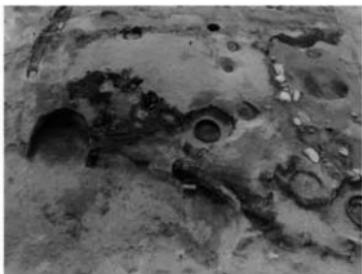


fig.118 Y区 町屋建物 SB 3 Y031



fig.119 Y区 町屋建物 SB 3 Y041



fig.120 X区・Y区 町屋建物 街路等配置図

### 瓦積み井戸・石組井戸

瓦積み井戸は専用の枠瓦を回して積み上げるものであるが、戦災の瓦礫や煉瓦、コンクリート片の混じるものが多くみられ、比較的新しい時期のものが多く含まれる。

石組井戸は、上部が石積みで下部に桶や木組みの井戸枠をもつ。石材は、切石を用いたもの、自然石を用いたもの、転用石材を用いたものなどがあり、中には五輪塔の火輪の底部の

平坦面を内側に利用し積み上げた例もある。

#### 石組遺構

1～2m前後の方形または長方形の平面形をもち、深さ50cm程の石組遺構である。底部は、礫敷きのものと素掘りのものがみられる。建物の内部および敷地内の建物に隣接する部分にみられる遺構で、町屋に伴う貯蔵施設と考えられる。

#### 街路遺構

調査区内で東西方向に通る街路3本と南北方向の街路2本を検出した。

東西方向の街路は、幅2.5～3mで長さ50mが1本検出され、あの2本は断片的に痕跡が確認された。

南北方向の街路は、西側の街路は幅3.7～4.2m、長さ30mで、従前の建物による掘削が深く大半が調査区の東外側の調査地外にかかるため、西側の縁のみが検出された。街路の構造は、砂や粘土、砂利などを数cm単位で積み重ねてたたき締める版築構造を採っている。

#### 下層遺構面

調査区の東部西側と西部において4面に相当する遺構面下の砂礫層において16世紀代の遺構面を確認した。

また調査区の東端部分においては、兵庫城築城期以前の遺構面の状況を確認するために第5遺構面の下層についてトレンチを設定して調査を実施したが、明確な遺構は発見されなかった。

しかし、西部では、砂層を基盤とする遺構面を1～2面確認した。

#### 護岸施設

調査区の南西隅において検出された護岸施設は、南北方向に延び、西側に石積による面をもつ。長さ6m以上、深さ80cmを測り、石積みの掘形には礫による裏込めが施されている。築石には、拳～人頭大の自然石に混じって五輪塔の転用材もみられる。一部に杭や板材による補修がみられる。西側には、粘土や砂の厚い堆積がみられ14～16世紀前半頃の遺物が出土した。

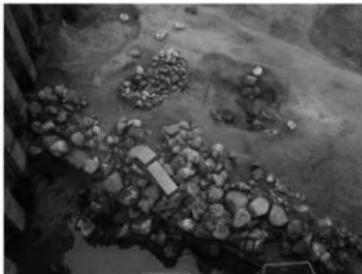
このほか、下層遺構面には、土師器皿を多量に投棄した土坑や曲物を使用した井戸、杭や板材によって囲われた水溜状の遺構などがある。

#### Y区

調査地東側の幅（東西）60m、長さ（南北）150mの調査区で、町屋と共に伴う遺構、街路遺構などが検出された。

Y区は、北辺および東辺沿の4～8m程の部分が旧建物による損壊を免れており遺構面が良く残っている。

また、中央部でも幅8mほどで、南北方向に細長く比較的の遺構面が残る部分がある。一方調査区の西側については、旧建物の基礎が格子状に最終面以下の深さに及ぶため、その合間にいて数m角の島状に遺構面が残る状態である。



### 町屋遺構

元禄9年『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』に描かれた兵庫城の堀に沿って西に大きく曲がる街路や城の正面出入り口を通る街路（大手道）などに接して40棟前後の町屋が確認された。X区と同様に大きく江戸時代中期～後期、江戸時代中期、江戸時代初期、織豊期の4時期の町屋遺構が検出された。主な遺構は、建物をはじめ倉庫（蔵）、井戸、石組遺構、埋桶遺構、埋甕遺構、胞衣壺と考えられる蛸壺を埋納したピットなどが検出された。また鍛冶炉を設けた町屋建物も確認された。この他、遺構面には、ごみ穴として利用された埋桶に混じって貝殻の集積されたピットが散見された。また調査区北端中央の落ち込みには大量のトリ貝の殻が投棄された状態が確認された。

### 町屋建物

町屋建物は、敷地幅いっぱいに建てられた礎石建物で土壁の痕跡が認められる。礎石には、自然石のほか五輪塔・宝篋印塔・石臼などの転用がみられる。

建物の構造は、間口が狭く奥行が長い細長いもので、内部は片側に土間があり、もう一方に床をもつ部屋を配する。土間は、幅0.6～2.5mほどで粘土や砂を薄く敲き締めて造られて、通常は、間口より裏まで貫通している。壁や部屋との境にカマドや砾、砂利を敷いた流しなどが設けられる。

部屋の部分は、砂による整地がなされて、東石やその抜き痕がみられる。江戸時代初頭以前のものについては、床敷き部分にイロリを設けるようになる。

なお、この調査区においては街路との取り付きの関係から町屋建物は、ほとんどが東西棟となる。しかし、旧市場建物の基礎による搅乱が大きく南北方向にあることから、検出された町屋建物の奥行きについては確認できないことが多かった。

イロリは、50～80cmほどの正方形で、地面を掘り込んで周囲を粘土で囲って造られている。芯に瓦や石を塗り込めた粘土で仕切るものもある。

また、イロリとは別に一辺が30cmほどの小型の炉をもつものがみられる。

### 街路遺構

4本の街路遺構を検出した。とくに街路1は、上記の絵図には、兵庫陣屋の正面出入り口に続く道として描かれている。幅9mほどある広いもので、断面はX区の街路と同様に砂や粘土、砂利などを数cm単位で積み重ねて敲き締められている。この街路に取り付く町屋建物から兵庫城築城期から連絡と続くことが確認された。

また、街路2についても、北部で兵庫城の堀と並行して北西方向に緩くカーブしていくことから、築城に伴い造られた街路であると考えられる。

### 井戸

井戸は、新しい時期ほど多く造られている。検出されたものは、ほとんどが江戸時代初期までのものと考えられる。構造は、上部は石組で下部は木桶などを転用して使用する。五輪塔などの石材を転用した井戸もある。

### 埋桶遺構

埋桶遺構は、径90～120cmの掘形に径60～90cm木桶を埋め込んだ遺構である。同様の遺構が切り合って存在することから次々に造り替えが行われたようである。

### 石組遺構

石組遺構は、通常1m前後の方形や長方形の掘形の内側に数10cmの石積みを施した遺構



fig.122 Y区 第3遺構面全景（北から）

で、底部は素掘りのままである。

類似する遺構として瓦積みや板貼りによるものもみられる。また、幅1.8m、長さ10mを超える長大な石組遺構も検出されている。

#### 大型石組遺構

調査区の北東部においては、江戸時代初頭と思われる、南北7m、東西短辺2.7m・長辺4.7mで矩形の大型石組遺構が検出されている。

底部には、滯水による粘土層の堆積がみられ、木製品が出土した。木製品には下駄や曲物、箸などがあり、長さ2.8mの大型の転用材も出土している。

石組には複数回の積み替えや崩落が見られるが、平面プランは概ね同時期の街割に規制されていたようである。

#### 下層遺構面

調査区の中央部分において、築城期およびそれ以前の遺構面の状況を確認するために第4遺構面の下層についてトレントを設定して調査を実施した。

第5面に対応すると考えられる街路遺構および町屋遺構を確認した。町屋の屋地割りや建物の方向は上面で確認されたものと揃うが、街路の位置については、東に5m程ずれて検出されている。



fig.123 Y区 大型石組遺構（北から）

## Z 区

Z区は、南北130m、東西100mの三角形をした調査区で、兵庫城の城郭部分にあたる。ただし、明和6（1769）年の幕府による上知以降には堀が埋め立てられて、この部分に町屋が築かれているため建物や井戸、石組造構などが検出された。

このうち井戸については、町屋に伴うものと、城郭内に伴うと考えられるものとがある。また、堀の一部は、後世まで水路として利用されている。

また、外堀の土橋（後述）に付随するように堀内に造成された区画が確認された。これは、先記の絵図に描かれている「時鐘（ときのかね）」の敷地と考えられる。

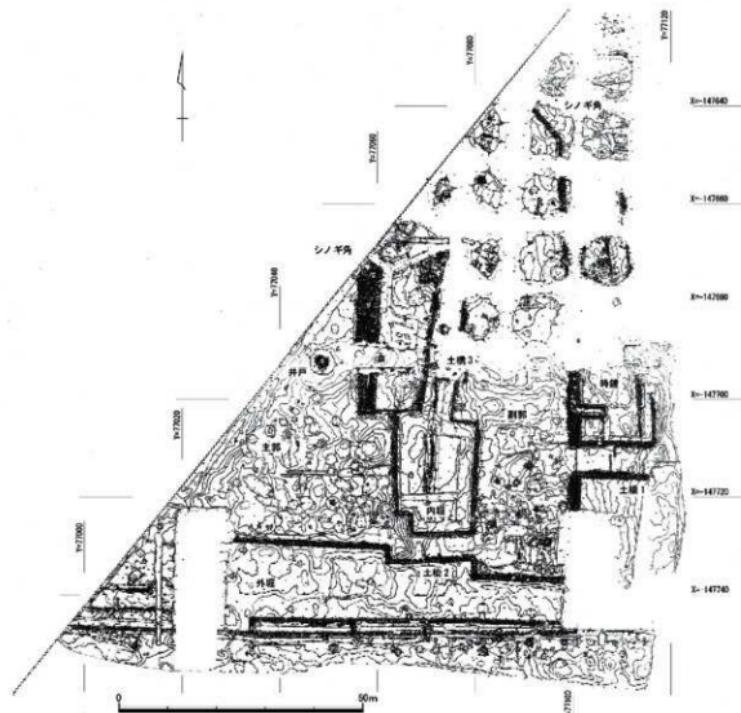


fig.124 Z 区 城郭部分平面図

### 町屋遺構

堀が埋め立てられた盛土の上からは、江戸時代後期の町屋遺構が検出された。町屋建物をはじめ井戸、石組遺構、水路などがある。

### 町屋建物

旧市場建物の削平により、建物の規模がわかるものは検出されなかった。所々に、建物境界と考えられる石列や礎石様の石が検出されている。

### 井戸

堀の埋め立て後の町屋に伴う井戸が多く見つかっている。残りの良いものでは、上部を石積みし、下部には木桶の転用したものが井戸枠として使用されている。下部だけが残存している木桶だけの井戸枠もみられる。

検出状況から、町屋の裏にあたる水路の中に掘られたと考えられる井戸（水溜）も存在する。

### 石組遺構

方形の掘形の内側に石積みを施した遺構である。主にかけて城内の副郭であった位置で数基を確認している。おおよそ一辺1.5m程度、深さ60cm程度を測る。

### 水路遺構

江戸後期に作成された水帳絵図に「悪水抜溝」（あくすいぬきみぞ）として記されている水路である。同時期の絵図を照合すると当初二間（約3.6m）幅として造られたようであるが、時代を経るにしたがって幅が狭められていくようである。護岸は石積みや木杭と



fig.125 兵庫城全景（南東から）

土留め板によるものがある。以下の通り、大きく3~4時期の造り替えが認められる。

#### (最終段階)

幅約40cm、深さ30cmほどで道路側溝ほどの形状になっている。底部に漆喰を貼るもので一部コンクリートによる補修などもみられる。戦災の瓦礫が詰まっている箇所もみられ、比較的新しい時期まで使用されていたとみられる。

南北方向の水路は、外堀に設けられた土橋を開削し流されている。

#### (新段階)

幅1.8~2.2m、深さ60~100cmの水路である。東外堀城外側の中央部にある土橋1の北側では、鍵形に屈曲する。護岸には矢穴をもつ切石が2から3段積まれている他、船材を転用した土留めを施した箇所も確認された。石積みの底部には、丸太材のほかに建築材や船材を転用した胴木が敷かれている。崩壊を防ぐための杭が石積み前面に打たれており、杭には直径10~15cm程度の丸太杭や幅10cm程度の板材の先をとがらしただけのものや未加工の棒状のものなどさまざまなものが使用されている。

船材を利用した土留は、長さ約5m、厚さ15cmの大きな板材を立て、前方に7本の大きな丸太材を打ち込み固定したものである。

#### (旧段階)

幅3~4m程度、深さ1m前後の水路で、「明和の上知」により構築された当初の段階のものと考えている。土留めの工法は統一されておらず、石垣や板材により護岸をしている。石垣は拳大から人頭大の自然石のほかに、一石五輪塔を使用して築く場所もある。いずれの場合にも崩壊を防ぐために杭をその前面に打っている。

板留めに使用されている横板は、ところどころに舟釘が残るものも見られ、船材を転用していることがわかる。杭は直径10cm前後で先端を尖らせた丸太材、建築部材の転用とみられる角材などである。

#### 時鐘

東外堀土橋1の北側に構築されており、先記元禄時代の絵図にもその記載がみられる。築城時の石垣を埋め、最大で南北8m、東西7mの区画を作り出している。上面では礎石など建物の痕跡は確認されなかった。

北辺は長さ6m、高さ1m程の石垣を築いている。石垣は、直径40cm弱と30cm弱の表面が未加工の丸太材2本並べて設置し胴木とし、その上に50cm程度の自然石を2段に積んで構築している。造り替えがなされていたようで、この石垣の南側1mの場所で、並行して同程度の石材を使用した石垣を検出している。この段階での大きさは、約6m四方を測る。

#### 城郭

外堀と内堀の二重の堀とこれに区画された副郭および主郭と考えられる兵庫城の郭を確認した。これは、兵庫城を北東から南西に区切った南東側にあたる部分と考えられる。

#### 外堀

外堀は、城の南辺および東辺、さらに北東のシノギ角をへて北東辺の一部が確認された。南辺は最大幅18.5mで長さ115m、城内側の主郭と副郭を繋ぐ土橋状の通路の取り付き部分2か所で出角をもつ。東辺は最大幅15mで長さ100mを測る。また北東辺は規模不明で

あるが長さ約20m分を確認した。

堀は、築城期以前の遺構面および自然堀堆積層を掘削しており、深さは残りの良い部分で1.2mである。底部は、ほぼ平坦であるが城内と城外の石垣の基底部に比高差がある場合は両側を繋ぐ緩い平らな斜面となる。城内・外ともに護岸のため石垣が築かれている。城外の石垣は広範囲にわたって石垣の造り替えが認められる。

また、堀内の埋土の堆積状況から城内側の石垣は一度大きく崩されて土手（土壘）状に改変されたと考えられる。さらに、この後江戸時代中～後期の遺物を多量に含む粘土層が堆積していることから改変後も堀は存在したことが確認される。

#### 石垣

石垣列は、自然石と石造物の転用石を積んで隙間に間詰め石を施した野面積みである。城内側では、3～6段で残高1.2m、城外側では、3～4段で残高1.1m積み上げる。調査で確認された石垣の総延長は計測可能部分で南辺の城内側82m、城外側109m、東辺の土橋1より南側で城内側約22m(前回調査分含む)、城外側30m、土橋1より北側の城外側62m(搅乱により損壊している場所も含む)である。

なお、土橋1より北側の城外側と北東のシノギ角より北西部分については、それぞれ13m、8m分を確認したが削平によって延長は不明である。

東辺の城内石垣のうち土橋1両側の部分については、二重の石垣が確認された。また、南辺城外の石垣は前後二列の石垣が確認され造り替えが行われたと考えられる。

なお、城外側で土橋1より北側の石垣は、堀の改修および旧市場建物の建設により石垣が失われているため、詳細は不明である。

#### 内堀

内堀は主郭の東辺とシノギ角をへて北東辺が確認された。内堀も外堀と同様に底部はほぼ平坦である。内堀は大きく2回作り替えが行われているようである。

その形状は東側で堀の中間地点で鍵の手状に主郭側に折れ曲がり、そこから主郭側は前後二重に石垣を構築し、シノギ角部分も同様にする。石垣は主郭側で長さ約65m、高さ1.2m、副郭側で長さ約40m、高さ1mを確認している。

堀底には、滯水性の堆積がわずかに認められ、その直上に石垣の石材と考えられる60cm程度の巨礫や栗石と考えられる拳大の礫が多量に認められた。築城後の主郭部分拡張に伴い、石垣を壊しその石材ごと埋めたものと考えられる。

#### 石垣

石垣列は自然石と石造物の転用石を積んで、隙間に間詰め石を施した野面積みである。新しい石垣は主に主郭側に残存しており、主に60～70cmの自然石を配しその間に拳大ほどの大石や一石五輪塔などの石造物で充填している。

土橋3の南側では、矢穴が残る石材も使用されている。石垣の勾配についても垂直に近い。副郭側は石垣がほとんど残存しておらず、わずかに裏込や杭列が確認されているのみである。

古い石垣は副郭側ではほぼ基底の1段を検出しているのみで、五輪塔や層塔など石造物を転用しているものがみられる。裏込めにも五輪塔空風輪などの転用石材を使用している。主郭側の北半分では、東側外堀の土橋付近と同様に石垣を二重に築いている。

前列の石垣は直径20cm程度の柱材を転用した胴木の上に、最大長60~80cm程度の自然石を最大3段積み上げている。ただし、一部胴木を使用せず、石垣を築くところもある。後列の石垣は前列より2~2.5m西側で、基底部には胴木を配し、その上に3~4段石を積み上げている。掘形に径20cm程度で他のグリ石よりも大きめの石が張り付くように検出されている。

#### 土橋

堀の中に設けられた橋（通路状施設）は、外堀に1カ所（土橋1）、内堀に2カ所（土橋2・3）の3カ所が確認された。

#### 土橋1

城の東面、南北方向の外堀に造られた橋で、城下からの東西街路（大手道）の延長上に位置する。先記元禄時代の絵図には、城（陣屋）への正面の出入り口として描かれている部分にあたる。

橋は、幅7m、長さ16m、高さ1mの規模で、外堀の掘削時に基盤土を掘り残したものである。両側面に護岸として2~4段の石垣を築いている。側面の石垣には一部補修による積み直しと考えられる痕がみられる。

#### 土橋2

主郭と副郭を繋ぐため外堀域内側の南辺に沿って設けられた橋で長さ18m、幅6mを測る。内堀を堰き止めかたちとなっている。両側面とも護岸のため石垣を築く。ただ後世に外堀と内堀を合流させるために開削され、最下段を残すのみである。また、主郭側では、北側に鍵の手状に屈曲し、枠形を呈する。

#### 土橋3

主郭の東辺と副郭の西辺を繋ぐよう設けられた橋で、幅4.2mを測る。主郭側の石垣列に取り付くように造られている。副郭側は、削平により確認されなかった。内堀内堆積層の直上に構築されており、築城後何年かの時間差をもって構築されたと考えられる。

#### 副郭

主郭の東側と北側の外に配され、築城期は幅約20m、改修後は幅約30mの郭である。内堀によって区切られる南側の部分に礎石列や井戸、カマドなどがみられる。北側には一部礎石と考えられる石列があるが、時期については検討を要する。それ以外に石組みや土坑を多く検出しているが、大半は江戸時代後半で「明和の上知」以後の町屋段階の所産と考えられる。

#### 主郭

北東部にシノギ角を設ける。後世には東側の内堀を埋め拡張している。

内部については、削平によってほとんど遺構は確認されなかった。ただ、石組井戸については、最終の埋没時期は江戸時代後期であるものの、井戸枠に転用石材を使用し規模も他の井戸より大きいことから築城期頃まで遡る可能性がある。

#### 兵庫城築城以前の遺構

明確な兵庫城築城以前の遺構として、外堀城外側の石垣によって切られた井戸、内堀城内側の水路、主郭南西部の土器器皿集積遺構（土器溜り）などがある。

#### 井戸

井戸は南外堀城外側東部の前列石垣によって切られもので、上部は自然石を積み、下部



fig.126 Z区 南外堀（城外側）石垣転用材



fig.127 Z区 主郭内五輪塔組井戸

は桶を転用している。

#### 水路

水路は、南北方向に流れしており調査区北部から中央部において確認された。西岸の護岸と思われる土留めの横板が施された杭列がみられるが対岸は不明である。内堀城内側の北では石垣構築の以前（堀底）で検出されるが、堀の方向より僅かに西に振れるため、堀中中央部付近で石垣列によって切られる。砂や砂利が1mほど堆積する。16世紀代とみられる遺物が僅かに出土した。

#### 土器溜り

主郭の南部においては、隣接するX区西部と同様に土師器皿を大量に含む土器溜りが数か所検出された。それぞれ時期差は認められるが概ね15～16世紀にかけての遺構と考えられる。

#### 3.まとめ

今回の調査は、兵庫津遺跡の中心ともいえる兵庫城とその周辺の町屋群にあたる部分を広範囲に発掘し、数多くの成果を得ることができた。

また個々の町屋建物についても、火災で焼け落ちた状態のまま良好に残されているものが多く、当時の建物の構造を知る上で貴重な資料を得ることができた。町屋などの遺構内から出土する遺物からは、茶道具や中国製磁器なども多く出土しており、当時の町屋で暮らす人々の生活の質の高さが窺える。

兵庫城築城期の城郭構造（縄張り）については、今までの文献資料などからは、窺うことのできなかったもので、地域の歴史を明らかにするばかりでなく織豊期の城郭研究史においても貴重な史料となるものと考えられる。

なお、この調査の詳細は平成29年3月刊行の発掘調査報告書を参照いただきたい。

## 21. 兵庫津遺跡 第63次調査

### 1. はじめに

兵庫津遺跡はJR 兵庫駅の南側に広がる、港湾機能と都市機能を兼備した大規模な遺跡である。兵庫の港が『大輪田泊』という名称で文献上に現れるのは奈良時代・平安時代まで遡るが、この段階の遺構・遺物の発見は少なく、実態は充分に解明されていない。中世以降、戦乱や災害で盛衰を繰り返すが、江戸時代には万余の人口を抱える港湾都市を確立し、港町神戸の発展の基を築いた遺跡として、貴重な地域発展の歴史資料を提示している。

当該地付近は繩文期以降、江戸時代の初期にかけて、兵庫城を中心に町並みが再整備されてゆく過程で、町の北辺に防護陣地の意味合いを持たせて移転させられた寺院群またはその外側を開拓する土塁の一角にあたると想定された。

### 2. 調査の概要

当地に社屋の増築工事が計画され、建物基礎によって掘削され遺跡に影響を及ぼす部分の発掘調査を実施した。調査区を南北に分け、北側を1区、南側を2区とした。

#### 基本層序

当該地は沖積地末端付近に属し、現地表面の標高は2.8m前後である。盛土・整地土以下の層位はおおむね北から南に下がる状態で堆積している。盛土下は近代の灰褐色粘性砂質土、近世末～近代の整地土である暗黄褐色細砂・暗灰褐色砂質土、近世の耕作土である灰褐色砂質土、そして遺構面である黄灰色細砂～中砂が堆積する。その下層は中世頃の洪水層である暗灰褐色・黄灰色中砂～粗砂の順となる。

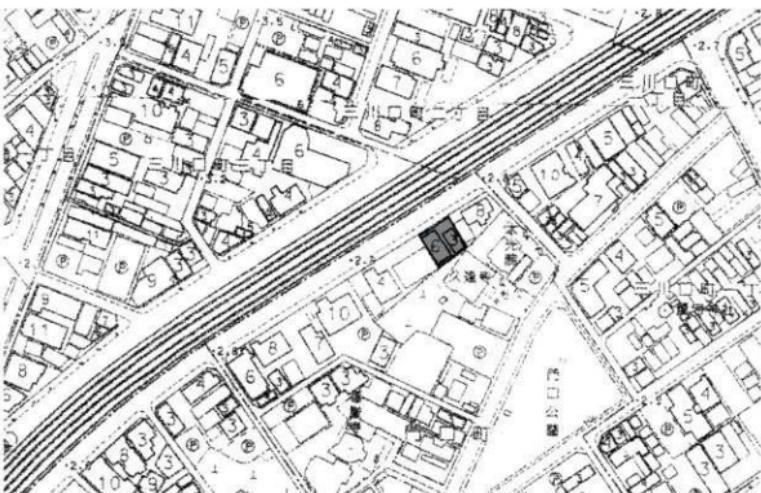


fig.128 調査位置図 1:2,500

## 耕作溝

1・2区共に後世の搅乱により遺構面がかなり損壊されていた。検出面は2区北端で段を生じ、1区では40~50cm高くなっている。これは傾斜した地形を水平にして耕作地として利用するため、高い部分は切り崩した結果生じた段差である。段差の下段では排水のために設けられた浅い溝が段と並行に設けられている。この面では耕作に伴う浅い溝を15条確認した。これらは1区では南北方向に、2区では東西方向に掘削されていた。

### SD01

2区南端で東西方向に流れる溝が検出された。南側の溝肩は調査範囲外にあるため正確な幅は不明であるが、幅約2m以上、深さ80cmを測る。北側の肩には20~30cm程度の川原石を積んで護岸していたようであるが、溝の上層を覆う洪水砂をもたらした出水によって崩落しており、積石の状態を残しているのはごくわずかである。

堆積土下層は灰色系の粘性砂質土、上層は黄灰色細砂であり、開削された当初は流れの緩やかな状態が続き、ある段階で洪水等の流れの激しい状態によって埋没したものと推定される。下層からは江戸時代末頃の陶磁器、金属製品が出土した。

### 3.まとめ

今回の調査では、南北2段に分かれた耕作地と耕作に伴う浅い溝と、調査区南端で川原石によって護岸された溝1条を確認した。

元禄9(1696)年に描かれたとされる『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』では当該地付近は、寺の境内地またはその外側に拡がる耕作地との境界付近にあたり、それに従うならば、SD01溝が南側に隣接する寺院境内地と耕作地を区画する溝と考えることも可能である。ただしこの溝から出土する遺物は幕末以降のものであり、元禄期まで遡るものはないため、元禄期以降に改修、あるいは位置を変更して掘削し直したものと考える方が妥当と判断される。

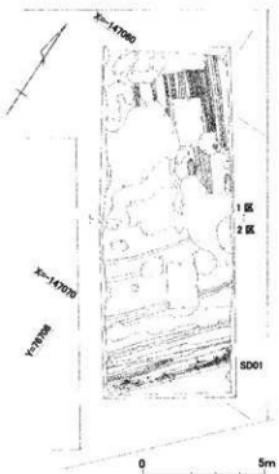


fig.129 遺構平面図



fig.130 1区 遺構面全景（南から）



fig.131 2区 遺構面全景（北から）

## 22. 兵庫津遺跡 第64次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅の建物基礎により遺跡に影響を及ぼす範囲について実施した。調査は現況面から遺構面の直上までバックホーで掘削を行い、遺構掘削は人力によって行った。

#### 基本層序

当地は沖積地末端付近に形成された浜堤部分に属し、現況面の標高は2.6～2.8m前後である。

從前建物により遺構面が相当な搅乱を受けていたが、層序は、盛土・整地土以下は近世の暗褐色砂質土、中近世の暗灰褐色砂質土、中世頃の淡褐色砂質土、古墳時代初頭の遺物包含層である黒灰色砂質土の順に堆積する。標高1.8～1.9m程の黄灰色細砂～中砂上面が遺構面となる。

#### 検出遺構

##### ST01

試掘調査時に確認された古墳時代初頭頃の土器棺墓である。四国産とみられる壺を横に寝かせた状態で埋置されていた。口縁部は土器片等で閉塞されていなかったが、その素材が木質・布等であった可能性はある。内部に砂は流入しておらず、空洞になっていた。

##### ST02

ST01の西側で検出された古墳時代初頭頃の土器棺墓である。球状の胴部を持つ壺を半裁し、その一部を南側に重ね合わせて棺体とし、北側は土器片を立てている。周囲が砂地のため掘形は判らなかったが、上半分の土器片が棺の内部に落ち込んでいないことから、半裁の土器を棺身として用いたと思われる。

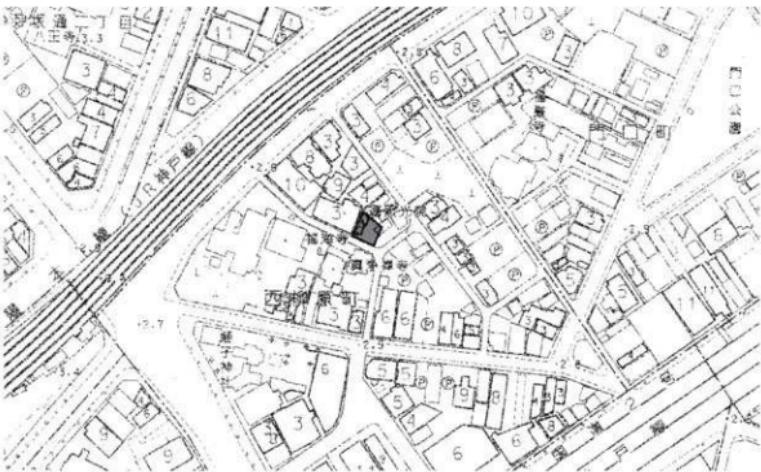


fig.132 調査地位置図 1:2,500

## 溝

ST01・ST02に近接する状態で、東側と南側で埋土が黒灰色砂質土の溝2条を検出した。

東側の溝は平面形がゆるやかなS字を描き、東側へ落ち込んでいる。また、溝が埋没してゆく過程で転落した状態の古墳時代初頭頃の甕が一個体分出土している。

南側の溝は近世の遺構と旧建物による搅乱のため、溝が土器棺の周囲を全周しているか確認できていない。わずかに遺存した箇所で、破損した複数の土器片が狭い範囲で直線的に並んで出土した。なお、東側と南側の溝は繋がらず、陸橋状の高まりがその間に存在する可能性が考えられる。

## SP01

東側の溝の斜面からは長径40cm、短径25cm、深さ5cmの楕円形のピットを検出した。

埋土の黄白色粘質土からは甕の底部が出土している。

## SX01

調査区西端で深く掘り込まれた溝または土坑状の遺構を検出した。遺構が調査区外に広がるため、全容は判らない。埋土である茶褐色砂質土からは室町時代後期～近世初頭の土器、陶磁器、瓦が出土している。

## 浜堤堆積砂内の弥生土器

從前建物の残存している基礎底で弥生時代中期の壺が出土した。この壺は浜堤の形成過程で埋没したものと判断される。

## 2.まとめ

今回の調査では、古墳時代初頭の土器棺2基、それに接する2条の溝を確認した。溝の西側と北側は後世に搅乱を受けているため、溝が四周に周っているかは明らかにできなかった。土器棺と溝との状況から周溝墓の可能性が考えられる。搅乱等により全体規模は判らないが、一辺ないし直径が4m以上であることが判る。

以上のとおり、浜堤上に造られた周溝墓の可能性をもつ遺構の確認したことにより、当該期の浜堤利用の在り方を窺う資料を得ることができた。また、浜堤の堆積砂に弥生時代中期の土器を含んでいることから、少なくともこの時期まで浜堤の堆積時期が遡ると推定できる。

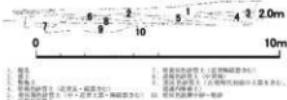


fig.133 調査区東壁断面図

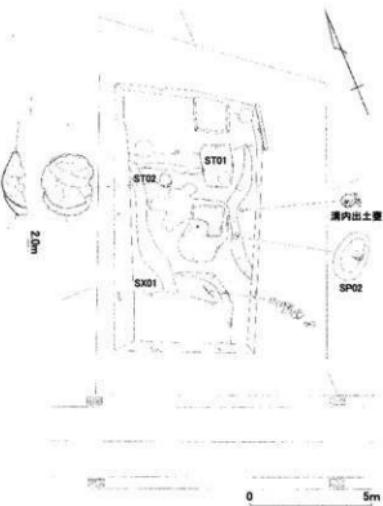


fig.134 造構平面図・土器棺等出土状況図



fig.135 調査区全景 (北西から)

## 23. 大開遺跡 第15次調査

### 1. はじめに

大開遺跡は、兵庫区大開通、水木通、塚本通に位置し、旧湊川右岸の沖積地に立地する。昭和63年に、兵庫大開小学校の新校舎建設とともに発見された遺跡で、これまでに複数地点での調査がおこなわれている。縄文時代後期から室町時代に至る多くの遺構や遺物が確認されており、特に弥生時代前期前半の環濠集落は、初現期の環濠集落として周知されている。



fig.136 調査地位位置図 1:2,500

### 2. 調査の概要

調査は、兵庫大開小学校内におけるエレベーター棟増築に伴うものである。造成土をバッカホーで掘削し、遺構面検出、遺構掘削は人力で行った。今回の調査地においても第1次調査と同様の遺構や遺物が広がることが想定され、調査の結果、遺構面は5面検出した。なお、調査区西側4分の1程は、第1次調査と重複している。

#### 基本層序

調査地の現地表面は、標高約4.5mである。現地表面から80cmほどの造成土を確認した。造成土の下層では、黄灰白色砂質土の床土と考えられる旧耕作土を検出した。

その下層は、中世の遺物を含む灰褐色砂質土で、この上面が第1遺構面である。標高約3.6mで、近世後半の耕作土面と考える。

その下層は、中世の遺物を含む暗灰褐色砂質土である。標高約3.5mで、この土層上面が第2遺構面である。中世の耕作土面と考える。

第3遺構面は標高約3.4mで、中世の耕作土面と考えられ、黄褐色砂質土と暗灰黄色砂質土を基盤層とする。この層は弥生土器の小片を多く含み、弥生時代前期の遺物包含層であると考える。



fig.137 東壁土層断面図

第4遺構面は、黄灰色細砂を基盤層とし、標高約3.1mである。弥生時代前期の遺構面と考えられる。一部、調査区南東部分で、明灰黄色細砂、灰白色細砂の堆積を確認した。この層を除去した黄灰色細砂上面が第5遺構面である。弥生時代前期の土器が出土しており、第4遺構面と時期差はほとんどないものと考えられる。

#### 第1遺構面

検出した遺構は、耕作にともなう鋤溝とピット、性格不明遺構である。溝からは、近世後半の陶器や土師器が出土した。

#### 第2遺構面

検出した遺構は、耕作にともなう素掘り溝とピットである。ピットは素掘り溝と直行するように並んで検出した。柵などの区画施設が想定できる。第2遺構面からは、土師器や須恵器の小片が出土している。

#### 第3遺構面

第3遺構面では、耕作にともなう素掘り溝を検出した。底面は凹凸があり、鍬や鋤をあてた痕跡とみられるものも残っていた。溝SD306は、幅40~50cm、深さ30cmを測り、他

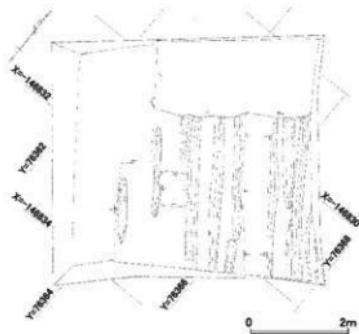


fig.138 第1遺構面平面図

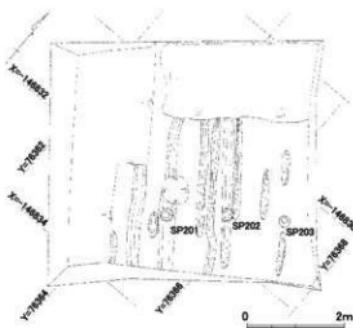


fig.139 第2遺構面平面図

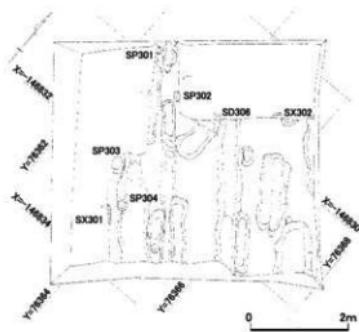


fig.140 第3遺構面平面図

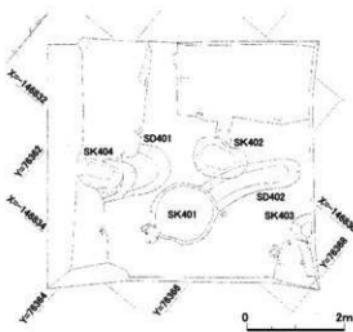


fig.141 第4遺構面平面図

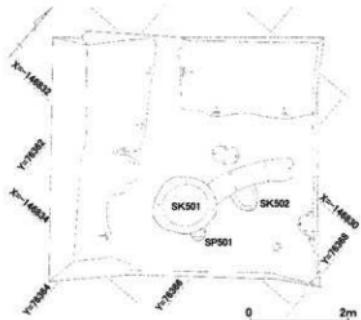


fig.142 第5遺構面平面図

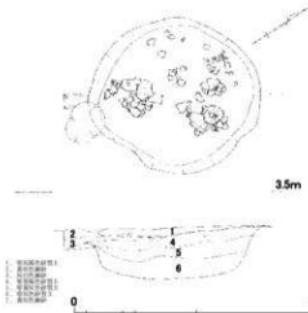


fig.143 SK401平面図・断面図

の耕作溝とは異なる様相を呈する。区画や排水などの性格が想定される。遺構からの出土遺物は、土師器や須恵器の小片である。詳細な時期決定は難しいが、第2遺構面と同様に、中世以降（鎌倉時代以降）の耕作土面と考える。

#### 第4遺構面

検出した遺構は、溝2条、ピット1基、土坑4基である。

SD401は、幅約1m、深さ20cmの浅い溝である。埋土は青灰褐色砂質土で、弥生土器の小片とサヌカイト剥片が数点出土している。SD402は、幅55cm、深さ20cmを測る溝である。土坑SK401、SK402と切り合い関係にあり、SD402が先行する。埋土は青灰褐色砂質土で、弥生土器の小片が数点出土している。

SD401は第1次調査の東西方向の溝SD406に続く遺構と考えられるが、やや検出範囲が異なるものであった。しかし、SD401の南東肩付近には、埋土と類似した土層が斑点状に広がることを確認しており、これらの範囲も含め、第1次調査区SD406が今回の調査区のSD401に続くものと考える。

SK401は、径130~140cm、深さ15cmほどの浅い土坑である。埋土は、炭化物を含む暗灰褐色砂質土で、底から多くの弥生土器とともにサヌカイト製の石鏟や剥片が出土した。破片が多く、完形になる土器はないが、口縁端部に刻目を施すものが出土しており、弥生時代前期の所産であると考える。当初は、類似した炭化物を含む土層が続いたため、深さ40cmまで掘り下がったが、自然堆積層と考えられる灰白色細砂が間に堆積していることから、下層は別遺構（SK501）であると確認した。

SK402は長径1.2m、短径70cmの梢円形の土坑で、深さ10~20cmである。遺物は出土していない。

SK403は調査区東端で検出し、調査区外に広がると考えられる。南北幅50cm、深さ12cmを測り、埋土は炭化物を含む暗青灰褐色砂質土である。弥生土器の小片が数点出土している。

SK404は、SD401の下層で検出した。2段落ちになっており、深さ50cmを測る。西側に隣接する第1次調査区SK450の一部ではないかと考えられる。弥生土器の小片とサヌカイト剥片が出土している。

第4遺構面は、出土遺物から弥生時代前期の遺構面と考えられる。これは、第1次調査区の第3面に相当し、弥生時代前期の環濠集落内に位置付けることができる。

#### 第5遺構面

検出した遺構はピット1基、土坑2基である。

ピットSP501は、径30cm、深さ20cmである。土坑SK501は、短径1.2m、長径1.4mの楕円形で、深さ35cmを測る。埋土には炭化物を含み、弥生時代前期の土器が少量出土した。SK502は短辺55cm、長辺50cm以上を測る。深さは約10cmと浅く、小規模な落ち込みであった。遺物は出土していない。第5遺構面は、出土遺物から第4遺構面とあまり時期差はない、弥生時代前期の遺構面と考えられる。

#### 下層確認

第1次調査では、標高約2.7m付近で縄文時代晚期後半の遺構面が検出されているため、調査区西側において下層の断割り確認をおこなった。現地表からの深さ1.9m付近で細砂と粗砂が互層に堆積する河道とみられる自然堆積層を検出した。第1次調査では、ほぼ全面で縄文時代晚期の河道が検出されており、今回の調査区もこれらの河道中に位置するものと考えられる。堆積層中から縄文時代晚期後半の土器が出土している。

#### 3.まとめ

今回の調査では、5面の遺構面と下層確認において河道の堆積を確認した。

第1遺構面は近世後半の耕作土面、第2・3遺構面は中世以降の耕作土面、第4・5遺構面は弥生時代前期の遺構面、下層確認では縄文時代晚期後半の河道を検出した。

第1～3遺構面で検出した素掘り溝の方向は一定して現在の地割に沿っており、地形に合わせた土地利用が古くからされていたことがわかる。

第4・5遺構面では、弥生時代前期の遺構を検出し、第1次調査で確認されている環濠集落の一部を確認することができた。第4遺構面と第5遺構面との間には、ラミナを観察できる細砂が堆積している。推定の域を脱しないが、第5遺構面が初期環濠の段階、第4遺構面が拡張環濠の段階とみることもできるかもしれない。

下層確認においては、縄文時代晚期後半の河道を確認し、縄文時代晚期の様相を知ることができる資料を得られた。

このように、今回の調査では、複数時期の遺構や遺物を確認することができた。特に、弥生時代前期の環濠集落に関連する資料を蓄積できたこと、縄文時代晚期の分布状況などが少しずつ明らかになってきたことの意義は大きい。



fig.144 第3遺構面全景（北から）



fig.145 第4遺構面全景（北から）

## 24. 上沢遺跡 第60次調査

### 1. はじめに

上沢遺跡は、昭和63年に都市計画道路房王寺線街路築造工事に伴う試掘調査によって発見された遺跡であり、これまでに59次におよぶ調査が行われている。房王寺線付近では、縄文時代晩期～弥生時代前期の流路が確認されている。山手幹線沿線では、阪神淡路大震災の復興事業に伴う調査が多く行われており、弥生時代～中世にかけて複合遺跡であることが確認されている。特筆される発見としては、奈良時代の井籠組の井戸から銅鏡が出土していることがあげられる。当遺跡の北に位置する室内遺跡では、平成9年の漆川河川改修工事に伴う兵庫県教育委員会の調査で、多くの瓦と塑像の台座が出土している。そのため、当地域においては奈良時代の寺院もしくは官衙的性格を持つ施設が存在していたことが想定される。

### 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴い、工事により遺跡に影響する範囲を対象に発掘調査を行なうこととなった。

盛土・搅乱土はバックホーによる掘削を行い、遺物包含層と遺構掘削は人力掘削を行った。

#### 基本層序

層序は、盛土及び搅乱土の下に旧耕作土があり、その下層に淡灰色砂質土が堆積する。その下は遺物包含層である灰褐色砂質シルト、遺構面を形成する黒褐色シルトの順に堆積している。さらに下層には暗茶褐色シルト層が厚く堆積し、灰茶色シルト混じり砂礫と続くが遺物を含まない。



fig.146 調査地位置図 1:2,500

## 検出遭構

検出した遭構は、耕作に伴う溝6条である。溝は、調査区のほぼ中央を南北に真っ直ぐ流れるSD102と、そのSD102に交わる東西方向のSD101、SD103～SD106である。

### SD101

調査区の北寄りで東西方向にSD102を切るように検出した耕作溝である。溝の幅は20～40cm、深さ2～10cmを測る。溝の底面は、平坦ではなく大きな回凸があり、途中で途切れる個所もある。

### SD102

SD101とSD106に切られて検出した南北方向の耕作溝である。溝の幅は30～60cm、深さ3～7cmを測る。

### SD103・SD104

調査区の南東隅でわずかな範囲で検出された東西方向の耕作溝である。この2本の溝の幅は約14cm、深さは約4cmを測る。

### SD105

調査区中央の東壁付近で検出された幅20cm、深さ6cmの東西方向の耕作溝である。

### SD106

調査区北半で検出したSD102を切る幅20cm、深さ3cmを測る耕作溝である。

## 3.まとめ

調査範囲が狭小であるため検出できた遭構も耕作溝のみであった。面を形成する黒褐色シルトは耕作土であり、遺物を含む灰褐色砂質シルトは洪水による堆積と考えられる。遭物の多くがこの灰褐色砂質シルトから出土したものであり、調査地の北方に想定される集落域からの流れ込んだ遭物と考えられる。この遭物には古墳時代から中世までの土器が含まれている。このことから、耕作溝を検出した遭構面は中世以前と考えられる。また、黒褐色シルトにもごく少量の遭物が出土しているが、時期の特定ができるような遭物は出土していない。



fig.147 調査区南半全景（北西から）

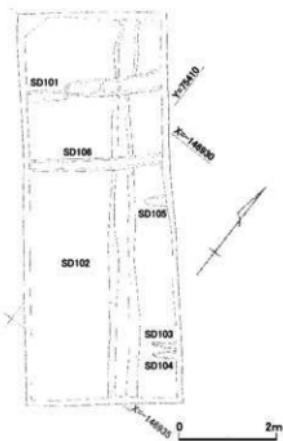


fig.148 遭構平面図

## 25. 丸沢遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

丸沢遺跡は有野川により形成された河岸段丘上に立地する中世の集落遺跡である。平成8年と11年に今回の調査地の北側で宅地造成に伴う発掘調査が実施され、中世の柱穴や溝、耕作痕などが確認されている。今回の調査で3次になる。

### 2. 調査の概要

共同住宅建設に伴い、工事により遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。

調査方法は、耕作土・旧耕作土をバックホーで掘削し、以下は人力により遺構・遺物の検出に努めた。

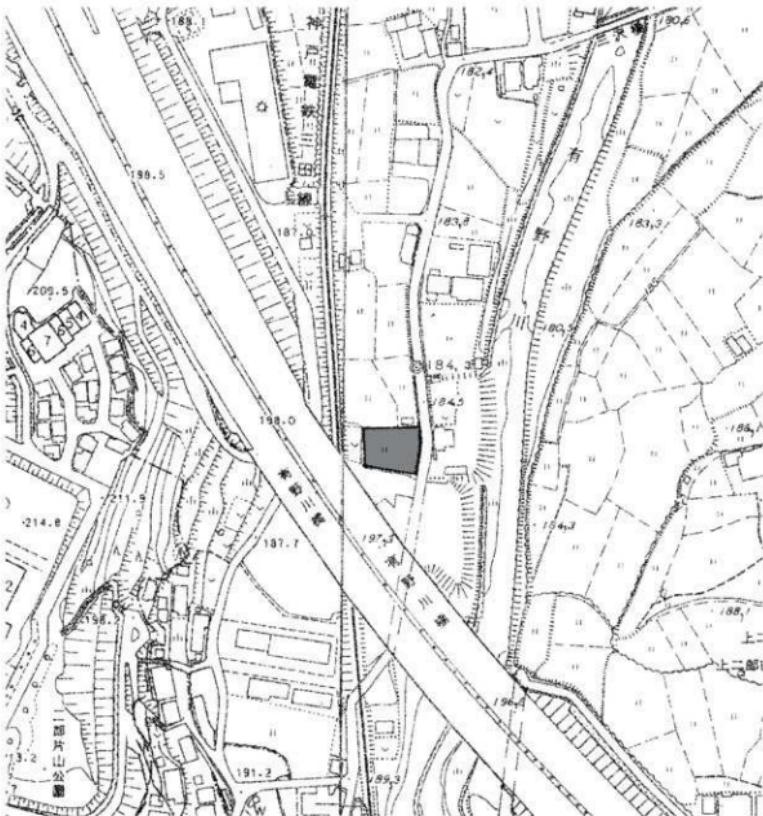


fig.149 調査位置図 1:2,500

## 基本層序

層序は、耕作土・旧耕作土が堆積し、その下で遺構面となる転石が多く含む黄灰色砂質土の地山となる。調査区中央付近から西側にかけては緩やかに下がる地形となり、旧耕作土の下に褐色粘質土が堆積し、黄灰色極細砂の地山となる。地山には拳大から径1m以上の巨大な礫が含まれ、有野川により形成された層と考えられる。

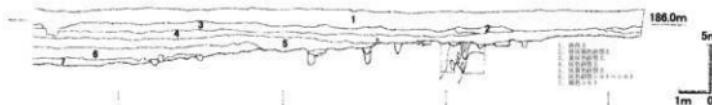


fig.150 北壁土層断面図

## 検出遺構

調査では柱穴約140基、土坑6基、溝2条を検出した。

### 柱穴

約140基の柱穴を検出した。柱穴の平面は円形のものが多いが、楕円形や隅丸方形を呈するものもある。径(辺)は20~60cm、深さは10~30cmを測る。埋土の種類が黒色系やや砂質土と灰色系粘質土の2種類に分かれる。柱穴の並びはなく、建物や柵など明確に列をなす遺構は確認できていない。

調査区の中央北側や西側への落ち込み際で、黒灰色粘性砂質土を埋土とし炭を含む柱穴を数基検出した。これらは径60cmと大きく、根石として扁平な石を埋置するなど他の柱穴と異なっていたが、建物としては復元できなかった。出土遺物は数基の柱穴からそれぞれ土師器と考えられる小片が出土したのみで、いずれの柱穴も詳細は不明である。

### SK01~SK06

土坑は調査区の東端で5基、西側で1基検出した。

SK01・SK02は長径70cm、短径50~60cm、深さ25~35cmを測り、SK03は長径90cm、短径80cm、深さ20cmを測る平面楕円形の土坑である。SK04・SK05は長径1.2m、短径70~80cm、深さ約30cmを測り平面やや歪な楕円形を呈する土坑である。

SK01~SK05の埋土はいずれも上層は灰色粘質土を基本とし、黄灰色極細砂などをブロック状に含む。下層には褐色の砂の堆積が認められる。

SK04の底部には20~40cm大の扁平な礫が3個、SK05の底部にも50cm大の扁平な礫2個が据えられていた。周囲には露呈した転石が多く、これら礫も土坑掘削時に出土し、底に敷石として使用された可能性も考えられるが、いずれの土坑からは遺物も出土しておらず、遺構の時期や用途なども不明である。



fig.151 調査区全景（西から）

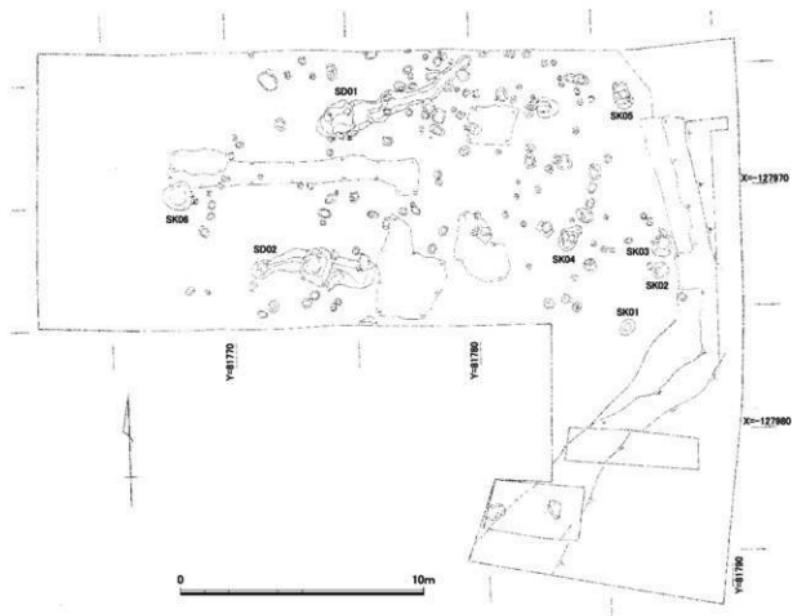


fig.152 遺構平面図

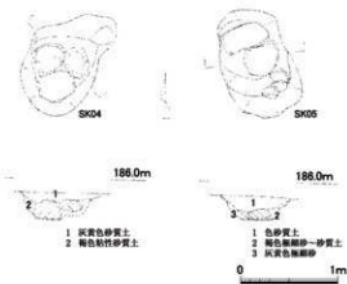


fig.153 SK04・SK05 平面図・断面図

SK06は調査区西側の湿地状地形の落ち込み際で検出した土坑である。平面は径約1.2mの歪な円形を呈し、深さ35cmを測る。埋土は黒灰色粘質土と褐色砂が互層となるが、遺物は出土していない。

#### 溝

SD01は調査区の中央北側で検出した溝で、検出長約7m、幅50~120cm、深さ10~25cmを測る。東側が浅く、西側に向かいやや深くなる。

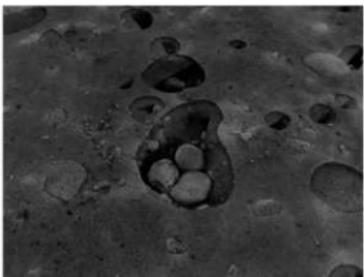


fig.154 SK04検出状況（南から）

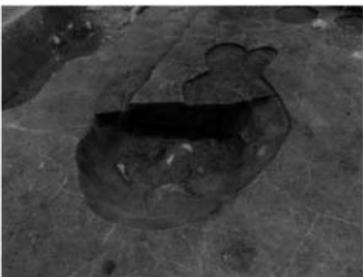


fig.155 SK06断面（西から）

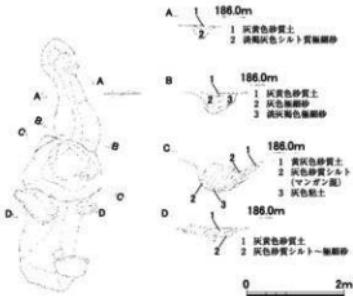


fig.156 SD02平面図・断面図



fig.157 SD02検出状況（東から）

SD02は調査区中央南側で検出した溝で、検出長5.2m、幅50~120cm、深さ15~40cmを測る。SD01と同様、西に向かい深くなるが、東側1/3では深さ70cmと一段深く、この部分に80cm角の巨大な礫が据えられている。この部分は溝と直交する長辺1.5m、短辺1.2mの長方形の輪郭がみられ、切り合いや埋土の違いは認識できないが、土坑の可能性も考えられる。この遺構からは、中世の土師器皿が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では柱穴、土坑、溝など多くの遺構を検出した。特に柱穴は多く検出だが、並ぶもののがなく建物などを復元するには至っていない。

各遺構の時期については、遺構からの遺物の出土、また遺物包含層の土器の量也非常に少なく詳細については不明である。ただし、遺構面上の出土遺物やSD02出土の土師器皿から13~14世紀に営まれた遺跡と考えられる。また柱穴の数が多いが、旧耕作土への遺物の混入もほとんどなく、当地が居住域として活発に利用されたとは考えにくい。柱穴の一部は耕作に伴う痕跡、あるいは簡易な構造物が存在していた可能性も考えられる。

調査地の南約300m付近に現在の西二郎の集落があり、南側の段丘高位への遺跡の拡がりが想像されるが、今回の調査地でもみられたように、西側が落ち込むような小さな谷状の地形が段丘面にいくつも切り込むようである。発掘調査の成果に加えて、詳細な微地形の観察などを通じて当地における集落の展開、様相が検討できるのではないかと考える。

## 26. 五番町遺跡 第13次調査

### 1. はじめに

五番町遺跡は、長田区五番町、四番町を中心に広がる遺跡である。平成2年度の市営住宅建設に伴う第1次調査から、12次にわたる発掘調査がおこなわれている。これまでの調査で縄文時代後期～中世の遺構と遺物が確認された。また、当調査地の東隣に当たる第2次調査では、平安時代から中世にいたる集落跡が確認されている。

### 2. 調査の概要

今回は寄宿舎建設に伴う発掘調査であり、工事により影響する範囲を対象として西部（1区）・北東部（2区）・南東部（3区）の3区に分割して調査を実施した。

#### 基本層序

現地表面は、およそ標高10～11.5mである。1・2区共に、従前建物の解体時と考えられる重機の掘り込みが多く見られ、全体的に搅乱を受けている状態であった。

現地表面から約20～60cmは、盛土を含む造成土及び搅乱土であり、その下層には複数の旧耕作土が存在する。第1遺構面は、南側では平安時代から室町時代の耕作土である暗褐色シルト、北側では平安時代の耕作土・黄灰褐色シルトとなるが、中央付近は後世の耕作により削平されている。その下層で、古墳時代後期の第2遺構面のベース層である乳灰色シルト質細砂となっている。

なお、調査終了後に下層断面割りを行い、1区では灰色砂が堆積していたが、2区では第2遺構面で下層の流路が検出されている。

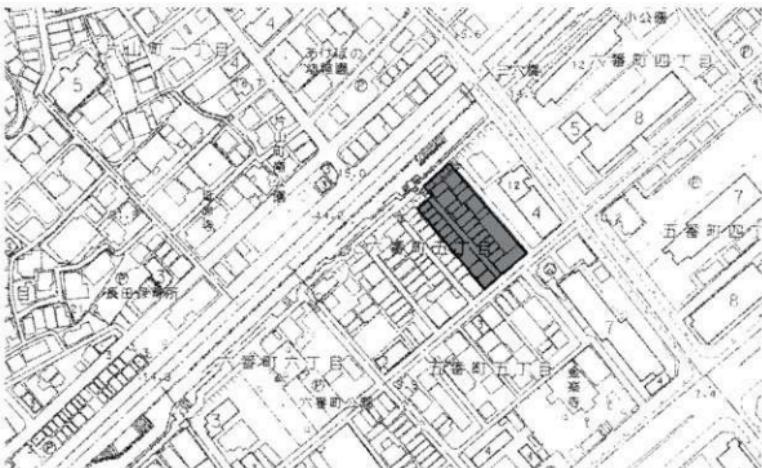


fig.158 調査位置図 1:2,500

## 第1遺構面

調査区のほぼ中央は、以前の埋設管により大きく搅乱を受けている。また、1区中央付近と2区の南側、3区は後世の耕作により段が形成され、面的に遺構面は削平されている。第1遺構面では、同一面で室町時代の耕作溝と平安時代末の幅の広い溝、奈良時代～平安時代の規則性を持った溝と、3時期の遺構を確認した。

### 耕作溝・溝

旧耕作土下で、調査区南端と北部から中央にかけて主に東西方向の耕作溝が検出された。幅10～20cm、長さ1～4m前後で、室町時代の鋤溝と考えられる。また、調査区中央付近に幅50～70cmの段を形成する耕作溝も確認した。東西方向にほぼ等間隔で4条並んでいる。

調査区北端でSD103、SD112を検出した。SD103は一部搅乱を受けているが、東西方向に延びる幅2～3mの溝である。遺構の時期は、土師器皿・須恵器甕・瓦器塊などの出土遺物から平安時代末と考えられる。SD112はSD103の北にほぼ平行して位置している。幅は1.5mでSD103同様、平安時代末の溝である。長胴の須恵器甕が出土している。SD103、SD112とともに東西は調査区外へ延びる。

鋤溝やSD103に切られる形で、平行に並ぶ溝を検出した（SD104～SD108・SD114）。幅50cm、深さ10～20cmで南北方向に延び、主に調査区北側で確認できる。溝間の距離は1.5～2mで規則性をもって掘られており、奈良～平安時代の耕作に伴うものと考えられる。調査区南端で同時期の幅、深さが同じような溝を2条検出した（SD101・SD102）。同様の性格のものと考えられるが、北側で検出した溝より方向がやや西に振っている。



fig.159 第1遺構面平面図

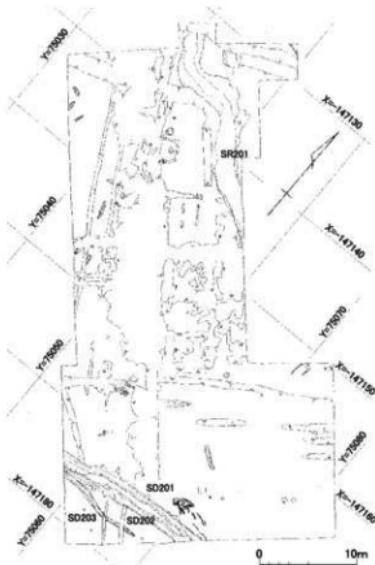


fig.160 第2遺構面平面図

## 第2遺構面

第1構面のベースとなる暗褐色シルト層を掘削すると第2遺構面である。第2遺構面は全体的に遺構が希薄である。

### 溝

南端で東西方向の溝 SD201、SD202、SD203を検出した。SD201、SD202は幅約1mで、それぞれ調査区外に延びる。SD203は幅60cmで、調査区南東付近で途切れる。これら3条の溝は調査区西端で重複する。SD201、SD202、SD203の順に時期が古くなるが、すべて古墳時代後期のものである。須恵器杯身、土師器が出土している。

### ピット

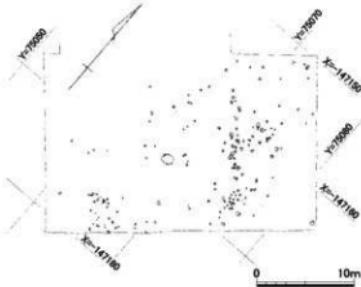
第2遺構面下層において、調査区西側で多数のピットを検出した。ピットは概ね径20cm前後、大きいものでは径約50cmである。遺物が伴わないので、正確な時期は不明である。特に規則性を見出すこともできなかったため、掘立柱建物に復元することはできなかった。また、断面観察でも柱痕跡は確認できなかった。

### 流路

また2区北半に流路 SR201が確認できた。砂の堆積で、北に突出した調査区からS字状に蛇行して南東方向に調査区外へ延びている。

## 3.まとめ

今回の調査では主に溝とピットが検出され、東側の第2次調査で確認されたような建物跡などは見つかっていない。平安時代末のものはSD103より南は希薄である。位置関係や遺構の時期から、SD103もしくはSD112は東側の第2次調査で検出されたSD01に、SR201は流路1につながると考えられる。以上のことから、奈良時代以降の集落の中心はSD103より北や調査区の東に広がっている可能性があると考えられる。また調査区南端で、古墳時代後期の溝を検出した。当調査地周辺に古墳時代の集落が存在する可能性が高いと考えられる。当遺跡の古墳時代の様相はまだ不明確であるが、今回その一端を明らかにすることができた意義は大きい。



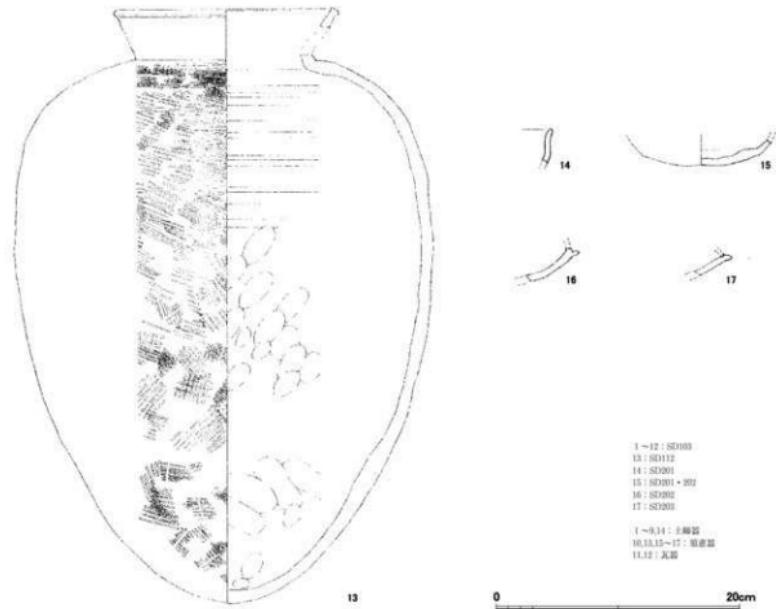
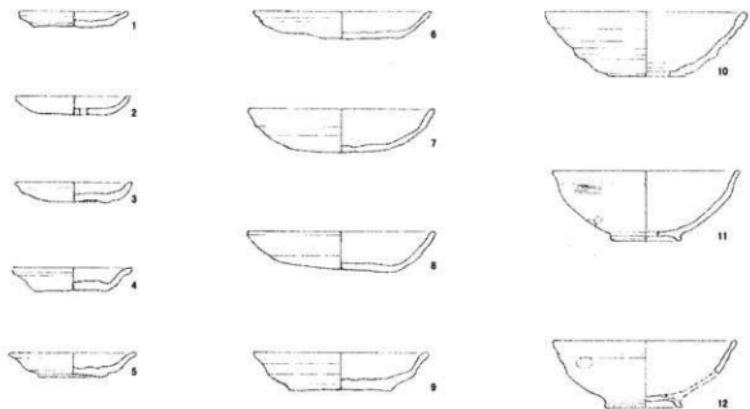


fig.164 出土遺物実測図

1~12 : SD000  
13 : SD012  
14 : SD001  
15 : SD001・302  
16 : SD002  
17 : SD003

1~9,11: 土器  
10,13,15~17: 陶器  
11,12: 瓦器

## 27. 神楽遺跡 第15次調査

### 1. はじめに

神楽遺跡は、長田区神楽町、細田町、川西通の付近に位置し、新湊川の右岸の段丘上に立地する。これまでに14次に及ぶ発掘調査が行われ、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。

### 2. 調査の概要

調査は事務所建設に伴うもので、建物の基礎杭や梁が入る範囲を対象としている。造成土や搅乱土などはバックホーで掘削し、遺構面検出、遺構掘削は人力で行った。

#### 基本層序

層序は、造成土の下に複数の近世以降の耕作土が存在し、その下層に古墳時代後期の遺物包含層と考えられる暗褐色砂混粘質土が堆積する。この層には少量の弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器を含んでいる。その下層は第1遺構面となる褐灰色砂質土で、さらにその下層は、第2遺構面である黄灰色粘土である。

#### 第1遺構面

検出した遺構は、ピット1基、溝3条である。

#### SP101

西・南北トレンチの南隅でピットを検出した。径20cmで、深さ32cmを測る。埋土の黒褐色粘質土から遺物は出土していない。

#### SD101

北・東西トレンチと西・南北トレンチで検出した幅46cm、深さ10cmの溝である。遺物は、6世紀中葉頃の須恵器壺身と土師器が出土している。また、溝周辺では、動物の足跡と考えられる痕跡が多数見られた。

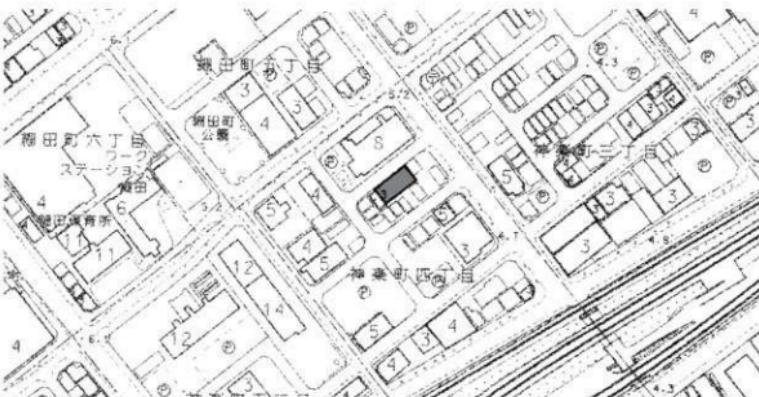


fig.165 調査地位置図 1:2,500

### SD102

中央・南北トレンチで検出した幅38cm、深さ8cmの溝である。遺物は出土していない。

### SD103

南・東西トレンチの東端で検出した幅30cm、深さ12cmの溝である。土師器が出土している。

### 第2遺構面

検出した遺構は、ピット1基、溝1条である。いずれも遺物は出土していない。

### SP201

西・南北トレンチ南端で検出した径16cm、深さ20cmを測るピットである。

### SD201

西・南北トレンチと南・東西トレンチで検出した幅1m～2.4m、深さ10～16cmの溝である。埋土は暗灰色砂質土で、立ち上がりが緩く幅も一定ではなく、窪地状の遺構である可能性も考えられる。出土遺物はなく詳細な時期は判らない。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の遺構面と、弥生時代の遺構面を確認した。

北側に隣接する調査地では、古墳時代初頭頃の竪穴建物1棟、古墳時代後期の掘立柱建物2棟が検出されているが、今回の調査地では遺構密度が希薄であった。第1遺構面は古墳時代後期に該当する溝とともに、動物の足跡と見られるものも検出されたことを考えると、当調査地は、耕作地であった可能性が考えられる。

第2遺構面は弥生時代に相当すると考えられる。しかし、この遺構面では遺物の出土がなく、詳細な時期を決定することはできなかった。

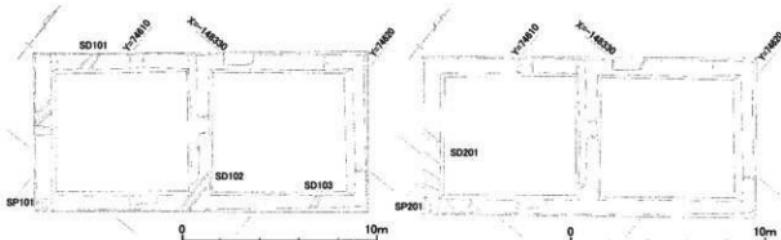


fig.166 第1遺構面平面図

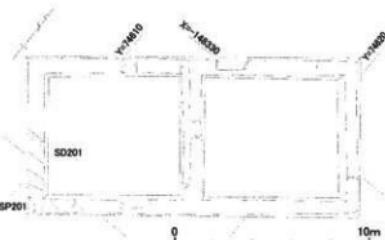


fig.167 第2遺構面平面図



fig.168 調査区西側 SD101検出状況（西から）



fig.169 調査区西側 第2遺構面全景（北東から）

## 28. 大橋町東遺跡 第6次調査

### 1. はじめに

大橋町東遺跡は、平成20年度に新長田駅南地区の再開発事業に伴い発見された遺跡である。今までに5次の発掘調査が実施されており、弥生時代、古墳時代、平安時代にわたる遺構が確認されている。

### 2. 調査の概要

今回の調査地は、平成25年度に行われた第5次調査地の北東に隣接する場所である。從前建物により損壊を免れた範囲で、2時期以上の遺構面が確認できた。第1遺構面は平安時代の遺構面、第2面は遺物が少量のため時期判断は難しいが、第5次調査を勘案すると古墳時代の遺構面となる。

なお、当調査の成果は、平成26年度に「大橋町東遺跡第1次～第6次発掘調査報告書」を刊行しており、詳細については同報告書を参考されたい。

### 基本層序

盛土、旧耕作土、弥生時代から古墳時代の遺物包含層（上面が第1遺構面、標高4.5m前後）、無遺物層（上面が第2遺構面、標高4.4m前後）となる。

調査は從前建物の基礎地中梁の間、計6か所を方形のグリッド状に掘削した。西側の3か所のグリッドを北からW-1～3とし、東側の3か所のグリッドを同じく北からE-1～3と呼称する。

### 第1遺構面

ピット1基と溝15条を確認した。溝はすべて耕作に伴う鋤痕と思われる。溝は南北方向が多いが、W-3とE-3のグリッドでは東西方向の溝を確認している。それぞれの規模



fig.170 調査位置図 1:2,500

は、幅10cm未満、深さ2～3cm程である。

W-1グリッドでは、径30cm、深さ30cm程のピットを検出した。断面からは柱痕状に土層の違いが確認できるが、建物跡に伴うピットであるかは不明である。

## 第2遺構面

第1遺構面の直下で検出した遺構面である。鋤溝のほか、それらとは方向、形状、性質を異にする溝の可能性が高い遺構を3ヶ所、鋤溝の上部が削平された残溝であろうと推測されるものを4ヶ所検出している。

鋤溝は南北方向が主で、規模、方向などは第1遺構面のものとほぼ同じである。鋤溝からは、弥生土器が出土した。

また、W-1・E-2のグリッドで、上記の鋤溝とは深さ、方向を異にする遺構を3ヶ所確認した。いずれも断片での検出にとどまるため、全体像が不明である。これらの遺構からは弥生土器片が出土したが、小片のため正確な年代を決定するにいたらない。

## 3.まとめ

今回の調査地では、後世の削平が著しいため遺構の残りが良くなく、出土遺物も少量であった。北東方向ほど遺物包含層の堆積が希薄になるが、ほぼ全域で古墳時代～弥生時代の包含層の堆積を確認した。基本層序、検出遺構の性格とともに第5次調査の結果を追認するものであった。



fig.171 第1遺構面全景 (南から)

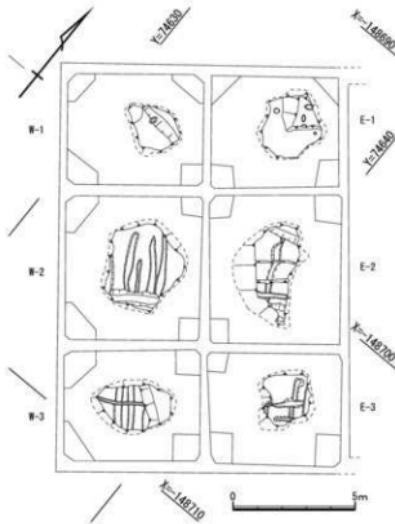


fig.172 第2遺構面平面図

## 29. 松野遺跡 第45次調査

### 1. はじめに

松野遺跡は、六甲山系に源を発する妙法寺川や苅藻川によって形成された沖積地に立地する複合遺跡である。これまでの調査で、縄文時代晚期から中世にいたる遺構・遺物が確認されており、遺跡の範囲は南北約400m、東西約100mの広がりを持つことが判っている。

松野遺跡発見の端緒となった市営住宅建設に伴う第1・2次調査では、柵列と溝によって区画された古墳時代中期末～後期初頭の豪族居館が確認され、その後の調査においても、同時期の集落に伴う遺構・遺物が確認されている。

### 2. 調査の概要

調査は、個人住宅建設により工事によって影響を受ける範囲について行った。

調査区の東半を1区、西半を2区とし、なお、1区南辺については搅乱により遺構面は失われていた。

#### 基本層序

盛土・整地土以下は、古墳時代～鎌倉時代の遺物をわずかに含む旧耕作土、その下層に弥生土器を含む遺物包含層である黒褐色シルトが堆積し、そして褐色系～暗灰黄色系シルトの遺構面になる。さらに下層では、無遺物層となる黄灰色シルト～粘質土が調査区全面にわたって広がることを確認している。

#### 検出遺構

竪穴建物1棟、溝2条、土坑3基の他、ピット14基を検出した。

#### SD01

1区中央で検出した南北方向の2段状の溝である。幅90～120cm、深さ30cmを測り、調査区外に続く。埋土上層は暗黒褐色系シルトで、下層は灰黄色系シルトである。弥生時代前期と考えられる土器片が出土したが、いずれも小片で磨滅が著しい。



fig.173 調査地位置図 1:2,500

## SX02

2区北西隅で検出した不整楕円形の落ち込みで、長径約4mを測る。埋土からは弥生土器・石鐵・サヌカイト片・赤色チャート片が出土した。掘形が不明瞭ではあるものの、底面が比較的平坦であること、この底面を切り込んでSK01が構築されていること、周囲の遺構配置などから、竪穴建物の可能性が高いと考えられる。

## SK01

SX02底面より切り込む径80cm、深さ15cmを測る円形の土坑で、弥生土器・サヌカイト片・赤色チャート片が出土した。SX02が竪穴建物とすれば、中央土坑である可能性が考えられる。

## SK02

2区中央で検出した不整円形の土坑である。長径50cm、深さ15cmを測り、弥生土器の壺1個体の底部が埋設された状況で検出した。SX02に伴う遺構と考えられる。

## SK03

SD01を切る土坑である。大半が攪乱されており、全体の規模・形状は不明である。遺物は弥生土器の小片が1点出土しているのみである。

## SP13

SX02南東隅で検出された径50cm、深さ65cmを測る。柱穴である可能性が考えられる。

## 3.まとめ

今回の調査では、弥生時代前期の遺構・遺物を確認することができた。過去の調査では、第1・2次調査に先立つ試掘調査において木葉文を施した弥生土器片が出土したほか、当地の近隣の調査地においても、当該期の遺構・遺物が少量ながら確認されている。いずれも散発的な調査成果であり、松野遺跡における当該期の具体像をつかむには至っていない。この調査地において竪穴建物と考えられる落ち込みや溝、土坑などを確認したことから、松野遺跡における弥生時代前期の集落が、さらに北側へと広がることが明らかとなった。特に、石鐵やサヌカイト片とともに赤色チャート片がまとまって出土したことは、松野遺跡の当該期の集落像を考えていく上で重要な成果といえる。

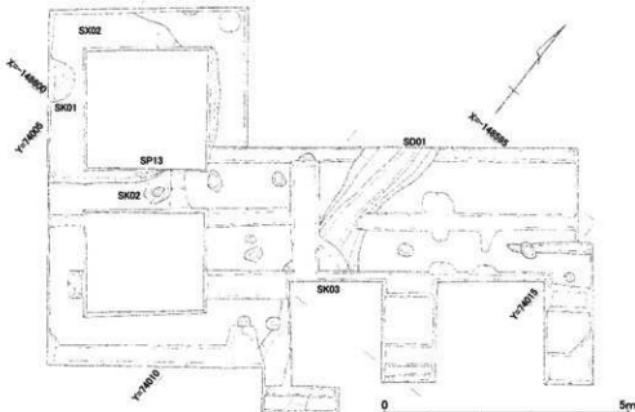


fig.174 遺構平面図

## 30. 大田町遺跡 第18次調査

### 1. はじめに

大田町遺跡は、妙法寺川中流域左岸に立地する弥生時代～中世の集落遺跡である。平成2年度の福祉センター建設に伴い初めて調査され、これまでに17次の発掘調査が行われている。第1～3・5次調査では奈良時代～平安時代の掘立柱建物を中心とする遺構が確認され、古代山陽道に置かれた「須磨駅家」に関する遺構と考えられている。第2次調査では古墳時代の土坑から滑石製品約550点が出土するなど古墳時代の出土遺物も注目される。第3次調査では「荒田郡」銘の円面鏡が出土、また第5次調査では「歯固め」に伴うものと考えられる銅鏡7枚を埋納した壺の出土も特筆される。

### 2. 調査の概要

調査は個人住宅建設に伴い、地盤改良工事の範囲について行った。バックホーで遺物包含層上面まで掘削し、以下は人力により遺構・遺物の検出に努めた。

#### 基本層序

盛土や建物の基礎による搅乱の下に複数の旧耕作土が存在する。その下層には古墳時代～奈良時代の遺物を含む茶褐色砂質シルトが堆積している。敷地南側では、その下層に堆積する黄色砂質シルトが遺構面となる、北側では間に灰色細砂が堆積する。

#### SP01～SP07

調査区西側で直線に並ぶ柱穴を確認した。調査範囲が限られているため詳細は不明であるが、建物を構成するものと考えられる。東側の調査区でも掘形の平面が隅円方形を呈する柱穴を検出したが並びなどは不明である。

#### SP01～SP03

一辺約70cm、深さ50～70cmで平面やや隅円方形を呈する柱穴である。埋土はシルト質の土が2～3層、レンズ状に堆積する。径12～15cmの暗灰色シルトの柱痕跡を確認したが、掘形に比して細く、木材が痩せたものかと考えられる。地盤がやや軟弱であるため柱材が重さで沈み込んだ状況が見られる。SP03からわずかに須恵器片と砥石と考えられる遺物が出土した。柱列の主軸方向はN-34°-Wである。



fig.175 調査地位置図 1:2,500

## SP04～SP07

SP01～SP03の西側に接するように4基3間分の並びを検出した。柱穴はそれぞれ平面隅円方形で一辺約70cm、柱間は約1.5mである。SP04・SP05は掘形底面で径12cmの柱跡と考えられる暗灰色シルト、または黒色シルトの堆積を確認した。いずれの柱穴からも遺物の出土はなかった。柱列の主軸方向はN-40°-Wである。

## SD01

検出長約1.3m、深さ10～20cmで、西側がやや深く、傾斜する溝である。埋土下層は細砂、上層には暗灰色シルトが堆積する。遺物の出土はなかった。

## SK01

径約1.5mを測り平面円形の半分が検出された土坑である。埋土は下層に黒褐色シルト、中間から上層は砂質土となる。遺物は小片の須恵器・土師器が出土したのみである。

### 3.まとめ

調査面積が限られていたが、今回の調査では建物に伴うものと考えられる柱穴の並びを検出した。柱穴は方形の掘形であり、周辺の調査で検出された柱穴と同様、官衙的な建物の一部と推測される。遺構からの出土遺物は少量であるが、遺物包含層の状況を考えると奈良時代の遺構と考えられる。古代山陽道の隣接地と想定される第1・2・3・5次調査地や、今回の調査地の東に位置する第6・11次調査地では奈良時代～平安時代の掘立柱建物や建物と考えられる柱穴が検出されている。これら調査地は妙法寺川により形成された自然堤防上に立地するものと推測され、今回の調査地付近にも微高地が拡がり、官衙に関連する施設が構築されたものと推測される。第2次調査で検出された奈良時代と考えられる建物が概ねN-30°-W前後の南北軸をとり、今回の柱列と似た方向性を持つようであるが、そのほかにN-10°-W前後の並びも多く、第5次調査における建物群の詳細な時期の検討も必要となろう。

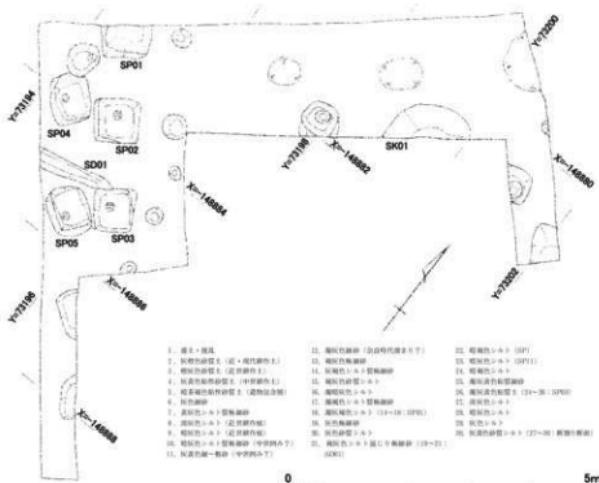


fig.176 遺構平面図

## 31. 鷹取町遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

鷹取町遺跡は妙法寺川左岸の沖積地上に位置し、第1次調査（昭和62年度・兵庫県教育委員会）において、古墳時代の集落遺跡であることが確認されている。

### 2. 調査の概要

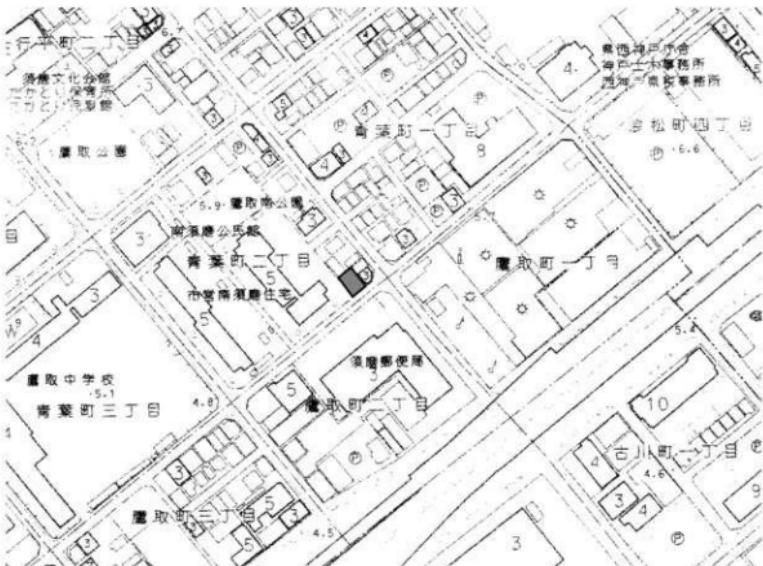
今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、2面の遺構面（古墳時代前期・後期）とそれに伴う遺物を確認した。

調査は基礎の柱状改良工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲において調査を実施した。調査区は1～3区の3カ所に区分し、1区、2区、3区の順で作業を進めた。

#### 基本層序

上層より、盛土、淡黄灰色砂質シルト（旧耕作土層）、淡茶灰色砂質シルト（旧耕作土層）、淡灰褐色砂質シルト（第1遺構面基盤層）、灰色砂質土、淡灰色中～粗砂、淡黄灰色極細砂、淡灰褐色シルト（第2遺構面基盤層）の順である。

遺物は、第1遺構面の直上層である淡茶灰色砂質シルト（旧耕作土層）から、第2遺構面の直上層である淡黄灰色極細砂の間において確認したが、数量的には、第1遺構面の遺構（SB01）埋土のものが多い。



### 第1遺構面

G. L. - 30cm程度の深さで確認できる遺構面である。搅乱によって遺構面が損壊している箇所が多く、明確に遺構を確認できたのは、2区の北端部のみで、遺構面の標高は約4.7mを測る。

検出できた遺構は1ヶ所のみである。15cm程度の深さで、壁際に溝を伴うことから、堅穴建物（SB01）の一部である可能性が考えられる。埋土中より、古墳時代後期に属する土師器、須恵器の破片が出土した。

### 第2遺構面

1・2区については、一部搅乱されているものの遺構面が遺存するが、3区はほぼ全域において搅乱を受けている。遺構面の標高は概ね4.2mを測る。

遺構を確認したのは、1区の北半部で、小規模なピットが3基のみである。遺構面の直上層やピット内より、古墳時代前期に属すると考えられる土師器の小片が出土したが、数量的には少ない。

### 3.まとめ

今回の調査地は、搅乱が多く、遺構面を確認できた部分が限定されていたものの、南側に近接する第1次調査地で確認された堅穴建物で構成される古墳時代後期の集落の広がりを確認できた。また、遺構は希薄であったが、古墳時代前期の可能性のある遺構面を確認

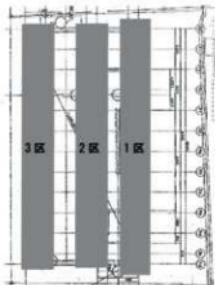


fig.178 調査範囲図



fig.179 2区 SB01検出状況（北西から）



fig.180 1区 第2遺構面（南東から）

## 32. 野田遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

野田遺跡は、垂水区馬場通付近に位置し、福田川右岸の段丘上に立地する。これまでに3次にわたる調査が実施され、鎌倉時代頃の土坑や溝が確認されている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、調査対象は柱状改良が行われる範囲である。試掘調査によって、平安時代後半頃の遺物が出土する溝（1区北側）を検出しており、同時期の遺構の検出が想定された。

調査区を、北側から順に1区北側、1区、2区と呼称し、調査を行った。そして、盛土・造成土はバックホーで掘削し、それ以下は人力によって遺構掘削や遺構面検出を行った。

#### 基本層序

造成土の下は、中世以降の土師器・須恵器を少量含む耕作土が堆積している。その下層は、遺物包含層である褐灰色粘質土、暗褐色粘質土となり、現地表面から深さ約50cmで遺構面となる灰白色粘土になる。

#### 検出遺構

ピット7基、溝2条、性格不明遺構1基である。

#### SP01～SP07

1区南半で検出したピットである。SP01は径38cm、深さ36cmを測り、SP03・SP04は長径18cm、深さ12～16cmを測る。これらの埋土は黒灰色粘質土で平面・断面ともに明瞭であったが、ピットからの出土遺物はなかった。SP02・SP05～SP07は、平面・断面ともに不明瞭で、小規模なくぼみである可能性が考えられる。SP03・SP04は、ほぼ東西に並んでいるが、今回の調査範囲において建物や塀などの構造物を復元することは難しい。

#### SD01

1区北側で検出した幅56cm、深さ28cmを測る溝である。調査区外に続くため全容は判らないが、東西方向に続くものである。暗褐色粘質土の埋土は炭化物を含み、平安時代末



fig.181 調査地位置図 1:2,500

頃の土師器の皿や甕や須恵器甕や鉢などが出土している。

#### SX02

1区中央付近で東西方向に検出した幅約70~90cm、深さ約30cmを測る溝である。埋土の上層は暗灰褐色粘質土で、下層の暗灰黄色粘質土からは平安時代以降の土師器甕の小片が出土している。

#### SX01

1区北東隅で深さ10cm程、暗灰褐色粘質土を埋土とする性格不明遺構を検出した。遺構の大部分が調査区外に広がり、形状・規模とも不明である。遺構内からの出土遺物はない。

### 3.まとめ

今回の調査では、溝2条、ピット7基、性格不明遺構1基を検出した。SD01からは、11世紀後半~12世紀前半の遺物がまとめて出土しており、周辺に平安時代後半頃の生活域が広がっていたものと考えられる。既往の調査成果では鎌倉時代の遺構や遺物が確認されているが、調査によって平安時代後半頃にまさかのぼることが明らかになった。

当遺跡は調査例が少なく、様相は不明確な点が多い。今回の調査で検出した遺構や出土遺物については、今後、周辺地における調査の増加を待って、検討を加えていきたい。

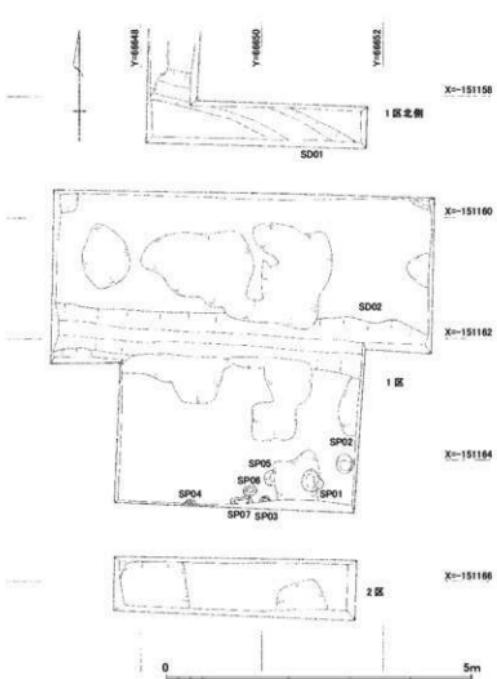
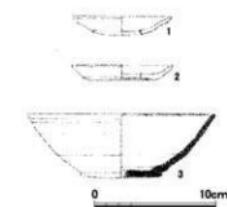


fig.183 1区全景 (北から)



### 33. 南別府遺跡 第6次調査

#### 1. はじめに

南別府遺跡は明石川の一支流である伊川の中流域左岸に位置している。昭和48年度の区画整理事業に伴い確認された遺跡である。

第1・2次調査では6世紀末～7世紀初頭の須恵器や平安時代（11世紀末～12世紀）の神出窯産の軒平瓦、15世紀代の備前焼擂鉢等が出土している。第3次調査では落ち込み状遺構と流路状の溝を検出し、底部に「器」の墨書のある奈良時代～平安時代の須恵器壺や瓦片が出土している。第4次調査では古墳時代中期の溝、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物、溝、土坑や土器溜り等を検出した。第5次調査では計3面の遺構面を確認し、溝や竪穴建物の一部と思われる遺構を検出した。溝からは5世紀後半代の須恵器・土師器、竪穴建物からは弥生時代末～古墳時代初頭の土器類が出土した。

#### 2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設により遺跡が影響を受ける範囲について実施した。調査地は第3次調査地の北側に位置し、奈良時代～平安時代の遺構・遺物の出土が予想された。

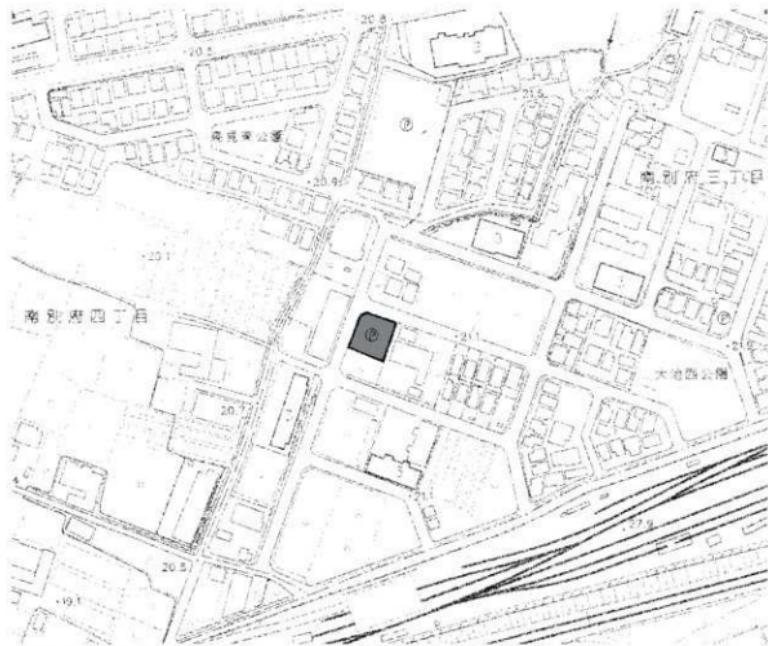


fig.185 調査地位置図 1:2,500

調査区は東西に長く、幅約5m、長さ10.5mの範囲であるが、中央部は大きく搅乱を受けていて全体の約7割の遺構面がすでに滅失していた。

結果的に遺存した面での遺構の存在は明らかにできなかった。ただし、遺物包含層を2層確認した。遺物包含層は、奈良時代～平安時代と考えられる須恵器などを含む灰色粘質砂と弥生時代末～古墳時代初頭の土器を含む黄灰色～暗灰色粘質砂を確認した。

### 3.まとめ

今回の調査では、後世の搅乱により遺構面が大きく損壊を受け、遺構の存在を確認することはできなかった。ただ2時期の遺物包含層を確認することができ、奈良時代～平安時代及び弥生時代末～古墳時代初頭の集落が近接地に存在することが確認できたことは、一定の成果と考えることができる。

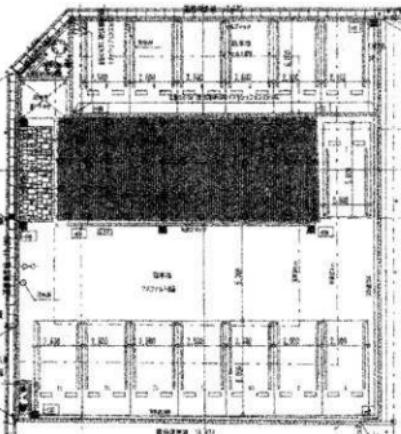


fig.186 調査範囲図

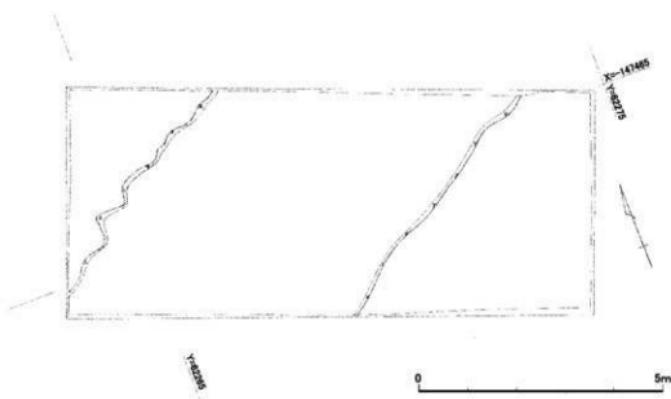


fig.187 調査区平面図

## 35. 新方遺跡 第53次調査

### 1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線建設に伴う調査によって明らかになった遺跡で、昭和45年度の調査では弥生時代中期初頭から鎌倉時代の遺物が多量に出土し注目された。その後、数次にわたり発掘調査が実施され、その度ごとに当遺跡が大規模で重要な遺跡であることが確認され、明石川流域の弥生時代中期の拠点集落として著名となった。なかでも1982年に調査された丁の坪第II地点では弥生時代中期・大日地点では古墳時代後期の玉造工房址が発見され注目された。奈良時代から中世にかけても集落の存続が認められ、中世では神出古窯址群から搬入された瓦が出土することで知られている。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、基礎杭が深く、遺跡が損壊を受ける部分について、2分割を行って調査を実施した。

#### 第1 遺構面

中世の耕作面と考えられる。遺構等は確認できていない。

#### 第2 遺構面

古墳時代後期後半の遺構面である。遺物包含層からは中世頃から古墳時代後期頃の土器が出土している。

東西方向に平行する2条の溝を確認した。それぞれの溝の幅は40~50cm、深さ10cm程度である。出土遺物から6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

#### 第3 遺構面

古墳時代後期前半の遺構面と考えられる。この面の遺構は確認できなかった。

#### 第4 遺構面

この遺構面では、切り合いをもつ古墳時代中期後半の堅穴建物を3棟確認した。



fig.188 調査位置図 1:2,500

### 堅穴建物301

調査区西で検出された建物である。周囲に周壁溝を持つことが確認されたが、規模等は不明である。出土遺物から、5世紀後半と考えられる。また、埋土内から製塩土器が出土している。

### 堅穴建物302

一辺3.2mほどの方形の建物になると思われる。堅穴建物301、堅穴建物303のいずれをも切っており、今回検出した建物の中でも最も新しいものである。深さ30cmほど残存するが、周壁溝は確認されてない。時期は、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

### 堅穴建物303

調査区の東で確認した建物である。堅穴建物301と堅穴建物302はほぼ同一の方位をとるが、堅穴建物303はこれらの建物の方位とは異なる方位をとっている。

建物の規模は不明であり、周壁溝も確認していない。この建物の最終埋没時の埋土よりTK10型式の須恵器杯身1点が完形で出土している。堅穴建物302を建てる際の何らかの祭祀とも考えられるが詳細は不明である。この堅穴建物303からは床面より、5世紀後半の須恵器が出土しており、およそその時期と考えられる。なお、埋土内から製塩土器並びに繩羽口が出土している。

### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代の遺構を確認した。周辺の調査では、中世の集落、古墳時代や弥生時代の遺構・遺物が多数確認されているが、弥生時代の遺構・遺物は確認できなかった。隣接する地点でも弥生時代の遺構は希薄と考えられることから、この調査地周辺で、弥生時代の遺構が途切れる区域ないしは、古墳時代の開発に伴う削平を考慮する必要がある。なお、今回の調査範囲でも古墳時代の製塩土器が多量に出土しており、5世紀後半から6世紀中頃までの限られた期間において、塩の流通を考える上で重要である。

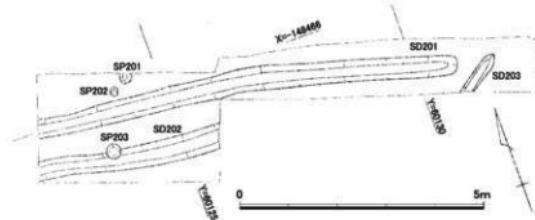


fig.189 第2遺構面平面図

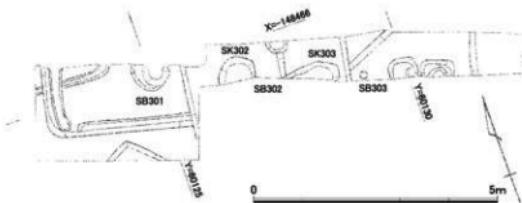


fig.190 第4遺構面平面図

## 36. 枝吉遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

枝吉遺跡は西区枝吉4丁目付近に所在し、当初は西区No.151地点遺跡と登録されていた遺跡である。周辺には、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が複数点在し、遺跡西方には中世の枝吉城が存在する立地から、当遺跡もこれらと同じ時期の遺跡と考えられていた。過去の調査では弥生時代末から古墳時代初頭と繩文期の2時期の遺構が確認されている。しかし、調査歴が少なく、遺跡の実態は未だ不明である。

### 2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、工事により埋蔵文化財が影響を受ける部分について調査を実施した。調査区名をI～IV区と呼称し、II区については、表土直下より地山までの間に遺構・遺物は認められなかった。

#### 基本層序

基本的には、現代盛土、2～3層の近世耕作土、地山と続く。I区とIII区では、近世耕作土と地山の間に一部整地層状の堆積が認められる。

#### 検出遺構

I区とIII区では、地山上に遺構の可能性がある浅い凹みを複数確認した。いずれからも近世の陶磁器・土師質土器類と弥生土器あるいは土師器の小片が混じって出土している。どの埋土も地山直上層と全く同質で、時期差を感じさせない。一部小規模なピット状のもので、弥生土器ないし土師器だけが出土したが、すべての調査区で、近世耕作土中に当該時期の土器片が一定量混じっており、これが混入した可能性もある。

IV区は近世の新田開墾に伴い地層が削平されており、搅乱された土壤中より、近世陶磁器類に混じって弥生土器ないし土師器の小片が出土したものの、顕著な遺構は認められなかった。

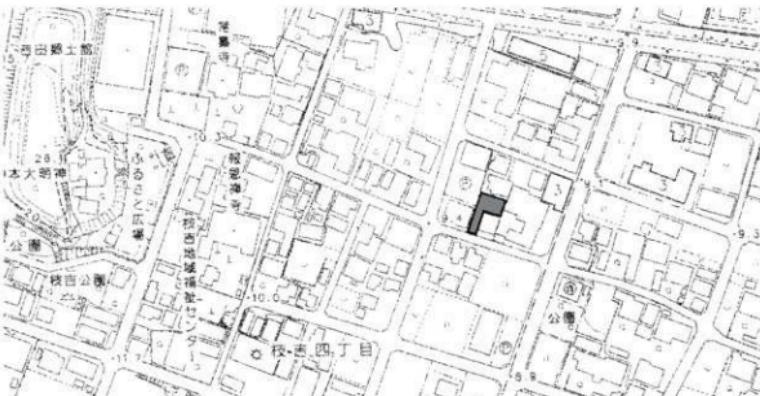


fig.191 調査位置図 1:2,500

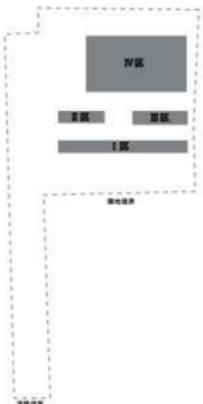
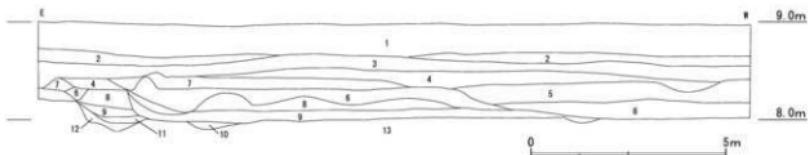


fig.192 調査区配置図



fig.193 I区 遺構面全景 (西から)



- 1. ~ 4. = 現代盛土
- 5. = 近世耕作土
- 6. = 2. SY6/4 にぶい黄色粘土 (明治時代整地層)
- 7. = 盛土
- 8. = 2. SY5/1 黄灰色粘土 (江戸時代耕作土)
- 9. = 2. SY6/1 黄灰色砂質粘土 (江戸時代遺物を含む)
- 10. = 2. SY7/2 灰黄色粘土 (SX03 墓土)
- 11. = 2. SY6/1 黄灰色粘質砂
- 12. = 2. SY6/1 黄灰色砂 (11, 12. = SX04 墓土 江戸時代遺物を含む)
- 13. = 2. SY7/1 灰白色粘土にマンガン粒多く含む (地山層)

fig.194 I区 南壁土層断面図

### 3.まとめ

今回の調査地は、近世の新田開発に伴い、本来の地層が大きく改変されていた。地山上に浅く残る凹みについても、削平・攪乱された結果と考えられる。弥生時代ないしは古墳時代の遺構と断定できるものは存在しなかったが、地山以上層には一定量の弥生土器ないし土師器が含まれていることから、過去の調査でも確認されている当該時期の遺構が付近に存在したことは間違いない。なお、今回の調査では、中世の遺構、遺物は全く確認できなかった。

## 37. 出合遺跡 第47次調査

### 1. はじめに

出合遺跡は、昭和52年に圃場整備に伴う発掘調査が初めて行われて以来、現在までに46次に及ぶ調査が行われている。これまでの調査によって、弥生時代前期に集落が形成され以降、鎌倉時代ごろまで連続と継続したことが分かっている。

当遺跡の特徴は、弥生時代では周溝墓・建物・水田、古墳時代には古墳・建物・須恵器窯、というように、墓域、生活域、生産域といった、集落における諸要素が複合的に確認されていることである。その特徴は弥生時代から古墳時代の遺構に最も顕著で、先史時代の生活を知るうえで非常に良好な資料を提供してくれる遺跡と評価できる。

### 2. 調査の概要

調査は、個人住宅建設に伴う建物基礎部分の柱状改良対象範囲を中心に、方形あるいは長方形にトレーニチを設定して行った。便宜上対象範囲を3分割し、着手順にI区～III区と呼称した。

なお今回の調査地は、平成22年度の宅地造成事業に伴う第45・46次調査地点と隣接する。第45・46次調査終了後、一帯は宅地造成のため大規模な盛土が行われており、今回の調査でも、現況地盤より2.5m程掘り下がった地点で、第1遺構面を確認した。この面より下層にも遺構面は存在するが、安全確保が不可能なため、第1遺構面までの調査とした。



fig.195 調査位置図 1:2,500

## 基本層序

宅地造成範囲のうち、最も西側にあたる当地では、造成時の盛土が2m以上

の高さで施工された。

れ、現況地盤は標高18.0mを超える。この盛土を取り除いた標高15.8m前後で、平成22年当時の現況地盤に近い旧耕作土が検出される。旧耕作土は3層ないし4層連続し、その直下層の上面が第1遺構面となる。第1遺構面を形成する層にも、弥生土器が多く含む。この層は淡黄灰色系を中心とした砂質粘土層で、調査地北側直近を流れる明石川の沖積作用ないし氾濫がもたらした堆積層である。

平成22年度の調査で明らかなように、本調査地周辺は旧耕作土直下が遺構面である。近年の耕作に伴い遺物包含層は削平され失われたと推測されるが、場所によっては平安時代から鎌倉時代の遺構面が遺存していることから、あるいは古墳時代の遺物包含層は比較的早い段階で失われている可能性もある。

調査地の基本層序は以下の通りである。盛土、旧耕作土（3～4層）、第1遺構面基盤層（弥生土器を含む）、以下に弥生土器を含む層が複数連続する。

第1遺構面及びその下位については、先述の通り明石川の沖積作用、時に一過性の氾濫によってもたらされた砂層を中心に構成されており、遺跡は水流由来の堆積による軟弱な地盤上に形成されている。

## 検出遺構

竪穴建物2棟、建物に伴う土坑1基、ピット、溝、柵の可能性があるピット列1か所を確認している。

### SB101

I区で検出した真北に軸を持つ竪穴建物で、西半を確認している。検出面からの深さは約20cmを測り、西周壁溝は全長約3.4mを測る。

炉跡は確認できなかった。床面には、木材の形状を保った長さ20cm前後の炭塊や焼け土が多数散乱した状態で検出されている。床面や壁には火を受けた痕跡はない。

柱穴の可能性があるピットは4か所確認できた。南西隅のピットは径65cm、深さ15cmと規模が大きく、位置的にも主柱穴と考えられる。ただし北西隅にこれに対応する柱穴はなく、四隅に主柱をもつ構造ではないようである。

その他のピット2基は径20cm、深さは25cmを測る。

後述するが、建物南西隅直近に径1mほどの穴（SX102）が穿たれており、この建物に付随する遺構の可能性が高い。

この建物の埋土中からは、古墳時代中期の土器、炭片、焼土が多量に出土している。

### SB102

方形ないしは長方形の竪穴建物の、東壁に伴う周壁溝の一部と、床面に柱穴の可能性があるピット数基を検出した。建物の大半は調査区外に続いており、詳細な構造、規模は不

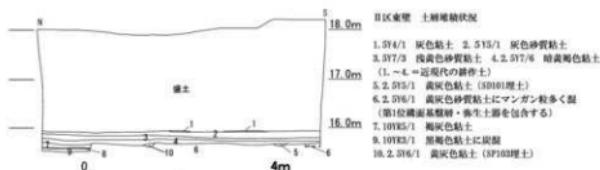


fig.196 II区 東壁土層断面図

明である。建物四隅は検出できておらず、周壁溝が直線であることと、過去に周辺で確認されている建物跡の形状から、方形の平面形と判断した。

検出した範囲では、東壁の溝は3m以上、深さは30cm程度を測る。溝壁は垂直に近い角度で明瞭に立ち上がる。溝の埋土からは弥生時代末から古墳時代初頭の鉢がほぼ完形で出土している。

床面で検出したピットも、床全体のどの位置に相当するのか判断しがたい。いずれも径20cm前後で、深さは10~20cm程度である。建物は真北に軸を持ち、SB101と同じ軸方向で建てられている。検出した範囲内では炉跡やかまどの跡は確認できなかった。

#### SX102

径1m、深さ80cm以上の円形の土坑である。埋土は薄い複数の層の連続で、各層はU字状に堆積しており、短時間の埋没でなく、時間をかけて徐々に土が堆積している。埋土複数の層に分かれているが、SB101同様焼け土や炭混じり層が観察できる。

遺物は、古墳時代中期頃の土師器が多く出土しているほか、最上層で5世紀ごろの須恵器の台付鉢あるいは高環の脚部片が1点出土している。

#### SD101・SD102

II区とIII区で幅30cm、深さ5~10cm程の浅い溝を検出した。SD101は東端でL字に屈曲している。この溝から古墳時代中期の土師器が出土している。

#### SA101

SB101の南側で、ピット3基が東西方向並ぶ状態で検出された。いずれも径15cm、深さ15cm程度、灰色系の粘質土を埋土としている。いずれのピットからも少量の土師器片が出土しているが、時期は判らない。

ピット列は真北に対し直交しておらず、真北に軸をとるSB101から見ると、やや振れた並びとなる。SB101に伴うものか判らない。

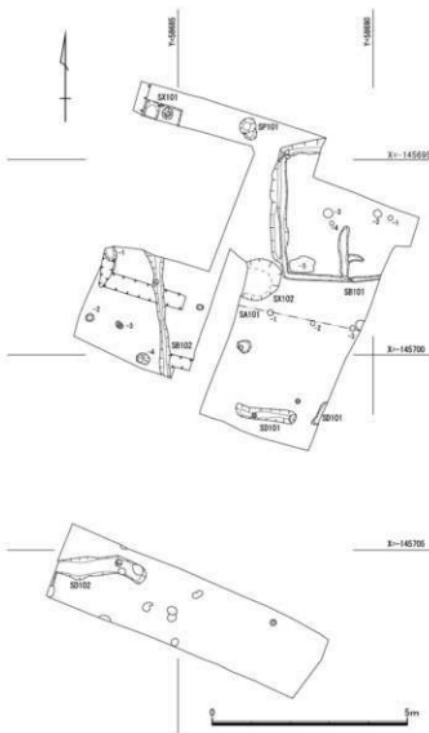


fig.197 第1遺構面平面図

### その他の遺構

調査区北西隅で、方形の浅い掘方の中に円形の深いピットが2基並ぶ遺構SX101を検出している。検出時の形は方形を呈していたが、下部では円形のピット2基となった。この遺構からは、弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土している。

SX101の東側で不整円形のピットSP101を検出している。径28cm、深さ30cm程度である。この遺構からは、弥生時代末の土器が出土している。

この2基の遺構は、同一の掘立柱建物の柱穴である可能性もあるが、調査範囲での検証は困難である。

### 3.まとめ

今回の調査は、層序、検出遺構の性質ともに、第45次・第46次調査の調査結果を追認するものであった。

検出された遺構のうち、SB101とSB102の間にはかなりの時期差が認められるが、ある程度連続性をもつものと考えたい。SB101に付随する可能性が高いSX102についても同様である。それ以外の遺構についても、時期的に大きく隔たるものではなく、すべて弥生時代末から古墳時代中期に収まるものである。

また、SX102出土の須恵器脚端部は、韓式系土器もしくは初期須恵器の中に類例を求めることができる資料である。



fig.198 SB102検出状況（東から）



fig.199 II区 第2遺構面全景（北から）



fig.200 III区 第2遺構面全景（北東から）

## 38. 出合遺跡 第48次調査

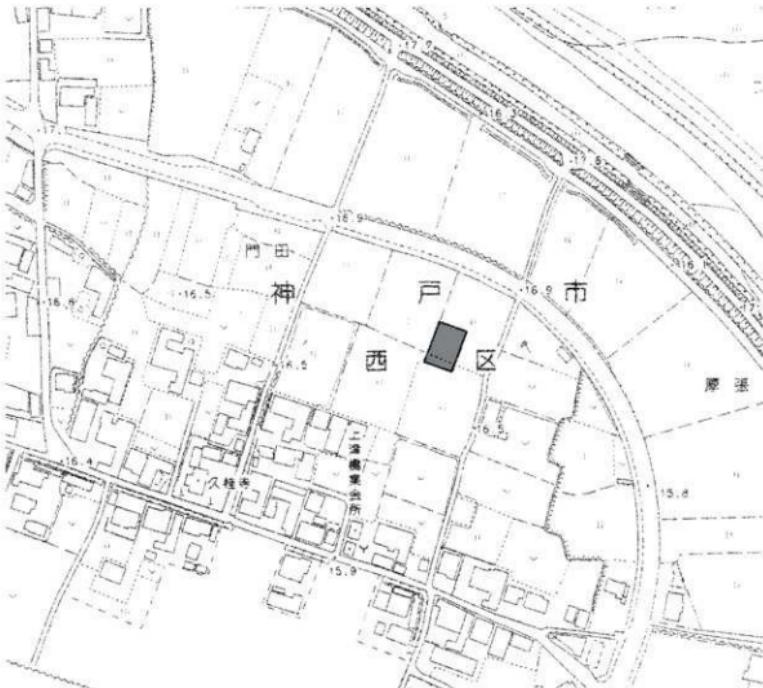
### 1. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、建物基礎部分の柱状改良対象範囲を中心にトレッパンチを設定して調査を行った。調査区を4分割し、I区～IV区と呼称する。

調査地は、平成22年度の宅地造成事業に伴う第45次・第46次調査地点と隣接する。

#### 基本層序

本調査地では、宅地造成時の盛土が1.2m以上の高さで施工され、現況地盤は標高約17mである。この盛土を取り除いた標高16m前後で、平成22年当時の現況地盤に近い旧耕作土が確認できる。旧耕作土は3層ないし4層連続し、その直下層の上面が、第45次・第46次調査における第1遺構面、平安時代頃の時期に相当する層となる。この層には、弥生土器が多く含み、淡黄灰色系を中心とした砂質粘土層で、調査地北側直近を流れる明石川の沖積作用なし氾濫がもたらした堆積層である。



第1遺構面以下については、Ⅲ区及びⅣ区に1m×1m程度のテストピットを設定して確認した。第1遺構面及びその下層については、明石川の氾濫によってもたらされた砂層を中心に構成されており、その最上層からは古墳時代中期の土器が出土している。この旧河川の最終埋没時期を示すと思われる。

## 2. 調査結果

今回の調査では、明確な遺構は検出されなかった。ただし、周辺の調査で確認されている遺構面は、本調査区にも連続していた。このことから、今回確認した第1遺構面は、平安時代から鎌倉時代頃の遺構面と考えられる。

### 出土遺物

14リットル入コンテナに換算して約1箱程度の土器が出土しているが、ほとんどが第1遺構面より下層の旧河道埋土から出土した土器である。第1遺構面相当層からは、中世の土器はほとんど出土していない。

旧河道埋土からは最上層で5世紀頃、中層で弥生時代末から庄内式期に併行する時期、下層では弥生時代前期の土器が出土している。それぞれの堆積時期を示すと考えられる。

## 3. まとめ

今回の調査は、第45次・第46次調査の調査で報告されている層序を追認するものであったが、明瞭な遺構を確認できなかった。

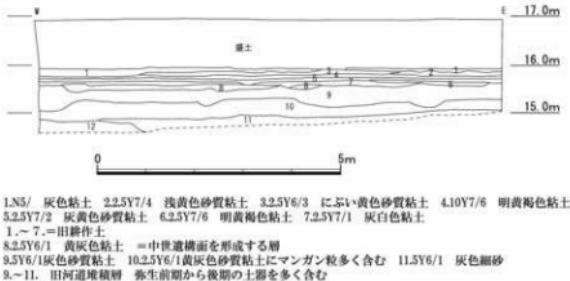


fig.202 I 区 北壁土層断面図

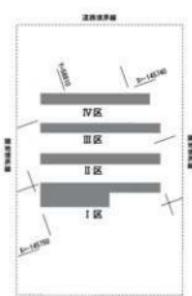


fig.203 調査区配置図



fig.204 I 区 旧河道上層検出状況（西から）

## 39. 出合遺跡 第49次調査

### 1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域右岸の沖積地および段丘上に立地する。これまでに48次にわたり発掘調査がおこなわれ、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が確認されている。

弥生時代の遺構としては、竪穴建物や周溝墓、水田跡などが確認されている。古墳時代中期から後期にかけての古墳17基が段丘上で確認され、また同時期の竪穴建物も検出している。また初期須恵器段階の須恵器窯が検出され、韓式系土器もまとまって出土していることから、朝鮮半島からの渡来系集団との関連がうかがえる。飛鳥時代から平安時代では、段丘上に多数の掘立柱建物が確認されているほか、平安時代後期から鎌倉時代前期の掘立柱建物や木棺墓等を検出している。

### 2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴うもので、地盤改良によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について実施した。南に隣接する街路部分は、第45次・第46次調査として調査を行っており、弥生時代の竪穴建物、古墳時代の流路、鎌倉時代の木棺墓などが検出されている。調査地によっては4面の遺構面が確認されており、今回の調査地でも同様に遺構が広がるものと想定された。

調査地周辺は1mを超える盛土造成が行われているため、安全面に考慮しつつ、遺構面に影響を与えると考えられる箇所で部分的な調査をおこなった。

#### 基本層序

調査対象地の現地表面は、標高約17.2mである。造成土下で、灰色粘質土（1層）、黄色粘質土（2層）、灰白色粘質土（3層）の耕作土層を検出した。

耕作土下層には灰褐色粘質土（4層）、暗灰褐色粘質土（4'層）がそれぞれ約20cmずつ堆積している。

4'層の下層では、黄褐色粘土や灰黄色細砂からなる河川堆積層（5～11層）を検出した。



### 第1遺構面

灰褐色粘質土層上面の標高約15.6mで検出した。周辺の調査では、この面で古代から中世の遺構や遺物が確認されているが、今回の調査区では遺構を確認することはできなかった。

### 第2遺構面

第2遺構面は、暗灰褐色粘質土層上面の標高約15.4mで検出した。1区では上層の灰褐色粘質土層との差異が明確ではなかったため、検出ができない。周辺の調査成果からも古墳時代の遺構面に相当すると考えられる。

### S P 201

2区の北壁付近で径28cm、深さ14cmを測るピットの南側半分を検出した。

### 第3遺構面

河川堆積層上面（標高約15.2m）が第3遺構面になる。1区東壁付近で灰黄色粘質土の落ち込みを検出したが、遺物の出土はなかった。この遺構以外は、旧河道となる。南隣接地の調査で確認された弥生時代後期から古墳時代前期の土器等を含む旧河道の続きと考えられるが、上層部分を掘削したのみで調査は終えており、遺物の出土はなかった。

### 3.まとめ

今回の調査では、3面の遺構面を検出し、第2遺構面でピット1基、第3遺構面で性格不明遺構1基を検出した。遺物は、旧耕作土層から土師器、須恵器が出土している。また、第1遺構面基盤層より古墳時代から平安時代と考えられる土師器片、第2遺構面基盤層より古墳時代と考えられる土師器片、須恵器片が出土した。南隣接地の調査と同様の遺構面を検出したと考えられ、今回の調査区にも同様の遺構面が広がっていることを確認することができた。

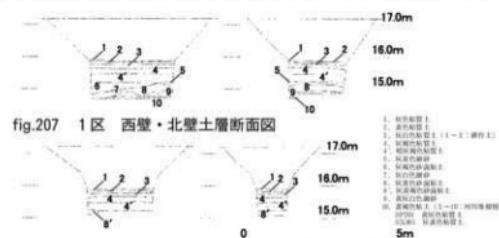
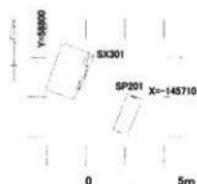


fig.206 1区・2区 遺構平面図

fig.207 1区 西壁・北壁土層断面図



### III. 平成26年度の保存科学調査・作業の概要

平成26年度に神戸市教育委員会で実施した保存科学業務について、概要を以下に記す。

#### 遺構の保存科学

旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道：遺構の取り上げ

平成27年2月、中央区京町80番地において共同溝埋設工事中、明治5（1872）年に竣工したとされる煉瓦造下水渠が発見されたとの届け出があった。これに対し、市教育委員会は記録保存を実施するとともに、その一部につき切り取り、保存することとなった。

下水渠は煉瓦造りの卵形管で、横断面は倒卵形を呈する。切り取り範囲は現地において検出された南北の全長17mのうち、南端部の最も保存状態が良い部分について、長さ約1.5m、幅約0.7m、高さ約0.9mの範囲を対象として設定した。これは下水渠本体と周辺土壌を一体として切り取るためである。切り取りは硬質発泡ウレタンフォームを用いて梱包し、取り上げることとした。

管を構成する煉瓦は上半については漆喰によってそれぞれが固定されてはいるが、取り上げ時の不意な衝撃などに耐え得るかは不可知である。下半は土台となる粘質土の上に積みあげているのみである。取り上げ時に崩落する恐れがあるため、管内面にアルミ箔、ポリエチレンフィルム等で養生をしたうえで発泡ウレタンフォームを充填した。その後、全面を木枠及び発泡ウレタンフォームで梱包し、地面と切り離すため、下部土囊にトンネルを穿孔し、木枠と発泡ウレタンフォームを充填して地面との離合作業を行った。その後、クレーン付きバックホーにより吊り上げ、4トントラックで埋蔵文化財センターに輸送した。



fig.211 下水渠検出状況



fig.212 出土状況記録作業



fig.213 発泡ウレタン梱包状況



fig.214 吊り上げ作業



fig.215 積み込み作業



fig.216 板保管状況

遺跡名	次数	分析項目	資料数
小路大町遺跡	5	珪藻化石	5点
		花粉化石	5点
		大型植物遺体	16個
		木材樹種同定	5点
		花粉化石	2点
大開遺跡	14	珪藻化石	2点
		寄生虫卵化石	2点
		大型植物化石	2 ブロック
		鉄製品製作関連遺物	19点
兵庫津遺跡	62	遺構土質調査	3 地点

表15 平成26年度自然科学分析一覧

# 付論. 小路大町遺跡第5次調査の古環境分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## はじめに

小路大町遺跡は、縄文海進の頃は海域であったが、その後海退が進み、弥生時代以降に生活の痕跡が認められるようになる。今回は弥生時代前期を中心とした古環境や生活の様子を調査する目的で、珪藻分析、花粉分析、種実分析、樹種同定、昆虫同定を実施する。

### 1 硅藻・花粉化石からみたII区の古環境

#### 1-1 試料

調査地点は、II区西部で確認された弥生時代前期の浜堤に伴う堤間湿地（SD08）部分である。試料は、調査担当者により堆積断面から不搅乱柱状試料として採取されている。調査地点の堆積層は、上位より第1層～第7層に区分されている。各堆積層の層相について、不搅乱柱状試料の層相に基づいて以下に示す。

第1層：砂・礫・偽礫などからなる現代の盛土である。

第2層：灰～オリーブ灰色を呈する淘汰の悪い細礫・粗砂混じり泥質砂からなる。著しく攪拌されており、初生の堆積構造は不明である。数mm以下の根成孔隙が確認される。耕作土と推定される。

第3層：灰色を呈する中粒砂～泥質砂からなる。人為的ないし生物擾乱により堆積構造は乱れている。下部は粗粒～中粒砂、上部は灰色を呈する砂質泥の偽礫・微小ブロックが混じる。

第4層：黄灰～灰黄色を呈する細粒砂～中粒砂からなる。柱状試料が破損していたため、詳細な堆積・土壤構造は不明であるが、破損していない部分では生物擾乱により著しく乱れている状況が確認される。

第5層：黒色を呈する腐植質泥（粘土）からなり、上部ほど泥勝ちとなる。生物擾乱が著しく、植物遺体はほとんど確認されない。下位層との層界は漸移的である。

第6層：黒色を呈する腐植質ないし有機質泥からなる。植物遺体が混じる細粒砂の葉理を数層準に挟在する。また、保存

の悪い木材（枝）遺体が混じるが、その他の植物遺体はほとんど確認されない。発掘調査時には本層から木製遺物が確認されている。本層の形成年代は、出土遺物から弥生時代前期と推定されている。

第7層は灰～暗灰色を呈する植物遺体が僅かに混じる細粒～中粒砂からなる。堤間湿地の基盤をなす堆積物であり、上部は生物擾乱が顕著で、腐植が集積している。

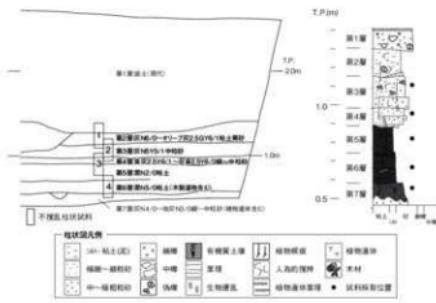


図1 試料採取位置

花粉分析・珪藻分析は、柱状図に示した第3層～第7層の5層準について実施する。

## 1-2 方法

### (1) 硅藻分析

堆積物は、湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行う。

その後検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い同定・計数した。珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot (1985～1991)、Desikachariy (1987)などを参考にした。

### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989)などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007)、三好ほか (2011)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものと示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

## 1-3 結果

### (1) 硅藻分析

結果は、表1に示す。分析を実施した5層準の試料は、いずれも珪藻化石があまり含まれておらず、産出をみたのは第3層および第7層の2試料のみである。第3層および第7層も産出個体数は少なく、両層とも50個体未満である。認められた化石の保存状態は、殆どは半壊しているだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態としては、極不良である。

表1 硅藻分析結果

層	名	生物相		地質	層位	
		篩別	pH		種名	組成
C3	Ostracode (Leptostoma) (Klein.) D.G.Mann	Dg+sm	acid	red	R	-
C3	Ostracode spp.	Dg+sm	acid	red	I	-
C3	Ostracode spp.	Dg+sm	acid	red	II	-
C3	Diplomia spp.	Dg+sm	acid	red	III	-
C3	Eunotus perkinsi var. undulata (Baltz) Bertalot	Dg+sm	acid	red	IV	-
C3	Eunotus perkinsi var. undulata (Baltz) Bertalot	Dg+sm	acid	red	RBD	2
C3	Fusaria spp.	Dg+sm	acid	red	2	-
C3	Fragilaria alata (Nitzsch) Lange-Bertalot	Dg+sm	acid	red	3	-
C3	Pseudosolenites granularis (Dill) Lange-Bertalot	Dg+sm	acid	red	3	-
C3	Gomphonema spp.	Dg+sm	acid	red	4	-
C3	Hausmannia amphioxys (Baltz) Grunow	Dg+sm	acid	red	RAD	-
C3	Hausmannia amphioxys (Baltz) Grunow	Dg+sm	acid	red	RAT	1
C3	Pseudosolenites spp.	Dg+sm	acid	red	5	-
C3	Schizothrix sp. (Baltz) Lange-Bertalot	Dg+sm	acid	red	R.T	1
C3	Spirulinella spp.	Dg+sm	acid	red	6	-
C3	其他	Dg+sm	acid	red	7	-
表1-1 硅藻分析結果	層	名	生物相	地質	層位	
層	名	生物相	地質	層位		
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	1	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	2	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	3	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	4	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	5	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	6	4
第3層	木本花粉	50	酸性	赤色	7	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	8	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	9	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	10	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	11	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	12	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	13	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	14	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	15	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	16	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	17	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	18	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	19	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	20	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	21	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	22	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	23	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	24	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	25	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	26	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	27	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	28	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	29	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	30	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	31	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	32	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	33	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	34	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	35	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	36	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	37	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	38	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	39	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	40	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	41	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	42	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	43	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	44	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	45	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	46	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	47	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	48	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	49	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	50	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	51	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	52	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	53	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	54	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	55	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	56	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	57	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	58	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	59	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	60	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	61	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	62	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	63	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	64	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	65	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	66	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	67	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	68	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	69	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	70	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	71	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	72	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	73	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	74	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	75	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	76	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	77	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	78	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	79	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	80	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	81	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	82	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	83	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	84	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	85	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	86	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	87	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	88	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	89	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	90	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	91	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	92	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	93	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	94	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	95	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	96	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	97	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	98	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	99	4
第7層	木本花粉	50	酸性	赤色	100	4

○：比較的よく見られる種類　△：比較的多く見られる種類　□：比較的多く見られない種類

1：内海底生種　2：近海底生種　3：遠洋底生種　4：深海底生種

○：現生種　△：絶滅種　□：既知種

## (2) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。第3層、第4層では花粉化石の産状が悪く、保存状態もやや悪い。検出された花粉化石についてみると、木本花粉ではツガ属、マツ属、スキ属、コナラ属アカガシ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められる。第4層からは、栽培種のソバ属も、僅かであるが認められる。

第5層～第7層では、花粉化石が豊富に産出し、保存状態も第3層、第4層と比較すると良好である。花粉化石群集の傾向は3試料とも

類似しており、木本花粉ではマツ属、スギ属、アカガシ属が比較的多く認められ、マキ属、モミ属、ツガ属、コナラ属コナラ属等を作う。また、層位的な産状をみると、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属などの河畔林、湿地林要素が、第6層、第7層で多く認められる。

草本花粉では、イネ科が最も多く産出し、ついでカヤツリグサ科が多く認められる。その他ではサナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。多産するイネ科には、栽培種であるイネ属に形態が類する個体(以下、イネ属型とする)も、確認された。また、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属なども水湿地生草本が、第6層、第7層で認められる。

1-4 考察

弥生時代前期頃と推定される第7層上部、および第6層・第5層の木本花粉化石をみると、モミ属、ツガ属、マツ属、スキ属などの針葉樹、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などの広

表 2. 花粉分析結果

本邦別	種	頭数				
		成年	未開	開	未開	開
マツコ属	マツコ	-	-	6	7	13
セイ属	セイ	-	-	27	21	26
ワタ属	ワタ	-	4	10	10	28
マツコ属等野草属	マツコ	-	5	58	24	30
マツコ属等野草属	マツコ	2	8	59	21	39
コガヤキ属	コガヤキ	-	-	11	11	22
カシ属	カシ	-	-	32	24	56
オモリイチゴガヤ科	オモリイチゴガヤ	-	-	5	5	10
オモリイチ	オモリイチ	-	-	-	-	-
サザンカ属	サザンカ	-	-	-	-	-
アサガホ属	アサガホ	-	-	-	-	-
ラクウソ属	ラクウソ	-	-	1	4	3
アサガホ	アサガホ	-	-	1	1	2
カシノ属	カシノ	-	-	2	2	4
ブナ属	ブナ	-	-	-	-	-
コカラクナコナツサ属	コカラクナコナツサ	-	-	16	19	34
コカラクナコナツサ属	コカラクナコナツサ	-	-	19	25	44
シジム属	シジム	-	-	4	4	8
シジム属	シジム	-	-	2	2	4
ニシキギ属	ニシキギ	-	-	2	2	4
カシノ属	カシノ	-	-	1	0	1
カシノ属	カシノ	-	-	1	0	1
ボクサナ属	ボクサナ	-	-	-	-	-
日本本邦	ガマ属	-	-	-	3	9
	サザンコガヤ属	-	-	-	3	3
	オモリイチ属	-	-	-	3	3
	イヌイチ属	-	-	-	3	3
	地柏イチ属	1	15	15	156	158
	カシワツバアサガホ	-	15	14	65	69
	イヌアサガホ	-	-	-	2	4
	アサガホ属	-	-	-	1	1
	サザンカ属	-	-	-	2	2
	ソバ属	-	-	-	2	2
	アザガホ	-	-	-	1	1
	ケンシロウ属	-	-	-	1	1
	アブリ属	-	-	-	1	1
	メヌ科	-	-	-	-	-
	カシナリコ属	-	-	-	-	-
	セイコ属	-	-	-	-	-
	ゴマツノ属	-	-	-	1	1
	ヨリヅル属	2	-	-	6	12
	オモリイチ属	-	-	-	1	1
	ナツキツバサ属	1	-	-	3	5
不明本邦	不明種	-	3	0	6	4
レジデント	レジデント	-	3	3	3	1
	ゾウマリ属	-	5	15	63	11
	ゾウマリソウ属	-	-	9	1	3
	アラタナヒロ属	1	-	-	-	-
	物語植物	31	117	266	166	112
合計		本邦在来種	2	25	219	241
		本邦栽培種	22	72	750	209
		不和化種	0	3	0	6
		シノニム種	40	122	225	123
		シノニム種	1	1	1	1
		物語植物	31	117	266	209

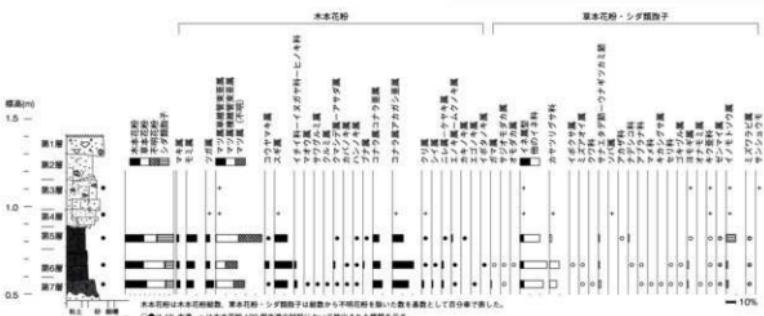


図2 花粉化石群集の層位分布

葉樹が多く認められる。このことから、アカガシ亜属、シイ属などの暖温帶性常緑広葉樹と、モミ属、ツガ属、スギ属などの温帶性針葉樹などが、後背地の植生を形成していたと推測される。また、伐採地や崩落地、海岸など、土地条件の悪い場所に多いマツ属も多く認められる。マツ属は花粉生産量が多く、実際の植生よりも花粉化石が高率となるが(Faegri and Iversen,1989)、後背の六甲山地は花崗岩で構成されており、風化による崩落が起きやすい点や、本遺跡が当時の海岸線に近かったことを考慮すれば、山地の二次林や海岸林としてマツが存在していたと考えられる。後述する種実や木材は、栽培植物や利用のための人為的な選択が行われているため、花粉化石から推定される植物相とは一致しないが、その種類構成は大きく矛盾していない。また、このような森林植生は松下(1992)等に示されている当時の古植生とも調和的である。

草本花粉をみると、イネ科、カヤツリグサ科が多く、サナエタデ節—ウナギツカミ節、ヨモギ属などを伴う。これらはいずれも、開けた明るい場所に草本群落を形成する「人里植物」を多く含む分類群であることから、調査地周辺の草本植生を反映していると思われる。下位では、ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属、ミズワラビ属などの水湿地生草本・シダ類が認められる。木本類でも、サワグルミ属、クルミ属、クマシテ属—アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属、エノキ属—ムクノキ属などの渓谷林、河畔林、湿地林などの種類が多く認められる。これらは浜堤背後の氾濫低地などに分布していたと考えられる。

第5層になると、基本的な木本類・草本類の種類は変わらないものの、河畔林要素の木本や、水湿地生の草本・シダ類の産出が少なくなる。また、層相も第5層では植物遺体をほとんど含まなくなる。これらのことから、第5層形成期には地下水位が低下し、土壤生成が進行するような堆積場へと変化したことが推定される。本層形成期には湿地周辺においてマツ属が分布を抜けた可能性がある。

第4層、第3層では、花粉化石の産出状況・保存状態が悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。第4層、第3層は、いずれも土壤生成が進行している層準を挟在することから、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が分解・消失していると考えられる。

一方、珪藻分析では、第3層と第7層から流水不定または止水性の *Eunotia* 属、*Pinnularia* 属および *Stauroneis* 属が若干認められた程度であり、他の第4・5・6層は無化石であった。

このような産状を示す原因としては、①堆積時に珪藻自体が少なかったまたは堆積速度が速いために取り込まれる量が少なかった、②堆積時・後に大半の殻が分解消失した等である。調査地点の各層の層相と検出された化石の保存状態からみて、②の堆積時・後に分解消失した可能性が高いと考えられる。堆積後の珪藻殻の分解消失については、堆積後の統成作用による物理・化学的な影響によるが、経験的に陸成層の場合、堆積場が水域ではない場所では、堆積時から堆積後にかけて、大気に曝されるとバクテリア等の影響により、分解が促進されることが知られている。

弥生時代前期の第7層から低率に検出された種群は、そのほとんどが止水性で湿地性と思われる種と陸生珪藻である。このような群集の構成とそれらの産状(産出率が低いこと)

を考慮すると、堆積時は基本的には広範な水域であったとは考えにくく、低地部等にみられる湿地環境下にあったものと推定される。ただし、湿地とはいっても、陸生珪藻が伴うことからすると、基本的に本地点は地下水位が低く、土壤生成が進行する時期を挟在していた可能性が示唆される。このことは、花粉化石が示す堆積環境とも矛盾しない結果である。また、第3層も第7層と同様に検出された種群は、そのほとんどが止水性で湿地性と思われる種と陸生珪藻からなるが、陸生珪藻が比較的多産している点で多少異なる。層相を踏まえると、堆積後に好気的な環境におかれていた可能性が高い。

## 2 弥生時代前期の出土種実の同定

### 2-1 試料

種実同定試料は、弥生時代前期とされるII区西半の黒灰色粘土より2個(S-1)、IV区南半の黒褐10YR2/2粘土より4個(S-2)、IV区南半の黒褐10YR2/2粘土～その下層(S-3)より10個出土した種実遺体で、合計3点16個である。

### 2-2 種実分析

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、伊藤(2001)、徳永(2004)、鈴木ほか(2012)、宮國(2014)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフンで結んで表示する。また、主な種実遺体の大きさをデジタルノギスで計測した結果を一覧表に示す。

同定後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し、返却する。

### 2-3 結果

結果を表3に示す。被子植物4分類群(広葉樹のクヌギ・アベマキ、クリ、スタジイ、草本のヒヨウタン類)16個の種実遺体が検出される。

### 2-4 種実遺体からみた植物利用

弥生時代前期とされる各地点より出土した種実遺体には、栽培種のヒヨウタン類の果皮片が確認された。IV区南半の黒褐10YR2/2粘土から確認されたヒヨウタン類は、果実が食用や容器等に利用される。周辺で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、遺構内への投棄または埋納などの人為的行為に由来する可能性がある。

栽培種を除いた分類群は、堅果類のクヌギー・アベマキ、クリ、スタジイが確認された。II区西半の黒灰色粘土から果皮片が確認されたクリと、IV区南半の黒褐10YR2/2粘土～その下層から果皮片と炭化子葉が確認されたクヌギー・アベマキは、丘陵や山地に生育する二次林要素の落葉高木である。IV区南半の黒褐10YR2/2粘土～その下層から果実が確認されたスタジイは、

表3. 種実同定結果

番号	遺物名	出土区名	出土層級	時代	分類群		部位	状態	個数	計測値		備考	
					基準	状態				長さ (mm)	幅 (mm)		
S-1	R-053	II区西半	黒灰色粘土	弥生前期	クリ	果皮 破片	2	18.1	*	13.2	*	0.7	複合、着色既存
S-2	R-79	IV区南半	10YR2/2粘土	弥生前期	ヒヨウタン類	果皮 破片	0	-	-	22.0	*	0.9	同一個体の可能性
S-3	R-07	IV区南半	10YR2/2粘土～その下層	弥生前期	クヌギ	果皮 破片	0	-	-	21.2	*	0.7	「黒褐色充填」(厚さ12.3mm) 「黒褐色充填」
					アベマキ	子葉 完形 廃化	1	15.1	*	14.1	*	15.9	無
					スタジイ	果実 完形	1	14.5	*	9.6	*	5.7	無

用計測はデジタルノギスを使用。

丘陵や山地に生育する常緑高木で、本地域に分布する常緑照葉樹(照葉樹)林の主要構成種である。これらは、当時の本遺跡周辺域の森林に生育していたと考えられる。

これらの堅果類のうち、クリとスダジイは子葉が生食可能である。クヌギやアベマキも子葉が食用可能であるが、ドングリ類のなかでも特にあくが強いため、何度も茹でこぼしたり、灰汁を加えるなどの高度なあく抜き技術を要する。出土堅果類には、人間による直接の利用の痕跡は認められないが、上述のヒヨウタン類とともに当時利用された可能性は充分考えられる。また、クヌギーアベマキの子葉は炭化していることから、何らかの理由により火を受けたと考えられる。

### 3 木製品の樹種同定

#### 3-1 試料

樹種同定試料は、弥生時代前期の遺構から出土した木製品27点(W-1~27)である。試料の詳細は結果とともに表に記す。

#### 3-2 方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

#### 3-3 結果

樹種同定結果を表4、5に示す。木製品は、針葉樹2分類群(コウヤマキ・ヒノキ)と広葉樹14分類群(ハンノキ属ハンノキ亞属・コナラ属コナラ亞属クヌギ節・イチイガシ・コナラ属アカガシ亞属・スダジイ・ムクノキ・ケヤキ・クスノキ・クスノキ科・ツバキ属・サカキ・リンボク・ムクロジ・トチノキ)に同定された。

#### 3-4 考察(木材利用について)

弥生時代前期の木製品には、合計16種類が認められた。同定された各種類の材質をみると、針葉樹のコウヤマキとヒノキは、木理が直角で割裂性・耐水性が高い。広葉樹のハンノキ属・クヌギ節・イチイガシ・アカガシ属・スダジイ・ムクノキ・ケヤキ・ツバキ属・サカキ・リンボク・ムクロジは、比較的重硬で強度

表4. 樹種同定結果

番号	遺物番号	出土地区	遺構	解説	基種	時期	種類
W-1	W-2-8-1	Ⅱ区K	SD08	黒,NL,中軸上	楓身	弥生時代前期	イナイガシ
W-2	W-2-8-2	Ⅱ区K	SD08	黒,NL,中軸上	楓柄	弥生時代前期	サカキ
W-3	W-41	Ⅱ区K	SD08	黒,NL,中軸上	削物	弥生時代前期	ムクノキ
W-4	W-47	Ⅱ区K	SD08	黒,NL,中軸上縁下層	管器	弥生時代前期	ランボク
W-5	W-53	Ⅱ区K	SK07		板	弥生時代前期	ヤマモ
W-6	W-23	Ⅱ区K	SK07		楓身	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亞属
W-7	W-43	Ⅱ区K西端	黒,NL,中軸上	丸札	弥生時代前期	ムクロジ	
W-8	W-48-2	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	楓柄	弥生時代前期	ムクノキ	
W-9	W-48-3	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	板	弥生時代前期	ムクノキ	
W-10	W-48-4	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	楓柄	弥生時代前期	ムクノキ	
W-11	W-48-5	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	板	弥生時代前期	ムクノキ	
W-12	W-48-7-2	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	板	弥生時代前期	コナラ属アカガシ亞属	
W-13	W-48-9	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	板	弥生時代前期	ムクノキ	
W-14	W-49	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	削物	弥生時代前期	アズキホ	
W-15	W-53-30	Ⅱ区K南半	合合オリーブ形環状ノット	楓身	弥生時代前期	フハト属	
W-16	W-53-31	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	シノノキ属・ハンノキ亞属	
W-17	W-53-31	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管器	弥生時代前期	アズキホ科	
W-18	W-53-32	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	板	弥生時代前期	スダジイ	
W-19	W-53-33	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	板	弥生時代前期	コウヤマキ	
W-20	W-53-34	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	板	弥生時代前期	クスノキ科	
W-21	W-53-35	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-22	W-53-36	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-23	W-53-37	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-24	W-53-38	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-25	W-53-39	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-26	W-53-40	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	ムクノキ	
W-27	W-53-45	Ⅱ区K南半	黒丸10Y2/28H	管	弥生時代前期	コウヤマキ	

が高い。クスノキは、やや軽軟な部類に入り、耐朽性・防虫性が高い。トチノキも軽軟で強度と保存性が低い。クスノキ科には、常緑と落葉の種類とがあり、高木から低木まで含まれ、木材もやや重硬なものから軽軟なものまで材質の幅が広い。

今回の木製品は、伊東・山田（2012）の木器分類を参考にすれば、濃厚土木具（鍬身・鍬柄・農具？）、容器（削物・盤・容器）、土木材（杭）、施設材・器具材（割板・板・角棒・丸棒・棒）に分けられる。器種別の種類構成を表5に示す。

農耕土木具のうち、鍬身はイチイガシ、アカガシ亜属、ツバキ属、柄はサカキに同定され、いずれも強度の高い木材を選択したことが推定される。伊東・山田（2012）のデータベースによれば、兵庫県内で弥生時代前期の鍬について樹種を明らかにした例は、丁・柳ヶ瀬遺跡の2例、戎町遺跡第1次の3例、大開遺跡第7次の5例の合計10例ある。形態の分からぬ2点を除く8点が直柄鍬身であり、形態不明も含めた10点全てがアカガシ亜属に同定されている。今回の結果のうち、イチイガシやアカガシ亜属の利用は、既存の調査例とも調和的といえる。一方、ツバキ属については、これまでに確認例が知られていないが、今回の結果からアカガシ亜属と共に利用されたことが推定される。W-2の柄は、W-1の鍬身に組み合わさる。柄に確認されたサカキは、小径木であり、最低限の加工で柄として利用できること等が利用の背景に考えられる。なお、伊東・山田（2012）のデータベースでは、兵庫県内の弥生時代前期の鍬柄は掲載されていない。今回の結果は、弥生時代前期の鍬身と鍬柄の木材の組み合わせが確認できた点で重要な資料である。農具？は、器種は不明であるが、アカガシ亜属が利用されている点から強度を要する器種・部位が推定される。

容器では、削物にムクノキとクスノキ、盤にハンノキ亜属、容器にクスノキ科とリンボクが認められ、軽軟な木材と比較的重硬な木材とが混在して利用されている。兵庫県内の弥生時代の容器としては、丁・柳ヶ瀬遺跡の鉢がクスノキ、高杯がケヤキ、片引遺跡の壺がヤマグワに同定されている。今回の結果では、これまでに報告されていない樹種が確認され、これらの種類も容器類に利用されていたことが推定される。器種別の木材利用の検討等が今後の課題として残される。

土木材の杭は、ムクロジであった。弥生時代前期の杭は、戎町遺跡第1次でイヌマキ、アカガシ、カエデ属、コナラ亜属、コナラ節、サカキ、シイノキ属、ツブラジイ、スダジイ、ハインノキ属、北青木遺跡でマツ属、ヤナギ属、アカガシ亜属、岩屋遺跡でクヌギ節、ヤナギ属？、カヤが報告されている（伊東・山田、2012）。ムクロジはこれまでに確認されていないが、今回の結果から利用されたことが推定される。ムクロジは森林の主要な構成種ではなく、材質的にも選択的に利用したとは考えにくく、遺跡周辺に生育していた樹木を利用したと考えられる。

施設材・器具材は、板と棒に分けられる。板材のうち、割板はヒノキとコウヤマキであり、割裂性が高く、分割加工が容易な木材を利用したことが推定される。板は、コウヤマキ、ヒノ

表5. 器種別種類構成

樹種・若葉	直柄		斜柄		削物		盤		容器		施設材・器具材		合計
	鋤身	鍬柄	農具？	削物	盤	容器	杭	割板	板	外枠	内枠	棒	
コウヤマキ													2
ヒノキ													8
コウヤマキ													1
フジ													1
イチイガシ	1												1
アカガシ亜属	1			1									2
スダジイ													1
スルノキ													1
カエデ													1
マツ													1
クスノキ													1
クスノキ科													2
ツブラジイ	1												1
サカキ													1
リンボク													1
ムクロジ													1
ヨロイ													1
合計	3	1	1	2	1	2	1	3	1	1	1	2	27

キ、スダジイ、ケヤキ、クスノキ科、トチノキが確認され、割板よりも利用される樹種が多い。このうち、コウヤマキとヒノキについては、割板と同様に加工性等から利用されたことが推定される。クスノキ科やトチノキも切削などの加工性から利用された可能性がある。一方、スダジイとケヤキは、強度が高いことから、加工性よりは強度を要する器種・部位に利用された可能性がある。

棒では、角棒にヒノキ、丸棒にツバキ属、棒にヒノキとクヌギ節が確認された。板と同じく、ヒノキは加工性、クヌギ節やツバキ属は強度等が利用の背景に考えられる。

#### 4 昆虫同定

##### 4-1 試料

試料は、S-4、S-5の2点である。試料の詳細は結果とともに表に記す。

##### 4-2 方法

双眼実体顕微鏡等を用いて種類を同定し、分析後は、送付容器に戻し保管する。同定に関しては東京農業大学松本浩一氏の協力を得た。

##### 4-3 結果

S-4、S-5共に同種で、コアオハナムグリである。S-4が左上翅、S-5が右上翅で、ほぼ同一サイズであることから、同一個体の翅の左右ではないかと推定される。コアオハナムグリは、日本、中国、インドシナに分布するハナムグリ類中の普通種。近縁種とは上翅の点刻が馬蹄状を呈すること、側縁後方の斑紋が太いこと、後方中央寄りの斑紋が「へ」の字状を呈する事により区別できる。平地から低山の各種花に集まり花粉と花蜜を摂食するが、特にキク科・バラ科・エゴノキ科が多く、またシイ・カシ類の樹液にも集まる。

#### 引用文献

- Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Sapropelous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.  
安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73~88.  
Desikachari, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates : 40 1-621.  
Erdtman G., 1952, Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksell, 539p.  
Erdtman G., 1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II), 147p.  
Feagri K. and Iversen Johs., 1989, Textbook of Pollen Analysis. The Blackburn Press, 328p.  
林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.  
Horst Lange-Bertalot., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA : Annotated diatom micrographs. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 pgs.  
Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der übrigen Lander Europas sowie der angrenzenden Meeressgebiete. In Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.  
Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 1

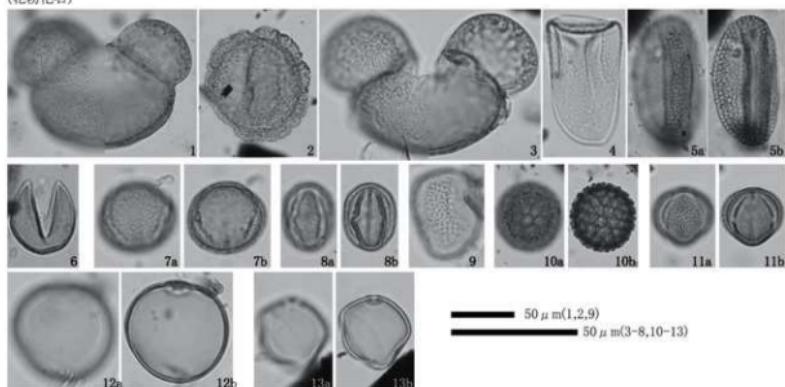
- 5, 131-809p, 1-155p, 274-349p.
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. u under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. u under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzende n Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊藤良永・堀内誠示,1989,古環境解析からみた陸生珪藻の検討 ——陸生珪藻の細分——. 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17.
- 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I .木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II .木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III .木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV .木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V .木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.
- 伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.
- 小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, 9-44.
- 小杉正人,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,1-20.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol. 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa , 2(1) : 876p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Süsswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.
- 松下まり子,1992,六甲山系の変遷、「六甲山の植物」,神戸新聞総合出版センター,168-177.
- 三宅 尚・中越信和,1998,森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
- 宮國晋一,2014,どんぐりの呼び名事典.株式会社世界文化社,111p.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標識 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第1 2.13集,91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会, 678p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IA WA による光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海 泰弘 (日本語版監修).海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子 と果実—形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種—.誠文堂新光社,272p.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子・化石の研究法.共立出版株式会社,50-73.
- 徳永桂子,2004,日本どんぐり大図鑑.偕成社,156p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光 学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修).海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Feature s for Hardwood Ident

図版1 珪藻化石・昆虫遺体・花粉化石・種実遺体

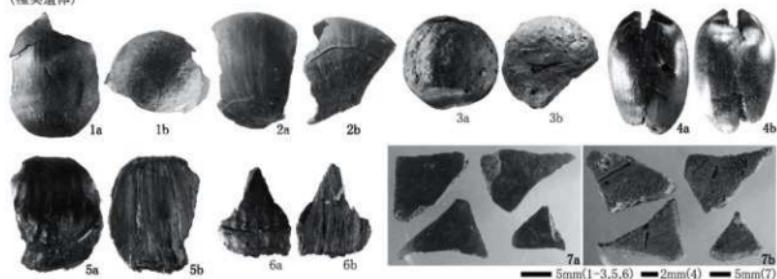
(珪藻化石)



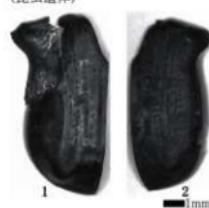
(花粉化石)



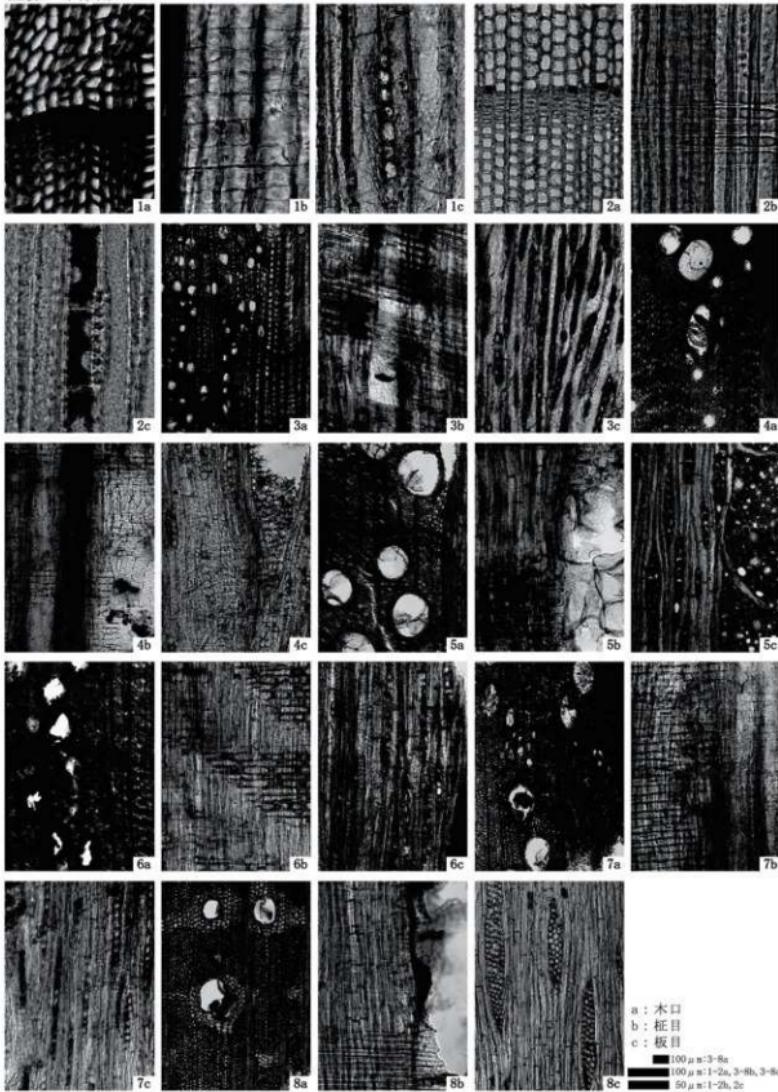
(種実遺体)



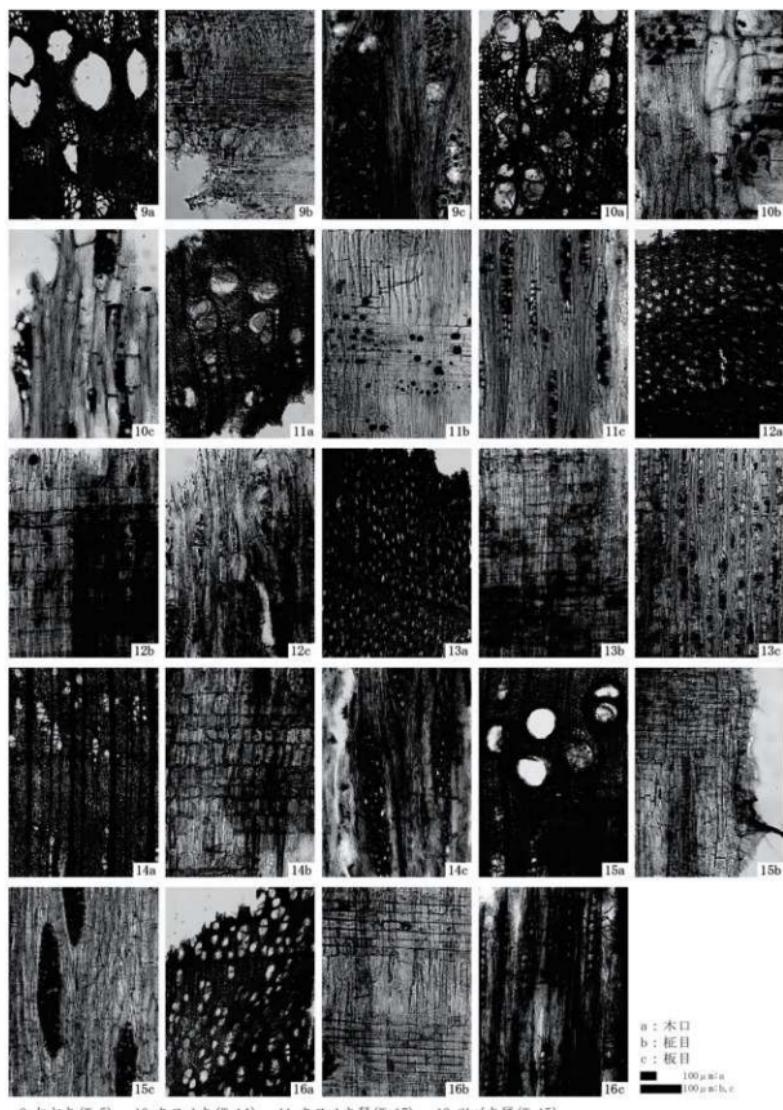
(昆虫遺体)



図版2 木材(1)



図版3 木材(2)



9. ケヤキ (W-5) 10. クスノキ (W-14) 11. クスノキ科 (W-17) 12. ツバキ属 (W-15)  
13. サカキ (W-2) 14. リンボク (W-4) 15. ムクロジ (W-7) 16. トチノキ (W-13)

a : 木口  
b : 柾目  
c : 板目  
■ 100 μm/a, b  
■ 100 μm/c



## 平成26年度 神戸市埋蔵文化財年報

---

平成29年3月 印刷

平成29年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078（322）5799

印刷 株式会社 興文社

TEL 078（924）9800

---

